

作業科学研究

Japanese Journal of Occupational Science

第3巻 第1号

2009年11月

巻頭言

作業のメガネ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・村井 真由美 1

第12回作業科学セミナー佐藤剛記念講演

作業を行っている患者さまは元気
 ～そのためには作業療法士はなにをすべきか～・・・・・・・・中村 春基 2
 作業の力：作業療法士の反省を作業科学の視点で分析する・・・小田原 悦子 9

第12回作業科学セミナー特別講演

Astrid and the Japanese Cherry tree: A reflection on transformation and occupation
 ・・・・・・・・・・・・・・・・Staffan Josephsson 14

研究論文

作業の意味を考えるための枠組みの開発・・・・・・・・吉川 ひろみ 20
 自分らしい人生を作業で描くプロセス・・・・・・・・岡 千晴・他 29

資料

アリソン・ウィックス (Alison Wicks) 講義録
 ～私にぴったり：作業科学がいかに見方を変えたか～・・・・吉川 ひろみ 36
 Occupational presence を考える：作業従事が導く心理的な変化・・・近藤 知子 39
 第12回作業科学セミナー抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
 第9回作業科学セミナー抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

投稿規定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73

作業のメガネ

村井真由美

介護老人保健施設 愛と結の街

作業科学研究第3巻の編集作業をしていると、県立広島大学の吉川ひろみ氏の寄稿より「作業のレンズ」と称した大きなメガネをかけているユーモラスな写真を発見した。作業科学を知る、学ぶということはまさにこの「作業のレンズ」を通して事象を見る状態になることであることを改めて認識した。

私は2003年に大学院を修了し、今の職場に就職した。理由は作業療法士が普通に勤務している場所で作業科学の知識を本当に生かせるかどうか身をもって実験したかったからである。大学院時代も非常勤の作業療法士として働いていたが疑問を持つことなく、現場が求めるままに動いていた。今の職場の作業療法士は私ひとりである。どのようにしていくか。

まず変わったことがクライアントを見る目だった。作業科学を知る前はまず疾患、障害ありき、いかにクライアントの障害を調べ、見解を述べるところから始まったのだが、作業科学を学び、一息ついた後は、不思議とクライアントがどこの誰で、どのような作業はできるが、どの作業が困難か、これからどのような作業がしたい、できるようになりたいと思っているのか、というように考えるようになった。過去の私の優先順位一番だった疾患や障害は作業遂行上のクライアントの問題として考える一因としての位置づけとなった。私のクライアントの評価や説明の切り口について同僚である理学療法士や言語聴覚士には若干違和感があったようだ。利用者中心の考えを元とした介護保険領域ではとてもやりやすい。今となってはこの見方を変えることはできず、たまに県士会等の事例研究等を聞くと不思議な、何だかいたたまれない気持ちになるようになった。これも作業のメガネをかけてしまったからであろう。

作業のレンズを通すと世の中の情勢も作業を通した見方になるような気がする。例えば、不況、失業の問題。テレビである国の政権が交代し、失業者が増えた、というニュースが流れた。画面には広場に集まる市民の姿が映し出されていた。仕事がないということ事態大きな問題である。市民の姿を見て思うのは、朝目覚めてからすること、行くところがないのはさぞかしつらいだろう、ということである。無職の人が犯罪を、というニュースを聞くと被害者のことを思うと同時に、容疑者はすることがなくてつらかったのかも知れない、とつい考えてしまう癖がついてしまった。それは私が大学院を修了して2ヶ月間無職だった経験から思うことである。忙しい日々から解放され、ウィークデーに繁華街に行き、昼まで寝、夜更かしし、という生活を送っていた。最初は楽しくて仕方なかったが次第に増えることはないが、減る一方の所持金、誰に何も言われたい、頼られない生活を送ることは自分の存在がないような気持ちがしてきた。次第に気持ちはすさみ、自由生活に別れを告げ、就職した。たまに自由生活が恋しくなる時があるが、自分の存在がないようなあの何とも言えない恐ろしい気持ちはできれば経験したくないと考える。無職の日々は作業の意味を身をもって感じた貴重な経験だった。

作業のメガネは作業科学を知れば知るほどバージョンアップしていく。5年前の自分と今の自分を比べれば明らかに違うと認識している。これからどんなフレームの、どんな大きさの、どんなレンズのメガネに変化していくのだろう。メガネをかけることで作業を必要としている方の力になりたい、いい仕事がしたい、一作業療法士としてメガネ磨きに余念がない今日この頃である。

作業を行っている患者さまは元気 ～そのためには作業療法士はなにをすべきか～

中村 春基

兵庫県立西播磨総合リハビリテーションセンター

1. はじめに

32 年間多くの患者さまの治療に携わってきた中で、作業療法の素晴らしさ、作業の持つ「力」を再認識している。今回の講演では、作業療法士に作業療法をお話するのは釈迦に説法であるが、そのような患者さまとの出会い、感じたことを披露し、作業療法について議論ができれば幸いである。

2. 自己紹介

私は現在、兵庫県立西播磨総合リハビリテーションセンターに勤務をしている。当センターはリハビリテーション病院、研修交流センター、ふれあいスポーツ交流館からなっており（図 1）、私は、作業療法士 17 名、理学療法士 19 名、言語聴覚士 5 名、音楽療法士、園芸療法士、心理判定員各 1 名の計 44 名のリハスタッフの部長職にある。臨床 8 割、管理職 2 割の割合で業務は行っており、出来るだけ臨床業務を行うよう努めている。管理業務に専任するよう指摘を受けているが、臨床が出来なかったら「辞める」とダダをこねて、臨床にしがみついているしだいである。「臨床が一番」である。

図 2 は、地域と病院を結ぶ部署である、総合相談・地域連携室の作業療法士がフォローアップ時撮影した、退院された患者さまの写真である。このような写真をみると、臨床を離れられないのである。

3. 担当で患者さまの生活が変わる

－作業療法を問う 作業療法士に問う－

図 3（W さん）と図 4（T さん）は同じ損傷レベルの頸髄損傷である。写真で分かるように、二人の生活は大きく違っている。W さんは、一日中ベッドで寝たきりの生活で、座位をとると起立性低血圧で座位保持時間 10 分程度、上肢には変形拘縮がみられ、脊柱の可動性も無く、右股関節は頸部骨折後未治療により偽関節を有している。ADL は全介助で、テレビを見る、音楽を聴くなどして過ごしている。終日母親が付き添い、心配で外出も控えて

いるとのことであった。なお、W さんは、約 1 年の入院中、リハビリサービスは受けており、変形予防のスプリントも所持していた。しかし、ADL 訓練は殆ど受けておらず、食事も自分でしたことは無かったとのことであった。

一方、T さんは 1983 年に受け持った方で、ADL 訓練、住宅改修、自動車運転操作練習などを行わない退院された事例である。この 2 つの事例を比較すると、入院期間中の作業療法がいかに大切か再認識させられる。自分の行っている臨床を見直す原点になっている。

4. ニーズに答えているか、答えられるか

1) 頸部の運動しか残存しない頸髄損傷者から「自分で食事がしたい」と要求されたら？

現在は、マイスプーンという用具が上肢全廃の方の食事用具として販売されており、それを試す作業療法士も多いと思う。しかし、上記の要求を受けたのは 1984 年で、そのような用具もなく、何と無茶な要求だと思った。しかしよく考えると、図 5 で示すように、数々の自助具を使い一部の ADL は自立できた経験の延長で考えたら当然の要求とも言えた。

図 6 は、制作費 2000 円、制作期間 1 週間の食事用自助具である。解決の手順は、食事動作の分析、残存能力の把握、補完すべき機能、用具の条件などを列挙し具体的な形にしていった。長柄のスプーンとスプーンを固定する機構、口に運ぶ機構を持たせた自助具である。この用具を使い、自分で食べたときの T さんの表情は今でも忘れられない。しかし、この T さんが訴えた要求の中で、「歩きたい、立ちたい、車を運転したい」の要求には応えることが出来なかった。現在では、これらの要求に対しても、工学技術を用いればほぼ可能なものもあり技術の進歩には驚かされる。

2) 腕を振って歩きたい。肩義手の常識では考えられないのだけれど？

切断の患者さまを担当した機会はない作業療法士が多



図1 センターの構成



図4 前ケースとほとんど同じ損傷レベル
車への乗車の様子



図2 退院後の様子



図5 福祉機器の活用



図3 頸髄損傷者の様子



図6 食食用自助具

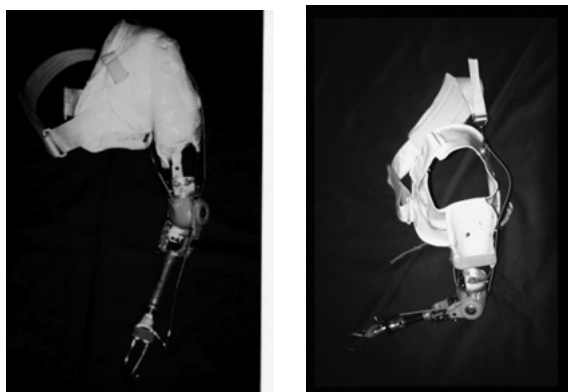


図7 引き抜き損傷 切断例の上腕仮義手
右 従来型 左 装着に配慮した仮義手



図10 肩義手の使用の様子用義手で、能動義手の有効性



図8 本義手：肩継ぎ手にAFOのジレット継ぎ手使用



図9 上腕部の振り動作機構を付けた肩義手

いと思う。義手の処方割合の調査によると約90%が装飾用義手で、能動義手の有効性については否定的な意見が多い。しかし、兵庫県立総合リハビリテーションセンターでの取り組みでは、約半数の利用者が能動義手を使用しており、能動義手の利用率が低いのは、医師、作業療法士、義肢装具士などサービス提供者側の問題であると思われる。そのような中で、標題の要求が投げかけられた。

通常、肩継ぎ手には、屈曲外転継ぎ手が用いられる。この継ぎ手は、摩擦により上腕部を固定するもので、当然、歩行中に腕をふる動作は出来ない。Kさんの要求は、外泊練習の中から出た内容で、その他に、上腕、前腕幹部が柔らかい素材にして欲しい等が義手の条件として挙げられた。

図7はそれらの条件を満たした義手の特徴を示す。肩継ぎ手の機能として、随意固定、フリーの状態を作れること、自然な腕の振りが出る条件が挙げられた。用いた肩継ぎ手は、ロック、アンロックが可能な肘のブロック継ぎ手を用い、腕の振りを出すために、取り付け角度を伸展30度にした。また、これらの操作は、健側で任意に行なえるように「腋引き式」とした。図8はその義手の使用場面である。肩継ぎ手の機構に回旋機能加わり、到達範囲が拡大し有効な義手となった。

図9は、引き抜き損傷全型の事例でカウザルギーのため、上腕切断を行い作製した上腕義手である。この義手を製作するまでに、仮義手により試行錯誤を繰り返し、患者さんの意見を聞き、残存機能を考慮して、ソケットの形状、肩継ぎ手の種類、装着方法など検討を重ね、作製した仮義手が図10である。

このように、ステレオタイプで考えがちな義手でさえ、利用者の思いに耳を傾けると、様々な工夫が必要で



図 11 和式の生活様式の動作指導の様子

あり、一つとして同じ義手は存在しないのである。文献や教科書のレベルで満足しては、患者さんのニーズには応えられないと思う。

5. その人らしい生活の再構築

私は、職場を空けることが多いため、日頃の臨床は外来での患者さまが多い。そこで聴く患者さまの言葉は実に示唆に富んでいる。「昨日同窓会に行つて、掘り炬燵だったため、炬燵から出る事が出来なかった」「葬式で正座が出来なかった」「友達の家に行き、畳に座れなかった」「1人で留守番中、車いすから落ち、パニックになり起き上がれなく、3時間床に寝ころんでいた」等々話はつきない。このような話、どのように感じましたか？

1) 住宅改修を行い、車いすの生活様式をつくっていませんか？

患者さまが住む世界は、和式の生活様式であることが殆どで、洋式の生活をマネジメントすることは、地域生活をおくる上では、「障害」をつくっているのではないか？そんな中から生まれた訓練が、和式動作の高頻度訓練と在宅生活での定着化である。図 11 はその練習場面である。大切なことは、無意識にその動作ができるまで、頻回に練習し、また、定期的にその動作を確認することである。何よりも、日常生活の中で、立ち上がりやいざりなどの動作を習慣化させる事である。在宅だけで患者さまは生活しているのではなく、料亭での食事や、交通機関の利用、温泉などへの外出など様々な生活があり、病院、在宅での作業療法はその可能性を「見せる」「体験させる」「自信をつけさせる」ことが重要な役割である。



図 12 在宅生活をイメージした主体的作業の取り組み (1)



図 13 在宅生活をイメージした主体的作業の取り組み (2)

2) 作業療法の考え方を患者さまへいかに伝え、実施してもらおうか

最近取り組んでいる、標記の取り組みを紹介する。名前はIさん、78歳、右片麻痺、軽度のブローカー失語、立位保持はつかまり立ちで可能、歩行は不可、右上下肢機能はBSR2と麻痺は重篤なケースである。

入院直後から、患者さまと在宅生活をイメージし、そのためには、身体の機能としては何が不足しているか、どんな訓練メニューにするか、訓練回数や段階的な目標の設定等々話し合い、相互で確認しながら作業療法を立案し実施した。図 12 と図 13 は、その作業療法場面である。ADL 動作訓練に加えて、調理活動を週 1 回、お茶、お化粧、買い物訓練、余暇活動としての玉のれんづくり、スプールウイービングなど様々な作業を二人で考えて実施していった。調理活動では、在宅での実施を考慮して、

ご主人、ケアマネージャやヘルパーをも巻き込んで食事をつくっていただいた。

この事例は実に多くのことを教えてくれた。一つには、利用者本位の作業療法という内容や方法を示唆してくれたこと。二つ目は、作業療法を患者に語っていなかった事への気づきを与えてくれたこと。何よりも、患者さん自らが主体的に作業を実施し、作業を行うことで元気になるという感覚を持ってくれたこと等である。

入院時の紹介状には、軽いうつ傾向との記載もあったが、周りも驚くほどに表情が明るくなり、訓練時間以外でも積極的に手芸に取り組むようになり、退院に至った。在宅では、家屋改修プランと本人の能力との差（調理が出来るようになるまで、改善するとはご主人がおもっておらず、段差の改修がなされていなかった）のため、調理は部分的な実施であったが、概ねイメージ通りの生活をおくっている。玉のれんは継続され、完成後は当センターに寄贈され、現在、作業療法室に飾ってある。

もう一步考え方を進めると、作業療法を分かりやすく説明し、作業療法を共有することで、患者さん自らが作業療法を行うようになるという事である。多くの患者さんが、退院後、環境や生活形態の違いから多くの困難に出会うはずである。そんなときに利用できる考え方の一つとして、作業療法は大きな武器となるのではないかと。病院や施設で行う作業療法は、そのために学習体験として位置づけたら新しい作業療法の展開があるかもしれない。「作業療法を語り、理解していただき、患者さん自らが作業療法を行えるようになる」これが、探究の作業療法の成果ではなからうか？

3) 様々な作業活動がその人らしい生活を保障する

以下に紹介する写真(時 14-19)は様々な作業療法場面である。それぞれに作業を行えるようになるまで、時間や訓練内容は違うが、概ね、身体機能の回復訓練を保証し実施する中で、患者さん自らが作業を始めている。ニーズの変化を追うと、はじめは生命、次は身体の動き、日常生活、地域社会での生活、仕事、余暇、趣味などへ変化している。作業療法もこれに寄り添い、あわてず、行きつ戻りつしながら実施していくと、最終的には「作業」に行きついている。そしてそれは、その後の生活に反映され、「作業をおこなっているかたは元気」という言葉として醸成されるのである。

作業に足り組む一人一人の表情に注目していただき、主体的な作業、楽しい作業、未来につながる作業、慰めてくれる作業、など、それぞれ感じていただけたら幸いである。



図 14 在宅生活をイメージした主体的作業の取り組み (3)



図 15 在宅生活をイメージした主体的作業の取り組み (4)



図 16 在宅生活をイメージした主体的作業の取り組み (5)



図 17 在宅生活をイメージした主体的作業の取り組み (6)

絵を描き始めて3年、個展を開くまでに 篠山の円僧画伯



図 19 在宅生活をイメージした主体的作業の取り組み (8)

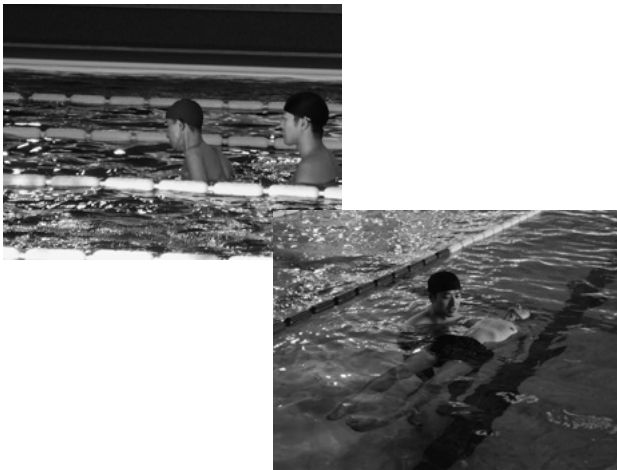


図 18 在宅生活をイメージした主体的作業の取り組み (7)



図 20 患者さん自らが開発した卓球、作業療法の役割は？

6. その人の作業を支えていたか

今から紹介する話は実は失敗談である。しかし、結果的には元気な関西の「おばちゃん」を取り戻せたし、今でも、年に2回は尋ねてきてくれる仲間の1人である。

名前はMさん、前病院で外来担当となり8年ぐらいのお付き合いである。退院時の移動は4点杖で、SLB装着、近位監視レベルで2ミリの段差につまずき、危うく、転倒するような状態であった。また、重度の半側視空間失認があり、食事では無視からおぼんの左半分を残すこともみられた。

このMさんがある時、「先生、卓球がしたい。何とかならんとね」と相談をして来た。私としては、転倒歴もあり、4点杖の状態だったので「あぶないからヤメトキ」とアドバイスをした。しばらくして、持ってきた写真が図20の左の写真である。「ガーン」と金槌で頭をたたか

れたような衝撃を受けたのを覚えている。

何故相談されたとき、一緒に卓球をしてアドバイスをしなかったのか。転倒や無視の影響など、作業療法士として多くの仕事が出来たはずなのに等々悔やんでも後の祭りである。

その後、センターの身体障害者体育館を紹介し、本人の強い意志で定期的な卓球教室が開催されるようになり、大会にも参加するようになっていく。卓球を通して仲間もできて、卓球は生活の一部となっている。しかし、初めの段階で転倒していたら、きっと周囲は卓球を止めさせていただろうし、いまの活動的な生活はなかったことであろう。作業療法士として、卓球という作業を出来るように支援すべきところを、転倒、視空間無視などの状況を勝手に判断して、「できない」と決めつけていたところに、大きな落とし穴があった。このような失敗は、数限りなく経験してきたのに、「つい、またやってしまった」

という思いである。障害というラベルをはり、その人の、作業の機会をつみ取ってしまうところであったのである。危険なことである。なお、Mさんは、現在は調理、旅行、水泳など様々な作業に挑戦し、生き生きと生活をおくっている。

卓球で興味ある現象をひとつ紹介します。消える魔球があるとのこと。ご主人談、「初め何をいつているのか全然分からなかった。左からくる玉は全く打ち返せなかった」とのこと。半側視空間失認は改善しているが、今でも状態が悪いときは、消える魔球が出現するとの事である。

7. セイフティーなマネジメントからリスクなマネジメントへ

Mさんの事例は、新たな作業療法モデルを提示している。在宅生活では多様な環境で、様々な作業が要求される。従って、回復期や急性期の病院では在宅生活をみこした目標の設定と訓練内容が必要となる。ADLやIADL訓練はその具体的なものである。また、福祉用具の適応も重要な役割を果たす。

問題として提案したいのは、病院、施設は患者さんにとっては安心できる環境であり、その環境下での自立は、在宅では多くが役立たないということである。いっそ、病院や施設をスキップして、在宅を中心とした訓練システムのほうが、作業療法は生かされるとも考えられる。しかし、それは現実的でなく、現行システムの中で、いかにすればいいかを考えたとき、「セイフティーなマネジメントからリスクなマネジメントへの変更である」。

在宅で予測される、危険な動作は、限りなく病院、施設で体験させ、失敗したらその原因を一緒に考え、解決方法を見つけ、改善していく。ときには作業療法士は失敗体験を設定し、その解決方法も視野に入れた中で、患者に寄り添いながら、患者さんが分かるように解説し、解決策を探る。例えば、椅子にぶつかりそうな場面では、椅子を除去するのではなく、ぶつかったあとの転倒を予防し、危険性を体験してもらう。また、内科的なリスクない事例では、あえて疲労する環境を設定し、生理的な筋肉痛や疲労時のADLなどの対処方法を体験してもらう。また、雨や風の中での外出、人ごみのなかでの移動など、リスクな作業環境をあえて体験させておくことで、在宅生活にスムーズな移行ができるのでは思う。「病院はしんどかったが、在宅生活は楽だ」と患者さんに言わせたい。

病院、施設は120%の負荷を、在宅生活は60%の能力でOK。今、作業療法の「質」と「量」を真剣に見直す時

である。

8. まとめに変えて

作業科学研究大会で、このようなお話をできる機会をいただきました。西野歩大会長には心より感謝いたします。臨床22年、教官10年の作業療法を通して、「作業」は、医療だけではなく、保健や教育など、人間の生活するところ全てに共通したテーマだと思います。そのような意味で、この研究会が今後ますますご発展されることを祈念しています。

作業の力：作業療法士の反省を作業科学の視点で分析する

小田原悦子

聖隷クリストファー大学

要旨：本論文は、作業療法士中村春基氏（以下、中村）が報告した担当患者 M さんの変化を作業科学の考え方をを用いて分析した試みである。作業療法士として経験した M さんの驚異的な回復の治療経験は、彼をこれまで行ってきた作業療法介入への反省に導いた。本論文では、M さんがいかにその作業従事を変え、その作業が彼女の作業的存在に影響したかを分析した。M さんは作業療法介入の中で、彼女の作業的存在を変化させて、彼女の作業療法士を新しい作業の力に気付かせた。馴染みの作業と新しい作業が M さんに主体的な生活を再構築させたと考えられた。2008 年東京で開催された作業科学セミナーにおいて、私は中村が報告した M さんの治療経験の解釈を担当したが、本稿はその内容に若干の加筆修正を加えたものである。

キーワード：作業の効果，作業選択，馴染みの作業，新しい作業

はじめに

作業療法士は、患者や対象者が新生活を構築すること、よりよい状態で生活に戻ること、健康を維持することを目標に援助する。作業療法士は、健康専門職として客観的な視点でその人の疾患、障害、症状を理解して治療介入をはかる一方で、患者を日々の生活を営む人としてとらえ、その幸福観、満足感、つまり主観を重視しながら援助する、という特徴を持つ。この、患者側の視点と客観的指導者の視点の両方を持つ、二重視 double vision という作業療法士の姿勢は、他の健康専門職と異なるものである¹⁾。つまり、この「人を全体として理解する姿勢」こそが、患者の全体に関わる作業療法の特徴となっているが、同時に、作業療法士自身にも周囲にもそのアイデンティティーが分かりにくいものになっている¹⁾。ところで、作業療法士は作業を使って患者を援助するが、実際に作業がどのように選択されるか、専門職である作業療法士が提案し、提供するのか、患者、対象者が決めるのか。実際には、どのように作業が選択されて、対象者の生活の再構築を促進するために使われているのか、健康を促進するのには興味深いところである。

中村が「作業を行っている患者さまは元気—そのために、作業療法士は何をすべきか—」という発表の中で力説したのは、作業の力、患者本人が選択した作業の効果であった。中村は M さんの治療経験の中で、作業のもつ力強さに気づき、それまで自分が行っていた作業療法介入を反省するようになったと打ち明けた。私は作業療法士としての反省に彼を導いた作業の力に興味を持ち、そ

れを理解するために、中村を作業の力に気付かせた M さんの変化を、作業科学の考えを使って分析することにした。

ところで、作業の力こそは、作業療法の創設者たちが信じていたものである。彼らは、作業には健康を促進する力があると信じ、障害や病気を持つ人々が社会の一員であるために、作業を使って、援助する専門職が必要であるという理由で、作業療法士という専門職を設立した²⁾。

作業科学は作業療法の創設者たちの考えを引き継いだ学問である。作業科学は、人間を作業的存在として考える。例えば、我々人類は何十万年の間、作業をしながら生きてきた。個々の人間は、作業しながら生き、他の人々と交流し、成長し、その人らしくなり、家族を作り、次の世代に引き継いでゆく。すべての過程で作業が重要な役割を果す。我々は作業を介して環境に働きかけ、物理的環境、社会的環境、人的環境と何らかの関係を作りながら生活する。作業科学は、人間を、作業を介して環境と関係しながら生きる存在であり、作業は人が主体的に環境へ関わる結果であり、その手段であると考えている。作業とは、人が主体的に何かをすること、環境と交流することであると考え、作業には健康を促進する力があると信じてきた。つまり、作業には人の成長を促し、将来へと橋渡す機能があり、我々は作業を介して周囲の人たちとの社会的関係を作りながら、生きていくと考えている^{2,3)}。

私は、この研究の中で、中村が報告した作業の力がど

のように作業的存在としてのMさんの変化を導いたのかを知るために、この作業療法士を反省に導いた脳卒中患者Mさんの変化を理解しようと試みることにした。

方法

Mさんの変化と中村の治療経験を理解するために、以下のデータを用いた。

1. 中村が行ったMさんの治療経験についての報告(第12回作業科学セミナーの抄録)。
2. Mさんの治療経験について、中村に1時間のインタビューを施行し、その結果を逐語記録したインタビュー記録。
3. 脳卒中前の生活、退院後の生活、現在の日常の作業についての質問に対するMさんの答え。

Mさんと中村の経験を理解するために、ナラティブ(語り、記述)を分析してその人の経験を理解するナラティブ分析の方法を用いた⁴⁾。収集したデータを繰り返し読み、ナラティブ(語り)として中村の治療経験とMさんの経験を理解しようとした。Mさんがどのように生活世界を経験したか理解するために、経験の身体的側面、社会的側面、時間的側面を分析する現象学的視点を用いた⁵⁾。

結果及び考察

質的研究の性質上、結果と考察を別々に論じることは困難なので、分けずに論じる。まず、本研究の論点二点を挙げ、次に、この研究で理解されたこととその考察を一緒に述べる。

論点1. Mさんの作業的存在について:Mさんは脳卒中後作業を喪失し、彼女らしくない状態に変化した。作業療法士に促された馴染みのある作業、自分で選択した新しい作業に従事することによって、彼女の生活は大きく変化したこと。つまり、作業に従事することによって、退屈に毎日を過ごしていた彼女が主体的に脳卒中後の新生活を構築し、その社会的交流も回復に向かったこと。

論点2. 中村の作業療法経験:Mさんの治療を通して、中村は患者本人が選択した作業に従事することによって、患者が生活上の主体性を獲得し、その効果が生活全体に波及する可能性に気づき、従来のできる活動に局限した作業療法介入を反省し、作業選択のために患者の声に耳を傾ける必要性を作業療法士に呼びかけたこと。

以下に、両者の経験を分析するが、まず、Mさんの変化について3つの時期に分けて考察し、次に中村の経験について述べる。

1. 病前のMさん:意味のある作業的存在

50歳代のMさんは、夫、娘3人と生活する、仕事を持つ主婦として充実した生活を送っていた。身体を動かすことが好きで、家にじっとしていなかった。友達も多く、社交的であり、午前中にパートタイムの仕事、午後はママさんバレー、手芸などを楽しんでいた。外出が好きで、買い物、仕事仲間との旅行に出かけていた。彼女は主体的に環境に働きかける存在だった。

2. 退院直後のMさん:作業を喪失した存在

Mさんは脳卒中発作後3か月間の入院治療を経過して自宅に帰った。家族が出してくれる食事を食べ、何も家事をせず、ブラブラ過ごしていた。当時の生活について質問した私に対して、Mさんは、「退屈だったが、何もできないと思っていた。」と、答えた。

人は身体を通して世界を経験する⁶⁾。Mさんは不安定な歩行のために数センチの段差につまずき、左側無視のために壁や柱にぶつかる状態だった。以前はスムーズにできていた動作に失敗や違和感があり、日々の生活で多様な困難を経験していたと考えられる。Mさんが、脳卒中のために変わった身体を通して経験した日常の世界は、それまでの日常の世界とは異なるものだったと考えられる。

Mさんは当時何もできないと思っていた。作業を使って、人は環境と交流するが、脳卒中以前のように環境を受け止め環境に関わることができなくなったMさんは、それを使って環境に働きかける作業を喪失したと考えられる。Mさんは作業的存在として劇的に変化した。それは、「自分には何ができるか、できないか、わからない」という経験であり、自分から環境に働きかけようという考えも意欲もなかったと考えられる。

作業科学は、人が作業を介して主体的に環境に働きかけながら、その人らしく、周囲の人と交流しながら、先に楽しみを持ちながら生きてゆくという可能性を信じているが²⁾、この時期のMさんは主体的に何かをするという意味の作業を失った存在だったと考えられる。さらに、彼女は当時の生活は退屈だったと述べた。人は何かの作業を楽しみに、環境や将来に向かって意思や意欲を表現するものだが、このような主体的なものはこの時期のMさんの生活にはなかったと考えられる。

3. 作業喪失から作業獲得へ:作業的存在の回復

Mさんの外来作業療法を担当した中村は、自宅で何もしないで暮らしているMさんについて、家族から相談を受けた。このエピソードから、当時のMさんは以前のMさんらしい作業を失っていたと考えられる。

さらに、この頃Mさんは歩行練習のために、家族に連れられて、スーパー・マーケットや公園に頻繁に出かけ

ていたが、その時に誘われて嫌がることはなかったが、自分から進んで行くことはなかった。自宅ではもっと歩けるように、夕食後車いすから立ち上がっては皿洗いをすることがMさんの日課になっていたが、これもMさんが自分からすることはなく、家族の促しと誘導で実施されていた。

本人が自分の意思を持ってすることを主体性というが、自宅に退院した後のMさんの主体性と作業について考えると、準備された食事をとり、誘われれば外出し、誘導されれば皿洗いをするという生活を送っていたMさんは、自主的に環境に働きかけることはなく、主体的に従事する作業がなかったと考えられる。

しかし、退屈に過ごしていたMさんが変わり始めた。既に述べたように、中村の外来作業療法の調理訓練がきっかけになって、自分から環境に働きかけることがなかったMさんに大きな変化が生まれた。Mさんは自主的に調理をするようになり、自分から卓球、さらには水泳を始め、その生活は活気と意欲にあふれる楽しいものになった。脳卒中後の退屈から本来の作業的存在への移行期間に現れた3つの作業の効果について以下に分析する。

調理：馴染みのある作業

Mさんの家族から相談を受けた中村が促して、Mさんは作業療法外来で巻き寿司作りに挑戦した。病前には、彼女がいつも簡単に作っていた巻き寿司だった。中心がずれた出来上りに満足できなかったMさんは、自宅で巻き寿司作りに挑戦し、次回の外来に自分が作った巻き寿司を持参し、これをきっかけに日常的に料理をするようになった。彼女の調理は、外来業務が忙しくて昼食の時間がない中村のために手作りの弁当を届けるように発展していった。

Mさんにとって元来調理は馴染みのある作業であった。馴染みの作業が主体的な作業的存在への最初の架け橋になったと考えられる。これがきっかけになって、Mさんは日常的に調理をするようになり、家族の食事作りは以前のように彼女の日課として定着していった。さらに、Mさんの調理は、作業療法士に感謝を表すという社会的な交流にも使われ、もともと社交的であったMさんらしい作業に発展していった。馴染みのある作業への挑戦が、意味のある作業の再獲得のきっかけになったと考えられる。

発病後、自分から環境に働きかけることも、将来に向かって何かをしようと思ひ描き、計画、実行するという意思もみられなかったMさんが、馴染みの作業に従事することによって、主体性を発揮して、彼女らしい作業的

存在へ力強い第一歩を踏み出したと考えられる。さらに彼女の変化を促したのは、卓球、水泳の（それまで経験したことのない）新しい作業だった。

卓球と水泳：新しい作業と作業療法士への挑戦

病前のMさんはバレーボールを楽しみ、身体を動かすことが好きだった。外来作業療法に通っていた彼女は、身体に障害のある知り合いの人から勧められた卓球に興味を持ち、中村に相談した。中村は、このときの経験をインタビューの中で次のように述べた。

**危ない危ない、止めなさいと。(笑いながら)
危なかった・・・無視はあるし、不安定だし・・・
冗談じゃないという感じ。そんな。その前に骨折したんだよ・・・法事に行って、車のトランスファー中にコケて、大腿骨の頸部骨折をして、そのくらい状態が悪かった。とんでもない、止めなさいと。**

中村はMさんの骨折の既往、左無視、歩行の不安定性を理由に、安全、けが（とそれに伴う機能低下）の予防を優先して、Mさんの相談に難色を示した。それでもMさんはあきらめず自分の希望を述べ続けた。中村はMさんを体育館に連れて行き、実際にMさんが卓球するところを評価した。中村によると、このときのMさんは、何とか台に寄りかかり立っているだけで、無視のために飛んでくるピンポン玉を探せない状態だった。彼はMさんが卓球を続けるとはまったく予想していなかったが、Mさんはこのときの卓球は楽しかったと私に答えた。治療者の視点と当事者の経験の間にこのような差があったことは興味深い。

Mさんは家族と近くの小学校に卓球をするために通い続けた。途中の坂道は、家族に支えられて後ろ向きに歩いた。当初、立っているだけで怖かったが、Mさんは徐々に球を打ち返すことを楽しめるようになった。

卓球をすることがMさんの目標となり、先の楽しみになった。彼女が選んだ作業が彼女を先へ向かって進ませる原動力になったと考えられる。

卓球を介して彼女の社会との交流は広がっていった。卓球仲間も出来て、Mさんは身障者の卓球大会に出場するようになった。Mさんは、この新しい作業を使って、環境に、自分の生活に主体的に働きかけるように変わった。さなぎが蝶になるように、Mさんは大きく変身したと考えられる。

もうひとつの作業にもMさんは興味を持った。卓球をするために通っていた体育館で身障者を対象にした水泳

教室を見ていたMさんは、水泳をしたいと、中村に相談した。中村から「止めなさい、沈むから」と反対されたが、通い始めた彼女は、もともとカナヅチだったが、20メートルくらい泳げるようになり、「水が気持ちいい」と言い、水泳仲間との交流を楽しむようになった。

Mさんはもともと体を動かすことが好きであったが、卓球も水泳も病前には経験しなかった作業である。Mさんには技術が上達し、仲間ができ、仲間とおしゃべりが楽しかった。Mさんは主婦として、家事をこなしながら、水泳、卓球、その他のスポーツに参加して、体を動かして楽しみ、社会的交流を喜んでいる。

Mさんの治療介入の経過を中村の視点から見ると、外来治療でMさんを実際の調理に導入したことがきっかけで、脳卒中発作以来自分から何もしようとしなかったMさんが、日常的に調理に復帰し始めたことは、作業療法士としてうれしいことだった。ところが、Mさんが卓球や水泳をやりたいと希望したとき、中村は安全性や運動機能への否定的な影響を理由に、Mさんがこれらの作業をやってみることに難色を示した。しかし、その後の経過を見守り、Mさんの劇的な変化を経験した中村は、患者の視点からの作業選択の大切さ、作業の力に気づいたと理解される。Mさんの治療経験が、中村にこれまで実行してきた従来型の機能中心の作業療法への反省に導いたと考えられた。

Mさんの驚異的な変化は、介入した作業療法士を反省に導き、「作業を行っている患者さまは元気—そのために、作業療法士は何をすべきか—」を発表するに至らせた。

中村が長年作業療法介入の中で目指してきたことは、できる生活機能を改善し、日常生活に活用するように援助することであった。この方針では、患者が安全に日常生活を過ごすことが優先され、時に患者の声が聞き入れられなかったことが中村のインタビューから理解された。

中村は従来の症状から治療方針を組み立て、危機管理を優先するあまり患者の主観と挑戦に専門職が否定的な姿勢で臨んでいることに強く警告を発し、同時代の作業療法士に、患者の声に耳を傾けて彼らにとって意味のある作業を治療に取り入れる必要性をその報告の中で呼びかけたと考えられる。インタビューの中で、彼は次のように述べた。

患者さんがやりたいと言ったときには、まずやらせてみて、できるかどうかを評価して、できる場所を見つけてあげると言う手続きをしないといけない。(私は今まで患者の)生活のありようを考えていなかった。

結語

作業療法士中村が気づいた作業の力、その作業の力で大きく変化した患者Mさんの作業的存在の変化を分析した。Mさんの経験を分析するにはもっと豊富な情報が必要であることは明らかであるが、この研究から以下のことが理解された。脳卒中で身体が変化して、自分の意思をもって環境に関わるという意味での主体性を喪失した状態であったMさんが、馴染みの作業に従事し、新しい作業に挑戦し、楽しみ、その作業を使って、社会的交流を広げ、将来にその作業に従事することを楽しみに(予想しながら)生活するように変化した。Mさんは次々に異なる作業にチャレンジしては、楽しみ、将来に予定して、自分の生活に取り入れていったこともわかった。それらの作業経験がMさんに、自分の意思で生活を作り出す主体性、環境への働きかけを導いたと考えられた。作業に従事することが、その人の健康に影響を与えるとReillyは述べたが□□、Mさんは何かの興味や意味を持つ作業にactiveに従事することに刺激されて、退屈から劇的に変貌した。つまり、作業科学が信じている、環境と交流するという意味で健康になったと考える。彼女は、環境に働きかけ、将来の作業的存在としての自分を思い描くようになった。家で調理をし、中村のために弁当を作って届け、先を楽しみに卓球をするために体育館に通うようになった。馴染みがある作業でも、新しい作業でも、本人が興味を持つ、あるいは、その人にとって意味をもつ作業は、人に環境に働きかけるようにノックする可能性があると考えられた。

謝辞

勇気ある作業療法経験の報告をした中村氏と、脳卒中後の経験と果敢な挑戦を共有してくれたMさんと、両者の経験を分析する機会を私に与えてくれた日本作業科学研究会に深謝する。

文献

- 1) Mattingly C. Fleming M: Clinical reasoning. FA Davis, Philadelphia, 1994.
- 2) Yerxa E. Clark F. Frank G. Jackson J. Parham D. et al: An Introduction to occupational science, A foundation for occupational therapy in the 21st century. In Johnson J. Yerxa E (eds), Occupational Science. The Haworth Press, New York, 1-17, 1989.
- 3) Clark F. Wood W. Larson E A: Occupational science: Occupational therapy's legacy for the 21st century. In Neistadt M. Crepeau E B (eds), Willard & Spackman's

- Occupational Therapy, Lippincott, 13-21, 1998.
- 4) Garro L, Mattingly C: Narrative as construct and constructio. In Mattingly C, Garro L (eds), Narrative and Cultural Construction of Illness and Healing. University of California Press, Berkeley, 1-49, 2000.
- 5) Sokolowski R: Introduction to phenomenology. Cambridge, New York, 2000.
- 6) Merleau-Ponty M: Phenomenology of perception. Routledge Classics, New York, 1962.
- 7) Reilly M: Occupational therapy can be one of the great ideas of 20th century medicine, 1961 Eleanor Clark Slagle lecture. AJOT, 16, 1-9.

Power of Occupation: Analysis of an Occupational Therapist's Reflection
through the Perspective of Occupational Science

Etsuko Odawara

Seirei Christopher University

In this article, I investigated a client M's occupational change reported by an occupational therapist Haruki Nakamura, through the perspective of occupational science. His, experience as therapist, for M's tremendous recovery led him to reflect, on his occupational therapeutic intervention. In this article, I analyzed how M changed her occupational engagement and how those changes influenced her occupational existence. M has changed her occupational existence, giving her therapist a new awareness of the power of occupation in the therapeutic intervention he had conducted. I found that her engagement in a familiar occupation and new occupations led her to redevelop her intuitive (agency) in life. In the 12th Japanese Occupational Science Seminar, 2008, in Tokyo, in Nakamura's presentation, I interpreted and commented on his experience of the therapy with M. I have revised and added to that discussion in this article.

Key word: effect of occupation, occupational choice, familiar occupation, new occupation

Astrid and the Japanese Cherry tree: A reflection on transformation and occupation

Staffan Josephsson OTR, PhD

Department of Neurobiology, Caring Sciences and Society, Division of Occupational Therapy, Karolinska Institute

Trondheim University College

Research and Development Unit, Stockholm Sjukhem Foundation

Abstract

Most practices using occupation as a therapeutic tool are situated within biomedical contexts. This paper argues that transformation becomes invisible in these practices, because of biomedical framing. Drawing from almost a decade of experience in and research of occupational therapy interventions for persons with dementia, and using theoretical arguments from, amongst others, the philosopher Paul Ricoeur, on the relations between narrative, action and sociality, the traditional tools and instruments used in rehabilitation practices will be questioned.

These practices have failed to capture actual changes and transformations that individuals as well as groups experience from interventions. This is partly because they are failing to capture processes and dynamics as well as failing to move beyond individual functioning to what happens *between* individuals.

Based on Ricoeur's reasoning this paper will present alternative outlines for how engagement in occupation can be transformative and further discuss the role of what happens between individuals for such transformations.

Key words: Occupation, Transformation, Dementia, Therapist-client relationship

要旨:治療手段として作業を用いているほとんどの実践は、生物医学的文脈の中に位置づけられている。この論文では、生物医学的枠組みで考えることにより、個人の変化が実践の中でいかに見えなくなってしまうかについて述べる。

十年近くの認知症の方への作業療法の実践と研究、そしてナラティブと行動と社会性との間の関係について哲学者 Paul Ricoeur の理論を使うことから、従来リハビリテーションの実践において用いられてきた手段や道具を再検討する。これらは、介入によって個人や集団が実際に経験する変化を捉えるのに失敗してきた。一つの原因は、変化の過程とダイナミクスを捉えるのに失敗してきただけでなく、個人の機能を越えて他者との間で起きていることを捉えきれていないのである。

この論文では、Ricoeur の理論に基づき、作業に従事することがいかに変化を起こすか、そしてそのような変化が、人間関係に生じさせる役割について考察する。

The story about Astrid

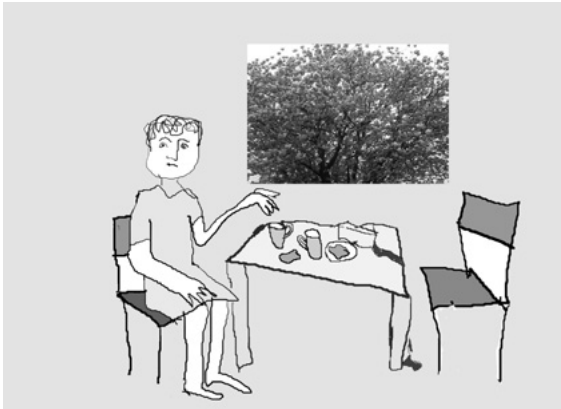
It was at springtime. Outside the hospital building stood a Japanese cherry tree. The branches were filled with flowers. It was beautiful. People started to arrive in taxis or mini buses. An old lady seemed to struggle a bit to make it out of one of the taxis. Her name was Astrid, she was an impressive woman in her sixties, a former actress and interpreter, used to be in the center. However now she gave a more vague impression. The place was a day-care center for persons with dementia just outside Stockholm, Sweden, and Astrid was diagnosed with severe Alzheimer's disease. She had lost most of her ability to speak, and she had great difficulties in performing daily

occupations.

The other persons visiting the day-care center had a hard time connecting to Astrid. She mostly sat by herself in one of the sofas of the center.

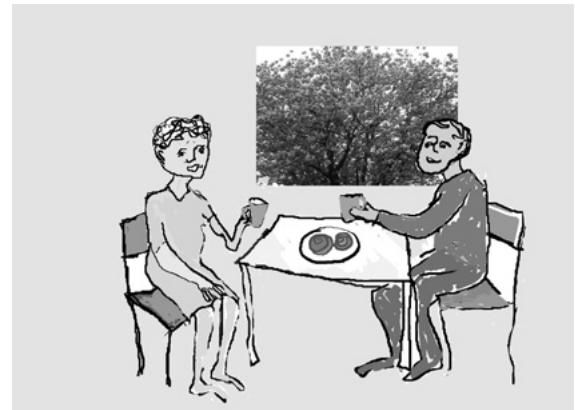
I was there as an occupational therapist to enable Astrid and others in similar situations to participate in daily life and engage in occupations. At the day care a lot of things centered on the daily meals and the occupations related to these. But Astrid could no longer participate in the meals as before. The cognitive problems caused by the disease made her lost and left outside. In fact she needed help with most everything. Eating her daily meals was no exemption, her cognitive skills did not

support her enough and as a result she became lost and remained hungry.



Now, this particular morning I was going to work together with Astrid. I had made some planning. I used the theory that I had available at that time, Kielhofner's Model of Human Occupation¹⁾, and from that theory I had learned that occupations could not only be seen as stemming from the capacity of the individual. Rather I had learned that the task and the environment, including other people, also mattered for engagement in occupation. Based on such reasoning my idea was to move away from focusing on Astrid's dysfunctions and instead focus on establishing possibilities for Astrid to engage in occupation. I had identified and analyzed occupations where Astrid had problems. Normally Astrid needed help to prepare meals and also to eat, because she could no longer recognize objects and further she was unable to remember the complex line of actions needed for everyday engagement in occupations.

This morning I arranged the breakfast so that it no longer required that Astrid independently recognized the objects needed for eating the breakfast. Further I structured the order of the breakfast so that Astrid did not need to remember the chains of actions that comprised the occupation of eating breakfast. What followed made me surprised. When she was guided and when the occupation was adjusted to her way of functioning, her problems were no longer visible. Now she could eat. And obviously this eased her. Before she did not say very much. Now when we were having breakfast together in a way that was adjusted to her functioning Astrid smiled and nodded to me. After a while she turned around and looked out through the window. The Japanese Cherry Tree moved a little in the wind. She said "Look, Beautiful".



My Argument

I will state my basic argument clearly; it is this: there is a relation between engagement in occupation, social relations and transformation. I argue that within our discipline of Occupational Science as well as within our clinical practices of Occupational Therapy we build firmly on this assumption. However I will also argue that we have limited theoretical grounding for this argument.

We have some models and frames of references and these different conceptualizations give us language and landscapes for WHAT human occupation is. These resources are like maps outlining the territory, identifying the different components, parts and features. And from these maps we know that occupation can be identified as, and here I quote the definition from the Canadian Occupational Therapy Association²⁾ "Groups of activities and tasks of everyday life, named, organized, and given value and meaning by individuals and a culture." We know that other human beings, as well as the social forms, patterns and processes we are a part of, influence human occupation. And we know that engagement in occupation is transformative. We know that things can change and be different because of engagement in occupations. So to put it simple: We know WHAT occupation is, but HOW does it work? How is occupation transformative? And what role do other people have for this functioning? This will be our focus of this paper. To reflect on HOW occupation is transformative and how social relations, and specifically other human beings, tap into these dynamics. In entering a dialogue reflecting on how occupation is transformative there are some theoretical resources that are helpful:

- First, Dewey's idea of transactionism as perceived by the Occupational Scientists Dickie, Cutchin and Humphry³⁾.
- Second, Bruner's⁴⁾ writings on meaning.

-Third, Ricoeur's⁵⁾ theory on narrative and action.

And Finally Astrid and the story about her breakfast will serve as our empirical grounding when we enter into dialogue with theory.

But, before opening our dialogue with theory, let's return to the story about Astrid.

Return to Astrid

Astrid had Alzheimer's disease (See Josephsson et al 1993⁶⁾ for further information about Astrid and the research we did involving her). When she was tested on the widely used Mini Mental State Examination test she scored 4 on a scale of 30 indicating a severe dementia. Today we know that it is hard to engage in occupations for people who have dementia at such stage of development. And true, Astrid did not do much independently. But as told in the introduction of this paper, when the environment, the place, was altered and when Astrid was in tune with another person eating together with her the situation changed.

How can we understand this transformation? If we place occupation within the individual as an individual function - as we might traditionally do, then Astrid's transformation might not be so visible. The change was not because of improved independent functioning and did not lead to independent functioning.

Interestingly, almost all measures or assessments we have on occupational functioning measure in terms of independence. At the day-care center where Astrid was a client we used the Assessment of Motor and Process Skills⁷⁾ to measure the client's occupational performance; however on that measure Astrid's transformation was barely visible. Astrid was not independent. But the story informs us that Astrid's occupational performance was transformed and that this transformation had something to do with Astrid and me being engaged in the occupation together.

Dialogue with theory

Now let us get in dialogue with our theoretical resources to see if we can get further in our reasoning. Our first resource is Dewey's and Bentely's Idea of Transactions as the Occupational Scientists Dickie, Cutchin and Humphry³⁾ have presented it. These authors wanted to address a problem they have identified in the argumentations from our discipline Occupational Science; namely the argument that occupation is residing within the individual. In fact they question the idea of a

dualism between the person and the environment. This is something that Dewey together with his colleague Bentely was reflecting on already 50 years ago when formulating the idea of transactionism. They identified three levels in which we can place human action: 1) self action, 2) interaction and 3) transaction.

Self action was described as "where things were viewed as acting under their own powers." In other words, a view that sees occupation as a result of the capacities and resources residing within the individual.

Interaction was identified as "where thing is balanced against thing in casual interconnection." In other words, a view of occupation as a dynamic interplay between different components, aspects and features.

A *transactional* view proposes "organism-in-environment-as-a-whole." In other words, actions are identified as processes that embrace individuals as well as their places without breaking these actions up in discrete underlying components.

Note that what Dickie and her colleagues do is taking this idea of transaction and applying it to human occupation. They talk about occupational transactions. And by doing so, they respond to some of the dilemmas that I outlined earlier and that we encountered in Astrid's story.

First, they respond to the dilemma that the traditional notion of self action cannot explain why engagement in occupation is transformative. Second, they respond to the dilemma that introducing the term interaction does not really solve the problem, because interaction still is based on the idea of independent individuals in communication. Taking a transactional perspective changes the perspectives though. Such a perspective acknowledges the character of interconnectedness and involvement that the story about Astrid's transformation informs us about. ‘

So let's accept Dickie and her colleagues' argument that engagement in occupation is transactional³⁾. But still that alone does not inform us on HOW occupation is transformative and on HOW social interaction with other human beings tap into these dynamics.

So how can we get further in our search for how occupation is transformative? I found one possible thread when reading Bruner's work⁴⁾. Bruner, an American Professor in Psychology argued in his well-known book "Acts of Meaning" that we have abandoned concepts rooted in the human experience, such as meaning, in favor of technical terms such as process,

information and environment. (And maybe we can add transactions to that list of technical terms?). He argues that in doing so we miss something of the very essence of human life, which is our ability to interpret. Humans do not only read life as facts. We also interpret life in relation to what gives us meaning. And these interpretations of human life evoke moral issues, what is at stake for people, and how we can achieve the good in the situations we are facing in life. Bruner also argued that this ability to interpret leads us into symbolic terrains. The lands of “as if” where as he puts it “we are wandering in human possibilities rather than settled certainties.” Maybe we can say that whenever we engage in occupations we are also creating possible meanings. But still how do these moral and meaning related issues tap into our engagement in human occupation?

Return to Astrid’s story

Let’s again revisit our story to see if we can get some ideas on how to proceed. Dementia diseases are surrounded with a lot of fearful connotations. It is a group of progressive diseases and there is still limited treatment. The cardinal symptom is often presented as memory problems. However as occupational scientists we might foreground that dementia makes it difficult to engage in occupations and that these restrictions lead to problems in social relations. In line with such reasoning one possible meaning of the engagement in everyday life for Astrid might be that she was lost in relations to her daily occupations and in relation to the people she had around herself. So what does this tell about Astrid’s transformation? Is there a relation between being engaged in occupations and returning from being lost to being at home? And if so how can occupation enable this? Before moving forward let us see where we have come so far in our search to explore how occupation is transformative.

We have, with help of Dickie and her colleagues’ reasoning on Dewey’s concept of transactionism identified how we might need to understand occupation as residing within the person and environment as a whole. With help of Bruner’s reasoning on meaning we identified that we cannot understand transformation in occupation without relating it to what is meaningful and at stake for people. But still the question remains, how does it work? And how does human occupation play a role? Let us turn to a final theoretical resource and see if we can get some further guidance.

Ricoeur and enacting transformations

One philosopher that maybe has made the most deliberate contributions to understanding human meaning is Ricoeur. And for the exploration of occupation and meaning his writings are of particular interest since the link between meaning and human actions is central in his writing. The point of departure for Ricoeur⁵⁾ is the Greek philosopher Aristotle’s notion of ‘mimesis.’ Already 2400 years ago, Aristotle⁸⁾ used the idea of mimesis in order to describe how life related to narrative. And this is still interesting today, particularly to the argument I am formulating in this paper.

Ricoeur had ideas on how occupation, social relations and transformation are linked. He proposed that these are linked through engaging in enacted narratives⁹⁾. What is then enacted narratives? Narratives are traditionally described as verbal stories. Verbal stories containing a beginning, a middle and an end organized around an inherent plot. Can narratives also be a way to understand human occupation? Let us study Ricoeur’s argumentation further. Ricoeur starts with the concept of emplotment, that is: the active process of creating possible connections and causal relations between material and circumstances. A simple way to explain how emplotment works is the following example. If I state “the queen is dead and the prince is crying” one might read as if I was stating that the prince is crying because the queen is dead. Now that is not what I wrote. I just gave some facts. I stated that the queen was dead and that the prince was crying. The casual link between these is made by the person listening or reading and that is employment: making causal connections between events, material and circumstances.

Ricoeur used the Aristotle’s concept of mimesis to present the complexity of narrative emplotment and suggested that narrative emplotment has three folds or three dimensions. In mimesis 1 we have the material we use to make meaning of life. The culture, the language and the actions that are taken place around us. So, enacted narratives connect us with culture. In mimesis 2 we have the actual emplotment: the creation of causal links and threads between circumstances, matters, events and materials. So, enacted narratives connect us with possible meanings. In mimesis 3 we communicate these emplotments to the culture we are part of and to other possible emplotments. So enacted narratives create multiplicity and again connect us with others and culture. As shown above these three folds of emplotment are all about connecting; connecting to culture, to matters and circumstances. Also all three folds identify

emplacements as social.

Now let's go back to our question about what enacted narrative is. Ricoeur proposed that emplotment is not only done verbally, he argued that we actually enact emplotments when we engage in ordinary occupations. So when we perform everyday occupations we enact plots, often mundane and ordinary, but still we enact plots. And we enact these plots within the social settings and the physical spaces that we are placed in.

So I propose, inspired by Dickie and her colleagues' reading of Dewey, inspired by Bruner's arguments on meaning, and inspired on Ricoeur's argumentation on narrative and action, that when humans engage in occupation this engagement, in a very physical sense, creates links with resources such as other people and material around us. I propose that this true even if we have limited resources by our self, such as Astrid. In fact this functioning of occupation is very important for persons with limited resources. So with help of engagement in occupations we get access to resources beyond our own capacities. Further I proposed, inspired by Bruner and Ricoeur, that engaging in occupation creates possible ways to establish alternative meanings, which brings people to what is at stake. By acting, the doings creates possible "as ifs", that can serve as alternative interpretative possibilities. And I have proposed that other humans through the social connections tap into the occupation and their participation adds to this transformative functioning. Dicke and colleagues proposed that Occupation needs to be seen as transactional. I suggest that it is the actual engagement in occupation that places us within a transactional state. The engagement in occupation places us into dynamics of you and me intersecting and transforming. Yes, I propose that engagement in occupation places us within a transactional world: A world connecting us with others and with the kingdom of "as if."

Now for the last time today let us revisit the story about Astrid. When eating together with another person that adjusted the situation to Astrid's way of functioning, Astrid was no longer disconnected. Still if we look on her as a separate person, then she still had dementia impairing her cognition, she still could not independently engage in occupations as before. However, when she was engaged in eating breakfast together with another person, within an environment that was transactional and in pace with her way of functioning the situation transformed. She did not become more independent, so if we use traditional ways of measuring in terms of

independence then the transformation will not be visible.

I have suggested that this can be explained using theoretical resources from Dewey as interpreted by Dickie and her colleagues. This places human occupation as neither within the individual or between individuals. Rather they propose that we should not divide individual from environment. Then our gaze will shift from WHAT the occupation is to HOW occupation works.

I have suggested that Bruner's reasoning supports us in seeing how occupation taps into what is at stake for people. That occupation needs to be connected to issues on human meaning.

I have suggested that Ricoeur's reasoning on narrative-in-action helps us to explore how the actual engagement in occupation in a very physical way can serve as creating and transforming meaning and how the actual engagement in occupation is transformative.

Some concerns and possibilities

Before ending let me raise some concerns. The argumentations touched upon in this paper propose that engagement in occupations puts people in touch with resources in the environment and within the culture. But this must also mean that people can, through occupation, be put in touch with structures and patterns that are not good for them? In that sense can engagement in occupation also be harmful? We need to develop more theory on how that works.

Further the argumentations suggest that there is a link between engagement in occupation with our bodies, and the meaning and the moral dimensions of life. Within our practices, such as occupational therapy, we know this. But still it is common that we in different practices make divisions between biomedical and humanistic knowledge about human occupations. Interestingly this divide has been challenged lately, not only by the theory we have been touching up today, but also from cognitive scientists such Gallese and Lakoff⁽¹⁰⁾ proposing that there is a neurological basis for what he calls intersubjectivity, which is what we may call meaning or social meaning. However this kind of reasoning needs further grounding and research.

Further the arguments within this paper here point at a need for alternative measures capturing other changes rather than only these than can be identified independent changes. Or to put it as baldly as possible: I have argued that occupation is

transactional and therefore goes beyond individuals and circumstances, as Dewey and colleagues have stated. Further I have argued that engagement in occupation rearranges and transforms the lived plots and then transforms the functioning as well as the meaning of the everyday, as Ricoeur stated. Also I have argued that occupations tap into what is at stake for people, the meaning and the moral dimension of life, as Bruner argued. And drawing on all these theoretical resources as well as on the story about Astrid I have argued that engagement in occupation transforms individuals' everyday life by rearranging material and circumstances. Engagement in occupations moves us into the land of "as if", where things can be different, as in the story of Astrid.

These were my dialogues with the story of Astrid and theory. I hope these dialogues succeed in inviting to engagement with me in discussions, critique, and communications on how occupation is transformative.

Acknowledgements

I am grateful to the following people: Astrid and the other people with dementia that I have worked with through the years. Margit Schyborger, Stockholm for the illustrations. Melissa Park, Sissel Alsaker, Eric Asaba, Akie Asaba and Peter Bontje for their input in creating this paper. This paper was presented as a special lecture at the 12th Occupational Science Seminar in Tokyo, Japan, November 22, 2008.

References

- 1) Kielhofner G: A model of human occupation: Theory and application. Williams & Wilkins, 1985
- 2) Canadian Occupational Therapy Association: Enabling occupation: An occupational therapy perspective. CAOT publications, 1997
- 3) Dickie V, Cutchin MP, Humphry R: Occupation as transactional experience: A critique of individualism in occupational science. *Journal of Occupational Science: Australia*, 13: 83-93, 2006
- 4) Bruner J: Acts of meaning. Harvard University Press, 1990.
- 5) Ricoeur P: Time and narrative, Vol I-III. The University of Chicago Press, 1984.
- 6) Josephsson S, Bäckman L, Borell L, Bernspång B, Nygård L, Rönneberg L: Supporting everyday activities in dementia: An intervention study. *International Journal of Geriatric Psychiatry*, 8: 395-400, 1993.
- 7) Fisher AG: Assessment of motor and process skills. Three Star Press, 1995.
- 8) Aristotle: Aristotle on the art of poetry. Oxford University Press, 1920.
- 9) Josephsson S, Asaba E, Jonsson H, Alsaker S: Creativity and order in communication: Implications from philosophy to narrative research concerning human occupation. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 13: 125-132, 2006.
- 10) Gallese V, Lakoff G: The Brain's Concepts: The role of the sensory-motor system in conceptual knowledge. *Cognitive Neuropsychology*, 22: 455-479, 2005

作業の意味を考えるための枠組みの開発

吉川ひろみ

県立広島大学保健福祉学部

要旨：本論の目的は作業科学において、作業の意味がどのように表現されているかを明らかにすることである。1993年から2008年までのJournal of Occupational Science誌に掲載された240論文中、タイトル、要旨にoccupationおよびmeaningあるいはmeaningfulが含まれている50論文を対象に、各論文で取り上げられている作業を行う理由や影響、その作業の位置付け、作業の意味に関する論述を抜粋しデータとした。データを一つの意味内容ごとにコードを付け、類似性に注目してカテゴリーを作成した。データの解釈、コード化、カテゴリー化を繰り返した結果、①作業が引き起こす感情、②目的か手段か、③人、場所、時間とのつながり、④生活の組織化、⑤自身との関連、⑥健康との関連、⑦社会の中での意味、⑧作業の分類化、といった8カテゴリーが抽出された。作業の意味を考察するために、このカテゴリーから構成された枠組みを使うことができる。

キーワード：作業、意味、文献レビュー

はじめに

作業科学において作業は、個人的、文化的意味をもつと定義されている¹⁾。作業の意味とは、作業に対する個人的解釈であり²⁾、個人独自のもので作業を行う動機となる³⁾。さらに作業の意味には社会文化的規範を含む場合もある²⁾。人は、意味のある作業をすることで健康な状態へ変化していく^{2,4)}。しかし作業の意味は、詳細を明らかにせずに意味の有無のみが論じられたり、治療手段としての有用性と混同されたり、論者により偏った内容のみが取り上げられていると、筆者は感じている。本研究の目的は、作業の意味を考えるための枠組みを開発することである。作業の意味を詳細に説明する概念が明確になれば、作業の意味をより深く考察することができるとともに、作業の意味の変化を描写することもできる。

方法

唯一の国際的な作業科学専門学術誌であるJournal of Occupational Scienceが創刊された1993年から2008年に、タイトルあるいは要約に「occupation」と「meaningあるいはmeaningful」が含まれている文献を読み、作業の意味として捉えることのできる内容を抜粋しデータとした。内容の抜粋に当たり、その文献で取り上げられている作業に関する論述に注目した。本研究のデータは、インタビュー、ナラティブ、観察を文字にしたもの、他の文書の形にされたものを指すテキストの類である。質的研究法においてテキストは、解釈の土台となる実証的資料で

あり、結論を導く拠り所となるとされている⁵⁾。本研究では、まず対象論文の種類と構造を知るために、要約と本文の該当部分を読み、続いて論文全体における作業に関する論述部分に下線をつけた。次に下線をつけた文章を和訳して余白に書き込んだ。約10件の論文でこれを行った後に、和訳した文章をデータとして別紙に記載し、コードを付けた。一文のデータに複数のコードが付く場合もあった。コードの類似性に着目してカテゴリー化を行いながら、途中でデータとコードに戻って見直し、コードを書きなおす場合もあった。続いて、次の5から10件の論文ごとに同様の手続きをとった。全論文のデータ抽出、コード化、カテゴリー化が終了した後、筆者の読み取りによる論文要旨、データ、コード、カテゴリーを記載した表を作成した(表1)。本研究から抽出されたカテゴリーを使って作業の意味を考察することができるかどうかを知るために、筆者がこの枠組みを使って自分の作業を考えた。さらに、作業科学研究者と作業科学を学んだ学生からこの枠組みについてのフィードバックを得た。

結果

1. 作業の意味を示すカテゴリー

1993年から2008年までのJournal of Occupational Science誌15巻240論文中、タイトルあるいは要約に「occupation」と「meaningあるいはmeaningful」が含まれていたのは50件だった(図1)。創刊年には5件(29.4%)あったが、2002年までは0~3件(20%未満)となり、2003

表1 対象論文から作成した表の抜粋

著者 (年, 研究法)	要旨	データ	コード	カテゴリー
Pentland (2003, フォーカスグループとインタビュー)	脊損中高年女性10名によるフォーカスグループと19名への電話インタビューを行い、加齢に伴う経験や上手く年を取るために必要だと感じることは何かを聞いた。	適応のための資源は、自分の態度、自信がつく作業をする、人的資源、道具や環境、心理的サポート、財源と管理技能である	自信がつく作業	自身との関連
		人間関係を変えたり、制約したり、役割を喪失したり、将来不安や情緒的強さが適応と関連する	役割喪失	社会の中での意味
Downs (2008, インタビュー)	家族のレジヤールにおける作業についての現象学的研究である。セルフケアやレジヤールを自立して行えない子をもつ9名の親にインタビューし、10の質問をし、作業の文化的、時間的環境的要因を探った。記述的および解釈的分析を行いテーマを見出した。レジヤールをどのように共有するかについて3つのテーマ ①幸福の時間の機会、②普通の時間、③自分の人生と環境のコントロールの時間、が現れた。	レジヤールは、幸せ、普通、人生や環境をコントロールの機会となる	レジヤールは・・・	作業の分類化
			幸せ	作業が引き起こす感情
			幸せ、普通、コントロール	健康との関連

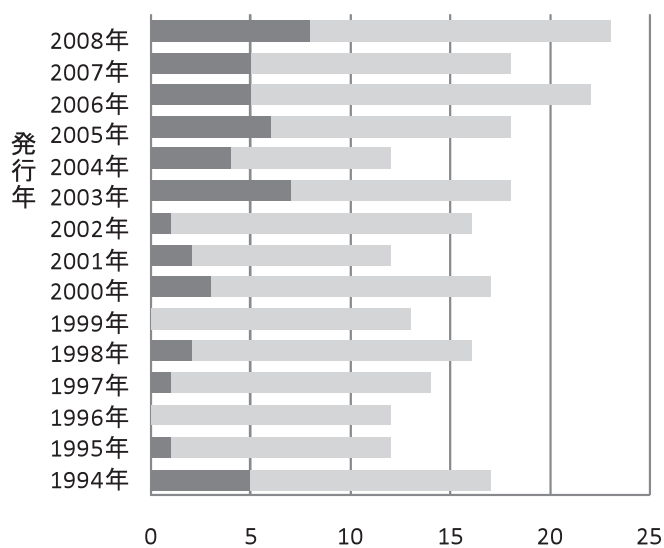


図1 JOS論文数と対象論文数

(1994年刊には1993年分を収録、濃色が対象論文)

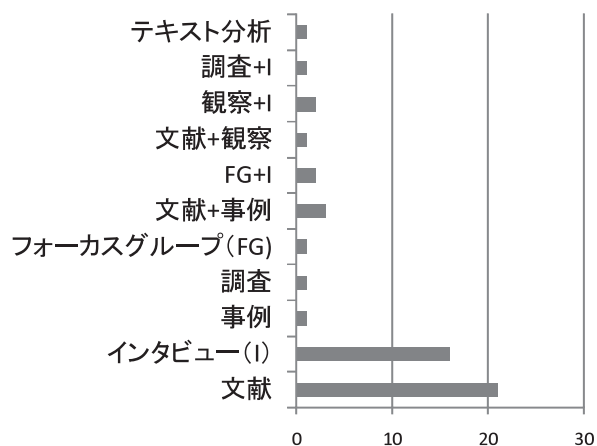


図2 対象論文の研究手法

年には7件(38.9%)と急増し、2008年まで4~8件(20%以上)を保持している。研究の種類はほとんどが質的研究で、文献研究21件(42%)、インタビュー16件(32%)が多く、フォーカスグループ、観察、これらの組み合わせだった(図2)。質問紙を用いた調査は2件で、そのうち1件はインタビューを併用していた。論文の読み込み、文章の抜粋、コード化、カテゴリー化を繰り返した結果、コード数は140となり、8カテゴリーに整理することができた(表2)。コード数は、1論文に

付き1~7までばらつきがあった。各カテゴリーについて説明する。

1) 作業が引き起こす感情

作業を行う経験が感情を引き出したり、特定の感情を伴って想起される作業がある。Christiansen⁶⁾は、文献レビューから、楽しみ、満足感や充実感といった感情の側面で作業が分類されることがあると述べている。Leufstadius⁷⁾は、地域で生活する精神障害者に日常行っている作業を行う理由を聞き、理由の一つとして楽しみや喜びがあ

表2 カテゴリーと該当コード数

カテゴリー名	カテゴリーの概要	コード数
作業が引き起こす感情	楽しい, うれしい, 幸せな気分のような快感情や苦しい, 辛いなどの不快感情を起こす作業	12
目的か手段か	その作業をすることが最終目標となるのか, 何か別の目標を達するための手段として行われる作業か	4
人, 場所, 時間とのつながり	他者と共に行う作業, 作業を通じた人とつながる作業, 作業を行うために行く場所, 場所の特性が導く作業など場所とつながる作業, 自身や所属集団の過去や未来を意識する時間とつながる作業	24
生活の組織化	ある作業が生活リズムを形成したり, その作業をすることで生活が崩壊するなど, 生活習慣との関連する作業	10
自身との関連	その作業をすることで自分らしさを感じるか否かといったアイデンティティとの関連, 自分自身の人生を決定していくような作業	35
健康との関連	人の身体的, 精神的, 社会的状態を左右する作業	20
社会の中での意味	社会から期待される役割, 社会での地位を決定する作業	15
作業の分類化	仕事か遊び・レジャーなど, 分類する言葉でよばれる作業	20
	合計	140

ると報告した。Clair⁸⁾はタイの高齢女性が行う正月料理の準備作業について研究し、徳を積み幸福になるという側面があると述べていることから、年に一度の特別な行事を構成する作業が快感情を呼び起こすと推察される。Ludwig⁹⁾は、高齢者の生活に孫の世話という新たな作業が加わる際の感情について報告した。このように、作業を行うことによって引き起こされる快感情が動機となり、作業が開始されたり、継続するといえる。さらに Minato¹⁰⁾は、統合失調症者への調査とインタビューから、参加する作業にはストレスからリラックスまでの幅があることを明らかにすると共に、デイケアや作業所に参加するといった仕事関連の作業はストレスではあるが、生活満足度を高めることを報告した。ストレスを感じるといった一時的には不快感情であっても、長期的には良好な結果を導く側面があることが示唆される。作業が引き起こす感情は多様で、快から不快までの幅があるといえる。

2) 目的か手段か

作業は、その作業を行うことを目的とする場合から、その作業を行うこととは別に目的があり、目的を達成するための手段として作業が行われることがある。Weinblatt¹¹⁾は、スーパーマーケットで出会った高齢女性を紹介した。この高齢女性は、スーパーマーケットで買い物しながら、新しい商品を知り、他の買い物客と会話をし、異なるタイプのショッピングカートを試し、エアコンやレジの具合を他の店と比較する、などを行っていた。こ

の女性がメガネを忘れたのでヨーグルトの内容物表記を読んでほしいと依頼したのは、表記内容を知るといった目的のための手段であるが、他の客と会話するという作業の手段でもあったと考えられる。Whiteford¹²⁾は、JOSのコラムである Occupational Profile の記述の分析から、その作業が最終目標となる場合もあれば、目標達成までのプロセスとなる場合もあることを報告した。Jensen¹³⁾はオーストラリアの原住民のための仕事を提供するプログラムの成果として、仕事をするようになった人の飲酒が減ったと報告した。これは、原住民が仕事をするという目的を果たしただけでなく、仕事をするのが健康的な生活習慣を獲得する手段として機能した例といえる。作業は目的か手段かのどちらかとなる場合もあるが、目的でもあり手段にもなる場合もある。

3) 人, 場所, 時間とのつながり

作業は、その作業を行う人や行われる環境を超えて、人や場所や時間とつながる場合がある。まず作業と人とのつながりを指摘した例を紹介する。地域で暮らす精神障害者が作業を行う理由の一つに、他者や世界とのつながりがあった⁷⁾。Beagan¹⁴⁾は、若年男性が身体作業を好むのは、仲間からの尊敬を得たり、異性からの好意を期待するという理由であることを報告した。Abrahams¹⁵⁾は、職業人から母へと移行した自らの経験を用いて、息子との関係においてアイデンティティや作業選択が変化したことを考察した。Garci¹⁶⁾は、車いすバスケットボ

ール選手が懸命に練習を重ねる理由の一つに、楽しく親しみのあるチームメイトの存在があると報告した。これらの例から、特定の作業が特定の人とのつながりを生じさせたり、特定の人と一緒に作業が、作業遂行を推進したり、意味を強化するといえる。さらに Spitzer¹⁷⁾は、言葉を話さない自閉症児の作業を理解する方法として、作業場面に存在する他者の解釈を用いることを提案した。これは作業と人とのつながりを重視して作業の意味を理解しようという試みといえる。

作業と場所とのつながりについての報告も多く、家は家の作業をするように設計されているし¹⁸⁾、池のある環境では池の掃除やスケートといった作業が生まれる¹⁹⁾。難民キャンプという場所では行う作業が極端に制限されている²⁰⁾。高齢者施設において食事のあり方を変えることで、家らしい場所に変化したという報告もある²¹⁾。環境を重視して子どもの作業を理解すべきだという指摘もある²²⁾。このように、場所はどの作業をどのように行うかに影響を与え、また行われる作業が場所の解釈に影響を与えるといえる。

作業と時間とのつながりについて論じたものがある。Howell²³⁾は、手工芸のキルトが過去の世代から受け継いだ伝統という歴史的意味をもち、生活必需品であり家族のぬくもりを示すものであると述べた。Ilott²⁴⁾は、手作り作品が世代を超えて形見や家宝になることを指摘し、個人の所有物であっても家族の富となることによって死別後に意味が創造されると述べた。Shordike ら²⁵⁾は、クリスマス料理について高齢女性にインタビューし、祖母から母へ、母から娘へといった母系社会のつながりがあることを報告した。これらの例は作業が文化や伝統を反映し、過去から未来への世代間の絆となることを示しているといえる。さらに Persson ら²⁶⁾は、産業化がもたらした作業変化と悪影響を指摘し、エコロジーを重視して現代から未来の作業を考えることを提案した。人類の歴史、過去から未来といった時間軸を念頭において、作業が果たす役割を考察することができる。

4) 生活の組織化、習慣の形成

生活は複数の作業の組合せとして捉えることができるし、日常的に繰り返し行われる作業は習慣とよばれる。作業をすることにより、日々の時間が構造化され、日課や時間の流れが生まれることが明らかになっている^{7,10)}。Westhorp²⁷⁾は、バランスのよい生活について文献レビューを行い、作業の意味や価値を見極めながら健康的なバランスを決めていく「作業バランス達成のためのサイクル」を提案した。Håkansson ら²⁸⁾は、ストレス障害の女性たちが、個人的に意味のある作業を通して複数の作業間の

調和を保っていると報告した。Gallego ら²⁹⁾は、夜勤看護師にインタビューを行い、何か自分にとってよいことを見つけることを通して、時間管理が行われていると報告した。Walker³⁰⁾は、夜勤労働者の適応戦略として、同じ時間に同じことをするといった工夫がされていることを報告した。さらに、孫の世話をするようになった高齢者の日課が壊れ、壊れた日課を修復するために、いつどの作業を行うかを工夫するという報告も報告されている⁹⁾。以上の文献から、複数の作業の組合せにより、バランスが得られたり、調和が保持されることもある。また、ある作業により調和が乱れることもあるし、作業バランスを取り戻す戦略として特定の作業が行われているといえる。

5) 自身との関連

作業の意味は、作業を行う行為者と強く結び付いている。作業には個人独自の意味があり^{10,31)}、作業はその作業を行う人のアイデンティティとの関連が深く³²⁾、自分の作業を自分で選びコントロールするという感覚は、肯定的なアイデンティティをもつことにつながる¹⁵⁾。人は作業を通して価値を実感する³³⁾。車いすバスケットボールをすることは、挑戦するアスリートとして自身をとらえることでもあった¹⁶⁾。演劇を専攻する学生にとって演劇は自己概念と強く結びついていた³⁴⁾。高齢者にとって車の運転は自立した人間であるというアイデンティティを保持する意味があり³⁵⁾、壁に芸術的とも見える落書きをする若者は、その作業を行うことで、危険を承知で特定の集団に所属する自己の存在を確認していた³⁶⁾。負傷した労働者が、労働災害補償制度利用中であっても、労働中の怪我であることを主張することで、労働者というアイデンティティを強調したという報告があり³⁷⁾、作業で表現されるアイデンティティが強力であることが理解できる。また、作業の意味は人生の中で変化し、作業がもつ意味が人生に一貫性を持たせ、方向付けると主張されている³²⁾。このように、どの作業をどのように行うかが自分自身を示し、生涯に渡り作業を続けることが人生を作り上げるといえる。さらに、人生の時期や死の意識化により作業が変化するという指摘もある。Pentland ら³⁸⁾は、脊髄損傷の女性が加齢と共に生じる変化に合わせて作業も変化させていると報告した。Pollard³⁹⁾は、死を意識することが、人生の意味を考える機会となり、作業が変化すると述べ、Hunter⁴⁰⁾は、自分の死後の遺産となる作業を行うと述べた。このような自分自身と関連深い作業の意味を知るためには、パーソナルストーリー⁴¹⁾とかライフヒストリー⁴²⁾と呼ばれる本人の語りを通して理解する方法がある。これは、作業を一人称で語るところから理解するという現象学的視点⁴³⁾とも共通する。作業はそ

表3 作業の意味振り返りシートの記入例

作業：論文を書く			
作業が引き起こす感情	快	不快	
目的か手段か	目的	手段	
人、場所、時間とのつながり	人	場所	時間
生活の組織化、習慣の形成	形成	崩壊	固定
自身との関連、アイデンティティ	自己表現	疎外	喪失
健康との関連	増進・回復	保持	低下(病気)
社会の中での意味	役割・地位		不利
作業の分類化	仕事・義務	遊び・自由	休息

の作業を行う時点で、その作業を行う個人が誰かを物語るだけでなく、どのような人生であるかを示す。

6) 健康との関連

作業と行為者の健康やよい状態 (well-being) との関連が指摘されている。作業をすることで健康が維持・促進され^{7,44)}、健康感が高まり^{10,32)}、技能が高まり、発達する⁴⁵⁾。作業をすることで良好な睡眠がとれるようになり²²⁾、飲酒が減り¹³⁾、生産的、社交的になる⁴⁶⁾。Devineら⁴⁷⁾は、同性愛者が作業を通してゲイというマイノリティ集団に適応することを報告した。このように、人は作業を通して身体的にも精神的にも社会的にもよい状態になることができるといえる。Wilcock⁴⁸⁾は、ユートピアを描いた作家の作品の分析から、作業を通して人々がよい状態にあることを指摘した。Carlsonら⁴⁹⁾は、作業を通して健やかな老いが実現すると述べている。一方、病気や傷害により作業を行う機会がなくなり不健康になることも報告されている^{50,51)}。作業の有り様が健康状態を規定する。作業が健康を導くこともあれば、不健康が作業を制約する。

7) 社会の中での意味

作業には個人独自の意味があると同時に、社会との関連での意味ももつ。Jackson⁵²⁾は、政治やイデオロギーといった社会の価値観、人種、階層、年齢、民族、性志向が作業の意味に影響を与えると述べた。Eakman⁵³⁾は、社会の複雑性の中での作業の意味について言及し、Ikiugu³²⁾は、作業には個人的意味と集団の中での意味があると述べた。社会の中で、複数の個人が互いに影響し合い、作業の意味は変化する。Pentlandら³⁸⁾は、人間関係の変化、役割喪失に伴う作業の変化について考察した。個人や社

会の変化によって作業の意味は変化するという指摘もある。Stone³⁷⁾は負傷した労働者は、働けない労働者という社会的スティグマを負うと述べた。Rozario⁴⁴⁾は、産業化された現代社会が作業の意味を失わせたと述べた。社会が決める作業の意味は、作業を行う個人に影響を与え、個人が抱く作業の意味を規定することもある。

8) 作業の分類化

作業は、仕事や遊びなどと分類されることがある。意味のある作業として仕事を取り上げている文献がある^{10,12,13,20,37)}。また、仕事とレジャーを重視して論じるものもある^{19,51)}。レジャーが生活に与える幸福と普通さを述べたもの⁵⁴⁾、整容について言及したもの⁵⁵⁾もある。作業がどの分類に属するか、何と呼ばれるかが、作業の意味を規定するという側面がうかがえる。作業の分類には仕事、レジャーといった大枠の場合から、身体的作業¹⁴⁾、スポーツ¹⁶⁾、食事の準備から片付け²¹⁾などといったより小枠の場合まである。作業を行う個人、作業が行われる状況は個々で異なっているとしても、作業群として仕事、レジャーなどと命名することにより、その分類に含まれる共通の作業群としての意味が生じる。

2. 作業の意味を考えるための枠組みとしての利用

上述のカテゴリーを使って作業の意味を考えるために、「作業の意味振り返りシート」を作成した。筆者が記入した例を表3に示した。筆者にとって、論文を書くという作業は、筆が進む時には充実し、有能感が高まり快感を生むが、構想がまとまらなかつたり、記述内容の矛盾に気づいた時には苦痛と焦燥感といった不快感情を生

表4 作業科学研究を整理する枠組みとしての利用例

カテゴリー	研究疑問の例
作業が引き起こす感情	どのような作業が喜びをもたらすか
目的か手段か	目的でもある作業は、手段としてのみの作業より有益か
人、場所、世界とのつながり	過去の遺産を未来に受け継ぐ作業とは何か 作業する時、地域や世界にどのような影響があるか
生活の組織化	習慣や日課がどのように形成されるか
自身との関連	作業をする時、自分自身にどのような影響があるか 作業とアイデンティティはどのような関係か どのような作業が自己イメージや自信を高めるか
健康との関連	活動、参加、健康にはどのような関連があるか どのような作業が困難の克服、再適応の手段となるか 生存や健康にプラスの影響を与える作業は何か
社会の中での意味	社会や社会構造は、作業にどのような影響を与えるか
作業の分類化	遊びが仕事になることによって、どのような変化が生じるか

文献56, 57に追加して作成

む。論文の完成が目標なので、論文を書くことそのものが目的であり、また大学教員として業績を上げるという目的のための手段でもある。論文執筆は一人で行うので他の人とのつながりはない。文献を読んだり、アイデアを練ることは場所を選ばないが、執筆には広い机とコンピュータが必要であり、その場所から離れることができない。論文を書くために文献を読む過程では、過去にどのような研究が行われており、将来に向けてどのような研究が必要か、が見えてくるので時間的つながりが生まれる。論文執筆中も将来の研究の方向性や新たなアイデアが生まれ未来への展望が開ける。論文を書くことは時間がかかり、途中で止めると再び始めることがむずかしいので、つい時間を忘れて読んだり書いたりしてしまうので、生活リズムが崩壊することが多い。アイデアが浮かんだときにはすぐに書きたくなるので、日課を変更することもある。また、執筆がなかなか進まない場合には、論文とは関係のない、しなくてもよいようなことをしてしまい、これも生活習慣を崩すこととなる。論文を書くことは自身の考えを表明することであり、自己表現となる。自分の書いた文章を自分で読み、さらに自分の考えを固めることができる。完成した論文は自分の分身のように感じる。論文が順調に書き進められ、完成すると満足や達成感を感じるので精神的にはよい状態になるものの、目が疲れ、肩がこり、身体全体がだるく全般的な健康状態は低下し、休息が必要となる。論文を書くことは、所属学術集団の一員として、勤務する大学の教員としての役割であり、現在の地位を保持することとなる。作業

の分類でいえば、論文を書くことを強制されてはいないが、仕事の一部であり、職場の立場を考えると義務といえる。

作業科学を専門とする教員3名と作業科学を履修した大学生5名に、カテゴリーについての簡単な説明を添えて「作業の意味振り返りシート」への記入を依頼した。個々の作業では該当しないカテゴリーが1あるいは2あったが、誰も該当しないカテゴリーはなかった。記入後の感想は、作業の意味をより深く考えることができたというものだった。

考察

1. 作業科学研究を整理する枠組みとしての利用
作業科学において作業は意味をもつと定義されているので¹⁾、作業の意味を研究した作業科学研究は多い。Clark⁵⁶⁾は、作業科学における疑問の例として、活動、参加、健康にはどのような関連があるか、社会や社会構造は健康、参加、生活の質、人間存在をどのように制限するか、人が作業する時、身体、自分自身、地域、世界にどのような影響があるか、をあげている。Molineaux⁵⁷⁾は、作業科学の研究例として、作業とアイデンティティの関係を語る高齢者、能力獲得や習得を達成したり自分への挑戦として作業を行い自己イメージや自信を高める障害者についての研究、習慣や日課についての研究、過去の遺産を未来に受け継ぐという作業、困難を克服したり再適応の手段として行われた作業、生存や健康にプラスの影響を与える作業の累積的效果を紹介している。本研究で得

られたカテゴリーは、こうした作業科学研究を整理する枠組みとして使うことができる(表4)。

2. 教育と実践での応用

作業の意味を考える枠組みは、自分が経験した作業を詳細に説明する概念を提供するので、作業科学の教育や作業療法実践での応用が期待できる。筆者が担当する作業科学の授業で使っている教科書⁵⁸⁾において、意味のある作業とは何か、作業の意味とはどんなものか、といった質問が少なくない。筆者は過去9年間に渡り作業療法学科1年生を対象とした授業「作業科学」を担当し、「意味ある作業」の説明に苦慮してきたが、今後はこの枠組みが説明の助けとなると期待できる。

作業療法においても、この枠組みを利用できるだろう。たとえば作業療法室で、一人で行う作業であっても、作品をプレゼントしたり、成果を披露する機会を作ったり、その作業の歴史を勉強することにより、人や場所や時間とのつながりという意味を付加することができる。また、この枠組みを使えば、できるようになった作業が生活を組織化するかどうか、新たに行うようになった作業がアイデンティティ形成に寄与しているかどうか、に留意しながら作業療法を進めることができる。作業の意味をより広くより深く考慮した作業療法を展開できる可能性がある。

3. 研究の限界と今後の課題

データ収集と分析の過程が明確でなければ質的研究の優劣を評価することはできない⁵⁹⁾ので、本論においても明確化に努力した。本研究ではデータ抽出、コード化、カテゴリー化を部分的に何度も繰り返したが、データ収集と分析を体系的に行えば、より明確に示すことができたと考えられる。本研究では、作業の意味を主たるテーマとする作業科学分野の専門学術誌を対象とし、分析者は作業科学の教育と実践の経験があったので、サンプリングと研究者については、ある程度の信用性が保障されると考えられる。しかし、研究の信憑性(credibility)を高めるためのトライアングレーションと監査が行われていない。トライアングレーションとは、研究手法、情報源、研究者を複数とすることである⁵⁹⁾。インタビューや観察といった研究手法を使ったり、作業の意味が記載されている他誌を対象としたり、複数名で分析して、結果の信憑性を高めることが今後の課題である。また本研究では、分析の途中で他の作業科学研究者に経過を開示しコメントは得たものの系統的に行わなかったので、正式に監査の道筋をとることも今後の課題である。

まとめ

1993年から2008年までのJournal of Occupational Science誌に掲載された240論文で、タイトルあるいは要旨にoccupationおよびmeaningあるいはmeaningfulが含まれている50論文を対象に、作業を行う理由や影響、その作業の位置付け、作業の意味に関する論述を調べた結果、①作業が引き起こす感情、②目的か手段か、③人、場所、時間とのつながり、④生活の組織化、⑤自身との関連、⑥健康との関連、⑦社会の中での意味、⑧作業の分類化、といった8カテゴリーが抽出された。このカテゴリーを使うことにより、行っている作業にはどのような意味があるかをディスカッションすることができる。また、すでに行っている作業がもつ新たな意味を発見するためのヒントを得たり、将来行う作業について、このカテゴリーの利用により複数の意味を付加するように考えることができる。

文献

- 1) Clark FA, Parham D, Carlson ME, Frank ME, Jackson J, et al: Occupational science: Academic innovation in the service of occupational therapy's future. *Amer J Occup Ther* 45: 1069-1080, 1993.
- 2) Nelson DL: Why the profession of occupational therapy will flourish in the 21st century. *Amer J Occup Ther* 51: 11-24, 1997.
- 3) Trombly CA: Occupation: purposefulness and meaningfulness as therapeutic mechanisms. *Amer J Occup Ther* 49: 960-972, 1995.
- 4) カナダ作業療法士協会著、吉川ひろみ監訳: 作業療法の視点—作業ができるということ. 大学教育出版. 2000 (Canadian Occupational Therapy Association: Enabling Occupation: An Occupational Therapy Perspective. Ottawa, CAOT ACE, 1997.)
- 5) ウヴェ・フリック (小田博志ほか訳): 質的研究入門 <人間科学>のための方法論. 春秋社, 2002.
- 6) Christiansen C: Classification and study in occupation a review and discussion of taxonomies. *J Occup Sci* 1(3), 3-21, 1994
- 7) Leufstadius C, Erlandsson LK, Björkman T, & Eklund M: Meaningfulness in daily occupations among individuals with persistent mental illness. *J Occup Sci* 15(1), 27-35, 2008.
- 8) Clair VW: Offerings: Food traditions of older Thai women at Songkran. *J Occup Sci* 11(3), 115-124, 2004.
- 9) Ludwig FM, Hattjar B, Russell RL & Winston K: How

- caregiving for grandchildren affects grandmothers' meaningful occupations. *J Occup Sci* 14(1), 40-51, 2007.
- 10) Minato M & Zemke R: Occupational choices of persons with schizophrenia living in the community. *J Occup Sci* 11(1), 31-39, 2004.
 - 11) Weinblatt N, Ziv N, Avrech-Bar M: The old lady from the supermarket-categorization of occupation according to performance areas: Is it relevant for the elderly? *J Occup Sci* 7(2), 73-79, 2000.
 - 12) Whiteford G and Wicks A: Occupation: Persona, environment, engagement and outcomes. An analytic review of the Journal of Occupational Science Profiles. Part 2. *J Occup Sci* 7(2), 48-57, 2000.
 - 13) Jensen H: What it means to let off sit-down money: Community development employment projects(CDEP). *J Occup Sci* 1(2), 12-19, 1993.
 - 14) Beagan B & Saunders S: Occupations of masculinity: Producing gender through what men do and don't do. *J Occup Sci* 12(3), 161-169, 2005
 - 15) Abrahams T: Occupation, identity and choice: A Dynamic interaction. *J Occup Sci* 15(3), 186-189, 2008.
 - 16) Garci TCH & Mandich A: Going for gold: Understanding occupational engagement in elite-level wheelchair basketball athletes. *J Occup Sci* 12(3), 170-175, 2005.
 - 17) Spitzer SL: With and without words: Exploring occupation in relation to young children with autism. *J Occup Sci* 10(2), 67-79, 2003.
 - 18) Stanyer J: The home: An occupational ideal. *J Occup Sci* 1(4), 31-36, 1994.
 - 19) Manuel PM: Occupied with ponds: Exploring the meaning, beware the loss for kids and communities of nature's small spaces. *J Occup Sci* 10(1), 31-39, 2003.
 - 20) Steindl C, Winding K, & Runge U: Occupational and participation in everyday life: Women's experiences of an Austrian refugee camp. *J Occup Sci* 15(1), 36-42, 2008.
 - 21) Bundgaard KM: The meaning of everyday meals in living units for older people. *J Occup Sci* 12(2), 91-101, 2005.
 - 22) Bowden S: Development of a research tool to enable children to describe their engagement in occupation. *J Occup Sci* 2(3), 115-123, 1995.
 - 23) Howell D: Exploring the forgotten restorative dimension of occupation: Quilting and quilt use. *J Occup Sci* 7(2), 68-72, 2000
 - 24) Ilott I: A special occupation: commissioning an heirloom. *J Occup Sci* 13(2), 145-148, 2006
 - 25) Shordike A & Pierce D: Cooking up Christmas in Kentucky: occupation and tradition in the stream of time. *J Occup Sci* 12(3): 140-148, 2005.
 - 26) Persson D & Erlandsson L: Time to reevaluate the machine society: post-industrial ethics from an occupational perspective. *J Occup Sci* 9(2), 93-99, 2002.
 - 27) Westhorp P: Exploring balance as a concept in occupational science. *J Occup Sci* 10(2), 99-106, 2003.
 - 28) Håkansson C, Dahlin-Ivanoff S & Sonn U: Achieving balance in everyday life. *J Occup Sci* 13(1), 74-82, 2006
 - 29) Gallew HA & Keri M: An occupational look at temporal adaptation: night shift nurses. *J Occup Sci* 11(1), 23-30, 2004.
 - 30) Walker C: Occupational adaptation in action: Shift workers and their strategies. *J Occup Sci* 8(1), 17-24, 2001.
 - 31) Hannam D: More than cup of tea: Meaning construction in an everyday occupation. *J Occup Sci* 4(2), 69-74, 1997.
 - 32) Ikiugu MN: Meaningfulness of occupations as an occupational-life-trajectory. *J Occup Sci* 12: 102-109, 2005.
 - 33) Rowles GD: Place in occupational science: A life course perspective on the role of environmental context in the quest for meaning. *J Occup Sci* 15(3), 127-135, 2008.
 - 34) Yeager J: Theater engagement and self-concept in college undergraduates. *J Occup Sci* 13(3), 198-208, 2006.
 - 35) Vrkljan BH & Polgar JM: Linking occupational participation and occupational identity: an exploratory study of the transition from driving to driving cessation in older adulthood. *J Occup Sci* 14(1), 30-39, 2007.
 - 36) Russell E: Writing on the wall: The form, function and meaning of tagging. *J Occup Sci* 15(2), 87-97, 2008.
 - 37) Stone SD: Workers without work: Injured workers and well-being. *J Occup Sci* 10(1), 7-13, 2003
 - 38) Pentland W, Alker J, Minnes P, Tremblay M, Brouwer B, Gould M: Occupational responses to mid-life and aging in women with disabilities. *J Occup Sci* 10(1), 21-30, 2003.
 - 39) Pollard N: Is dying an occupation? *J Occup Sci* 13(2), 149-152, 2006
 - 40) Hunter EG: Legacy: The occupational transmission of self through actions and artifacts. *J Occup Sci* 15(1), 48-54, 2008.
 - 41) Molineux M & Rickard W: Storied approaches to understanding occupation. *J Occup Sci* 10(1), 52-60,

- 2003.
- 42) Wiseman LM & Whiteford G: Life history as a tool for understanding occupation, identity and context. *J Occup Sci* 14(2), 108-114, 2007.
 - 43) Barber MD: Occupational science and phenomenology: Human activity, narrative and ethical responsibility. *J Occup Sci* 11(3), 105-114, 2004.
 - 44) Rozario L: Ritual, meaning and transcendence: The role of occupation in modern life. *J Occup Sci* 1(3), 46-53, 1994
 - 45) Hocking C: A model of interaction between objects, occupation, society, and culture. *J Occup Sci* 1(3), 28-45, 1994.
 - 46) Martin K, Wicks A & Malpage J: Meaningful occupation at the Berry Men's Shed. *J Occup Sci* 15(3), 194-195, 2008.
 - 47) Devine R & Nolan C: Sexual identity & human occupation: A qualitative exploration. *J Occup Sci* 14(3), 154-161, 2007
 - 48) Wilcock A: Occupational utopias: Back to the future. *J Occup Sci* 8(1), 5-12, 2001
 - 49) Carlson M, Clark F, Young B: Practical contributions of occupational science to the art of successful ageing: How to sculpt a meaningful life in older adulthood. *J Occup Sci* 5(3), 107-118, 1998
 - 50) Clair VW: Storymaking and storytelling: Making sense of living with multiple sclerosis. *J Occup Sci* 10(1), 46-51, 2003
 - 51) Winkler D, Unsworth C & Sloan S: Time use following a severe traumatic brain injury. *J Occup Sci* 12(2), 69-81, 2005
 - 52) Jackson J: Is there a place for role theory in occupational science. *J Occup Sci* 5(2), 56-65, 1998
 - 53) Eakman A: Occupation and social complexity. *J Occup Sci* 14(2), 82-91, 2007.
 - 54) Downs ML: Leisure routines: Parents and children with disability sharing occupation. *J Occup Sci* 15(2), 105-110, 2008
 - 55) Hartshorne S: An evolutionary perspective of grooming as an occupation. *J Occup Sci* 13(2), 126-133, 2006.
 - 56) Clark F & Lawlor MC: The making and mattering of occupational science. In Crepeau EB, Cohn ES, & Schell BAB, Willard and Spackman's Occupational Therapy 11th ed, Lippincott Williams & Wilkins, a Wolters Kluwer business, Baltimore, MD, pp. 2-14, 2009.
 - 57) Molineaux M: Occupational science and occupational therapy: Occupation at centre stage. In C. Christiansen, & E. Townsend. Introduction to Occupation: The art and science of living, 2nd ed, Pearson Education Inc, Upper Saddle River, NJ, pp. 259-384, 2010.
 - 58) 吉川ひろみ:「作業」って何だろう. 医歯薬出版, 2008.
 - 59) キャサリン・ポープ, ニコラス・メイズ著, 大滝純司監訳: 質的研究実践ガイド 保健医療サービス向上のために 第2版. 医学書院, 2008. (Pope C & Mays N: Qualitative Research in Health Care 3rd ed. Blackwell, Oxford, 2006)

Development of a frame of meaning of occupations

Hiromi Yoshikawa

School of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

The purpose of this article is to explore meaning of occupations from literature in Journal of Occupational Science from 1993 to 2008. Meaning/meaningful and occupation were found in titles or abstract in 50 out of 240 papers. What is the reason to do the occupation or what is the meaning of doing occupations were examined in those papers. Eight categories were emerged. These are 1) comfortable and/or uncomfortable feeling when doing the occupation, 2) occupation as means and/or end, 3) connection to others, time, and/or place, 4) making or breaking habits, 5) relation to self such as identity and self expression, 6) positive and/or negative effects on health, 7) relation to society such as role and stigma, and 8) activity categories such as work and play. These categories can be used when therapists discuss about how meaningful clients' occupational experiences are. The frame of meaning of occupations consisted by these categories can be used as a guide to make occupations more meaningful.

Key words: occupation, meaning, literature review

自分らしい人生を作業で描くプロセス

岡 千晴¹⁾, 港 美雪²⁾

1) 北原リハビリテーション病院, 2) 吉備国際大学保健科学部作業療法学科

要旨：人は、作業を通して自己を構築し、作業を行う中で自己を表現する存在である。近年、クライアントがその人らしく生活することを目指した支援が重要視されている。本研究では、自分らしい生活に繋がる作業について理解を深めることを目的に、半構成的インタビューを実施し、継続的比較分析を行った。その結果、情報提供者らの持つ信念や価値観は、作業の行い方を調整することを通して、自己表現につながっていた。そしてその経験において、自己の存在価値を見出し、自分らしさへ気付くプロセスが存在していた。自分らしい人生は、このようなプロセスの中で、作業の行い方を継続的に調整することによって形作られていることが示唆された。

キーワード：自分らしい生活、存在価値、自己表現、質的研究

はじめに

近年、保健医療分野において、クライアントの生活目標として「自分らしい暮らし」及び「その人らしい生活」が重要視されている。例えば、介護老人保健施設で用いられている厚生労働省が提示しているリハビリテーション実施計画書において、生活目標として、「自分らしく生活するためのポイント」という項目が設けられている。では、作業療法士の視点から、クライアントの「自分らしい暮らし」をどのように捉え、支援できるのだろうか。世界作業療法士連盟は、作業療法について「作業を通して健康と安寧を促進することに関心を持つ専門職」¹⁾と定義し、作業療法士がクライアントの健康や安寧を目指す専門職であることを強調している。また、カナダ作業療法士協会及びアメリカ作業療法士協会は、「作業とは、日常での活動や課題の集まりで、名づけられ、組織化され、個人と文化によって価値と意味が与えられたものである」²⁾と作業を定義し、家族と一緒に朝食をとる、お風呂にゆっくり入る、友達と山登りを楽しむなど、私たちが何気なく日々行っている行いから、個人的に意味深く、価値のある行いまでを含んでいる。このように、作業療法士は、意味ある作業に焦点を当てることが示されており、つまり、クライアント本人にとって意味のある日々の行いが出来るよう支援することを通じて、自分らしく生活していくことを可能にし、健康促進につながるよう貢献していく専門職であるといえる。では、作業療法士は、自分らしい暮らしにつながる作業をどのように捉えることができるのだろうか。

Christiansen は、「作業は単に何かするという事だけで

なく、自己を表現し、アイデンティティを形成し維持する機会となる」と主張している³⁾。また Clark は、「人間は日常的な慣例や習慣、活動に浸ることにより、自らを徐々に作業的存在として発達させ、自らにとってふさわしい自己を作り上げていく」と述べている⁴⁾。また Christiansen は、幸福と生活満足感を促進させる不可欠な要素として、満足なアイデンティティの実現を挙げている³⁾。つまり人間は、作業をすることを通して自己を作り上げ、自己を表現する存在であり、その作業をどのように行うことができるのかということは健康を左右するといえる。例えば、退院後2年以上経過した26人の脳卒中患者を対象とした継続比較研究では、身体機能のレベルに関わらず自己に対する否定的な感覚を持っており、能力障害を持って生きていくためには、アイデンティティやその人らしさを再構築する必要があるということが示されている⁵⁾。また、外傷による脳損傷を負った方7名を対象とした継続比較研究では、彼らは新しい自己を反映するために作業を変化させ、新しい自己を受け入れる経験をしていた。このようにアイデンティティを再構築することは、リハビリテーションの重要な側面であることが明らかになったが、アイデンティティを視野に入れたアプローチの重要性について議論されていない現状を問題視している⁶⁾。

このように、作業療法で対象とする多くのクライアントに、アイデンティティの再構築や、その人らしく生活することを目指した支援が必要であると言われている。そしてそのために、作業療法士がクライアントの心身機能面の改善からではなく、作業の実現から関わっていく

必要があることが、近年強調されている。しかし、どのような作業がどのように自分らしい生活とアイデンティティの維持、構築に繋がるのかについて、十分に明らかにされていない。本研究では自分らしい生活に繋がる作業について明らかにするために、1) 自分らしい作業とはどのようなものか、2) どのような作業を、どのように行うことが、どのように自分らしい生活に繋がるのか、この2つの研究疑問に答えることを目的として実施した。

また、本研究で使用した「自分らしさ」「自分らしい作業」「自分らしい生活」「自分らしい人生」という用語は、いずれも本人が感じるもの、つまり、本人の主観的経験を重視したものとした。

方法

1. 研究デザイン

本研究は、まだ十分に明らかにされていない内容を明らかにすることが目的であるため、質的研究法を用いて行った。質的研究は、部分に還元できない全体的特徴を持つ現象の特徴、意味を記録、分析して解釈する^{7) 8)}。量的研究の目的は、因果関係を説明するために調査することであり、妥当性や信頼性が求められるのに対し、質的研究の目的は、多元的な現実を描写し、解釈し、理論化することであり、真実性、信憑性が求められる^{9) 10)}。

2. 研究参加者

介護老人保健施設デイケアに通所する60～90歳代の利用者のうち、要支援1～要介護2の認知症のない者（改訂版長谷川式簡易知能評価スケールが20点以上の者）41名にアンケート調査を行った。その結果、生活満足度及び自分らしく生活している認識が高く、自分らしいと感じる作業について問う質問に対して、いくつかの作業を記載した者で、インタビューの同意が得られた者を情報提供者として選択した。

3. データ収集

自分らしい生活や人生とはどのようなもので、作業がその生活にどのように影響を与えているかなどについて、「あなたにとって自分らしい生活とはどのようなのですか」「どんなことをすると自分らしいと感じますか」「なぜ自分らしいと感じるのですか」などの質問からなる45～80分の半構成的インタビューを実施した。インタビューの内容は、情報提供者の同意を得た上ですべてテープに録音した。

4. データ分析

本研究は、Strauss と Corbin のコーディング法を用い、継続的比較分析を行った¹¹⁾。まず、録音したインタビュー内容を逐語録におこし、文節ごとに切片化を行い、切片化したものにその内容を象徴する名前をつける「ラベリング」を行った。そして、データの概念化であるラベリングがある程度なされたら、それらのラベルを比較し、共通の特徴を持つラベルをまとめ、再び名前をつける「オープンコーディング」を実施した。次にカテゴリーがどのような属性を持つのか、より明確化するため、プロパティ（特性）とディメンション（次元）という視点から、属性を抽出した。さらにコード化パラダイムモデルを活用し、「現象」、「原因」、「帰結」、「文脈」、その情報提供者の「戦術」の関係を明らかにし、カテゴリーの関連性をみていく「軸足コーディング」を行った。そして、カテゴリー間の関係が浮かび上がってくると、データの図式化を試み解釈を深めた¹²⁾。さらに、信頼性、確実性を増すため、ラベリング、オープンコーディング、軸足コーディングのプロセスにおいて、作業療法、質的研究の経験を持つ専門家2名にデータを提示し、評価を受け、必要に応じて修正を加える作業を繰り返した。同時に、浮かび上がったデータと解釈を情報提供者に個別に提示し、妥当性を検証するメンバーチェック¹³⁾を行った。

5. 倫理的配慮

情報提供者に対し、インタビューの目的、内容について実施前に説明し、データは個人が特定されないように配慮すること、知り得た情報を研究目的以外に使用しないこと、同意をしない場合も不利益を被るものではないこと、いつでも協力を辞退することが可能であること、所要時間などを口頭と書面にて説明し、協力の同意の署名を得た。

研究結果

本研究の情報提供者は、男性1名、女性2名、介護度は要支援2が2名、要介護1が1名で、平均年齢は83.6歳であった。自分らしい生活や人生に影響を与える作業についてのインタビューを分析した結果、5つのカテゴリーと23のサブカテゴリーが見えてきた（表1）。情報提供者らが自分らしい生活を送る背景には、自分らしい人生を作業で描くプロセスが存在するという現象が浮かび上がった。彼らは、価値ある存在として生きていくための信念、つまり「存在価値」を持っていた。そして、信念や価値観を達成できる行いがどのようなものかについての独自の考え方、つまり「作業観」を持っていた。そして、作業観に合った時間や場所、手順など、「自分ら表

表1 カテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
存在価値	自分の存在価値 過去から続く価値観 自己の変化と模索
作業観	作業に対する考え方 自分らしい作業の繋がり 共通性の自覚 価値観を作業に反映する こだわり
自分らしい作業の行い方	価値観を満たす形態 経験からの形態の形成 目的を持って変化させる 他者からの取り入れ 行い方の意識的選択
作業の継続的調整による自己表現	なじみの環境 作業の行い方の継続的調整 主体的に行う 他者からの介入で阻害される
自分らしさへの気付き	価値観や作業観の達成 存在価値を見出す 社会からのフィードバック 作業の維持困難 生活や人生への影響の実感 違和感

しい作業の行い方」があった。そのような作業は、様々な状況に合わせて継続的に行い方を調整し、自らがやっているという感覚を持ち行うことで、「作業の継続的調整による自己表現」に繋がり、「自分らしさへの気付き」を経験し、存在価値を見出していた。このようなプロセスによって、人は作業を通して自分らしい人生を描いていることが示唆された（図1）。以下に、浮かび上がった5つのカテゴリーについて説明する。

1. 存在価値

情報提供者らは、自らがどのような人間か、自らがどうあることに価値を置いているのかという信念、つまり「存在価値」を持っていた。例えば「なんでもきっちりした人間」、「ご先祖様に生かしてもらってる。だから少しでも健康で長生きして、家を守る。それが自分がある意味だと思ふ」などで、これは価値ある存在として生きていくために情報提供者らが過去から継続して持ってい

るものであり、作業を行った結果、存在価値を模索し、変化していくものでもあった。

2. 作業観

情報提供者らは、自分らしい作業がどのようなものかについての本人の考え方、つまり作業観を持っており、例えば「健康的に過ごすこと」、「知識を得ること」などと語られた。作業観は、存在価値を実現するもので、「私は、お味噌汁を作るときも、朝の散歩も、何をするときも健康でいられるために工夫していて・・・」というように、作業観は、自分らしい作業の背景に共通して存在するこだわりのようなものであった。

3. 自分らしい作業の行い方

情報提供者らが行っていた自分らしい作業は、作業観に繋がるような行い方を選択していた。行い方とは、作業を行う上で必ず伴っている、具体的な手順や場所、時間などの選択によるもので、これらの選択の背景には作業観が大きく影響していた。例えば、「健康的に過ごす」「きっちりと行う」という作業観を持つ情報提供者は、お風呂を掃除するという作業を「隅の方までちゃんと掃除するためにしゃがむんだけど、しゃがむときはひざを痛めないように横の手すりをもって・・・」というように、自ら選択した形態を選択していた。

一方、日常の些細な変化によって作業を継続する上での制限が増え、作業の行い方を維持することの困難さを日常的に経験しており、そのような困難に出会うと、まずは作業観や価値観を維持したまま、作業の行い方を変えることが語られた。例えば、作業を継続することが難しくなると、「お墓には参れなくなったけど、家で仏壇に参ることにした」というように、行い方を変えると語った。

4. 作業の継続的調整による自己表現

情報提供者らは、作業の行い方を継続的に調整しながら作業に参加することで自己を表現していると語った。また、自己表現する際の作業参加の仕方として、なじみの環境で行うことや、自分の体調やその状況に合わせて作業の行い方を自らが選び、決定すること、作業の一つ一つの工程を全て自分が納得できるよう主体的に行うことなどが挙げられた。

5. 自分らしさへの気付き

情報提供者らは、日々の作業を行う中で、自分らしさを自覚する経験をしていた。例えば、価値観や作業観を

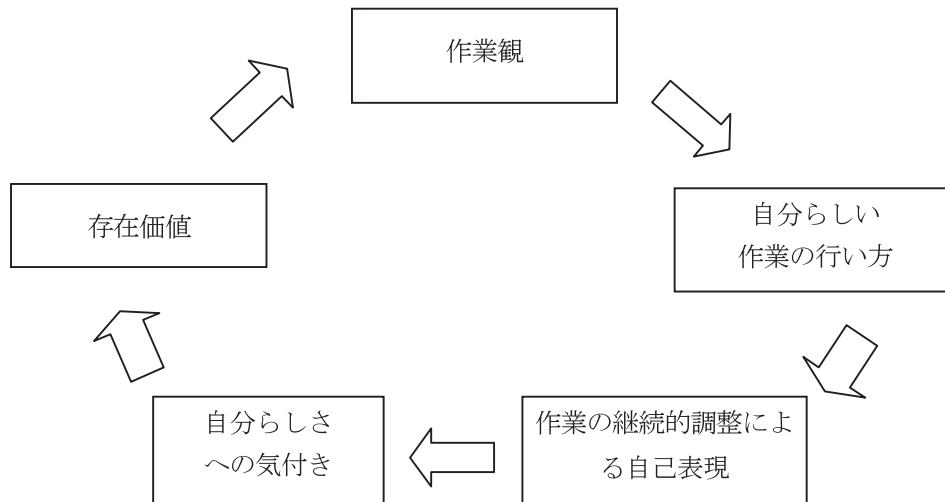


図1 自分らしい人生を作業で描くプロセス

反映した作業を達成した際、また、自分が行った行いの結果に対して、社会からのフィードバックを受けた際、自分にしかできない自分ならではの作業であると感じた際、自分らしさに気づき、作業をする中で他者との違いを感じた際などに、自分の存在価値を見出すことに繋がっていた。一方、時に、作業観に繋がる行ない方が出来なくなると、自分を表現していると感じられず、自分の存在価値を見失い、作業観や作業の行い方に変化が生じていた。

考察

本研究では、自分らしい生活に繋がる作業について明らかにするために、「自分らしい作業がどのようなものか」、「どのような作業を、どのように行うことが、どのように自分らしい生活や人生に繋がるのか」という2つの研究疑問に答えることを目的として実施した。その結果、存在価値を実現できる作業が「自分らしい作業」であり、情報提供者らは、自分らしい作業がどのようなものかについての考え方やこだわり、つまり作業観をもっていることが示唆された。また、自分らしい生活とは、作業観を満たすような行い方を選択して自分らしい作業を行い、作業を継続的に調整しながら行うことで自己表現し、その結果、自分らしさに気づき、存在価値を見出すというプロセスの連続が、自分らしい生活の中に存在していることが示唆された。

本研究により理解を深めた、自分らしい生活に影響を与えている作業に関する知識及び浮かび上がった重要な概念について考察を深め、クライアントの自分らしい生活を支援するための、作業療法への適用について提案し

たい。

1. 自分らしい作業への従事が存在価値や作業観を形作る

本研究の結果、情報提供者らが選択し行う、自分らしい生活に繋がる作業の背景には、自らがどのような存在でありたいのかという信念や価値観、つまり存在価値が重要な概念として存在していた。カナダ作業遂行モデルでは、スピリチュアリティを「作業療法が人を捉える視点として重要視しており、人をスピリチュアルな存在と認めるということは、その人の内面的な価値を認め、信念、価値観を尊重することである」としている¹⁴⁾。本研究においても、自分らしい生活の実現のためには、本人の価値観を尊重することの重要性が示された。それに加え、存在価値は、自分らしい人生に繋がる作業がどのようなものかという自分なりの考え方（作業観）を形作っていることが示唆された。また、作業を継続的に行うことにより、存在価値が変化する可能性があることも明らかとなった。つまり、作業を行うということが、自分の価値観や信念を発展させたり、失いかけた存在価値を新たに見出したり、創りあげていくことにも繋がると考えられた。

2. 自己表現につながる作業の行い方とその調整

本研究の結果、情報提供者らが選択し行う自分らしい生活に繋がる作業の背景には、そのような作業がどのようなものかについての独自の考え方、つまり、存在価値を反映した作業観が存在していた。そして、情報提供者らが、自分らしく生活することに繋がっていると認識し

ていた作業は、作業観を満たすために、自ら選択した行い方によって行われていた。この「行い方」とは、その作業に必ず存在する、場所や時間、手順を含め、個人的な意味に繋がる行い方を指す。つまり、行い方には、自分がどのような人間か、どのようにありたいかということが影響しており、各々が持つ作業の意味を達成するものでもある。そのため、クライアントにとって価値のある作業が、その人らしい生活につながるためには、クライアントの作業観を満たすような本人なりの行い方が出来ることが必要不可欠であるといえる。そして、この行い方を自ら調整しながらその作業を行うことが、自分を表現するということであると考えられた。先述したとおり、これまで、Clark⁴⁾やChristiansen³⁾により、作業を行うことは自己を表現する機会であるということが示されていたが、どのような作業を、どのように行うことであるかは明らかにされていなかった。本研究からは、自分らしい人生に繋がるよう、その時の状況に合わせて、作業の行い方を自らが選択し、行うことが、自分を表現するということであると示唆された。そして、自分らしい人生を送るためには、このように作業の行い方を調整することで、自分の存在価値に繋がる作業に継続的に従事することが重要であると考えられた。

3. 自分らしさに気付く経験の促進要因

本研究により、存在価値を実現する作業が自分らしい人生に繋がるためには、継続して自分らしく行えること、つまり作業の行い方を継続的に調整し、自らが選択した環境で行うことで、価値観や作業観を達成することに繋がり、自分らしさに気づく経験をするのが重要な要素であると考えられた。これまで、作業を継続することやなじみの環境で行うことが重要であることは提案されてきたが、本研究からは、自分を表現したり、存在価値を見出したり、自分らしさに気付く体験に繋がるという、具体的な影響の仕方が明らかとなった。また、先行研究において、アイデンティティは他者と自分の関係で形作られ、作業を通してアイデンティティを形成することは、自分の行いに対する社会的容認が関与すると述べられている³⁹⁾。本研究において、作業を行なうことが、自分らしさに気づき、存在価値を見出すことに繋がるためのひとつの選択肢として、社会の中という環境が、促進要因になっていることが示唆された。そのため、社会の中で様々な経験を積んだり、その中で、周囲との関わりを持つような機会は、自分らしい作業につながる自分らしさの気づきにとって重要であると考えられる。

4. 作業療法評価、介入への提案

Hocking は、2001年、作業に焦点を当てた実践のための「Occupation-based Assessment (作業を基盤とした評価)」という評価の枠組みを発表している¹⁵⁾。この評価プロセスは、「意味」、「機能」、「形態」、そして、その作業の「遂行要素」の順で評価を深めていくことを示している。本研究からも、意味から評価を深めることはクライアントの自分らしい生活に繋がる作業を評価する上で重要かつ効果的なプロセスであると考えられた。そしてそれに加え、「意味」や「形態」をそれぞれ切り離して評価するのではなく、本人が重要にしている意味やそれを成り立たせるための「行い方」を全体的に評価することが大切であるという新たな視点が明らかになった。また、作業療法士はクライアントのニーズ評価をする際、「したいこと及びできるようになりたいこと」に焦点を当てた、カナダ作業遂行プロセスモデルなどの評価をすることがある¹⁶⁾。その際、それに加えて、その作業をどのように行いたいのか、またどのように行えるようになりたいのかについて、評価を加えることを提案したい。そのような評価を加えることにより、その人らしい作業の行い方の支援が可能となり、自分らしさを作業で表現することに繋がると考えられる。そして、その人らしい行い方を作業の目標に反映し、達成のために人や作業を分析し、介入することが重要である。また、厚生労働省が提示している介護老人保健施設で使用されているリハビリテーション実施計画書の、「その人らしく生活するためのポイント」という目標設定の項目の例では、「日中の家事を行う」、「趣味を楽しむ」というように、「生産活動」「余暇」といった作業のカテゴリーの視点からのみで説明されている。また、急性期から「その人らしさ」を把握するために、家族にアンケートを行い、「職歴」や「趣味」を捉えるという取り組みが報告されている¹⁷⁾。本研究の結果からは、そのような作業のカテゴリーからの視点に加えて、形態や意味を含めた行い方や、その背景に共通して存在する作業観が、焦点を当てるべき重要な視点であることが示唆された。

また、本研究により、自分らしい生活を左右する要因として、存在価値、作業観、自分らしい作業の行い方、作業の継続的調整による自己表現、自分らしさへの気づきなどが明らかとなり、これらの要因及びつながりへの介入が、自分らしい生活を支援することにつながるということが示唆された。自分らしい生活を支援するための、作業に焦点をあてた作業療法プログラムでは、自分らしい生活を送ることにニーズのあるクライアントを対象に、これらの要因に関連するテーマを設定しての作業療法が可能

である。具体的には、クライアントが自分らしい生活と作業についての情報を得ることや、グループで意見交換し、意識を高め、実際の体験を促進するプログラムが可能である。テーマの設定については、たとえば、存在価値や作業の行い方をテーマとして、「自己の存在価値を見出すことができる作業は何か」、「どのように作業を行うことなのか」などに焦点を当てることができる。また、作業観をテーマに、「どのような作業に関わり、どのように行うことに価値があるのか」を振り返ることができる。さらに、自己表現をテーマに、「どのような作業や作業の行い方が、自己表現することにつながるのか」に焦点を当てることが可能である。

このような、作業的自己分析を深め、実際に作業経験を積むことができるような介入¹⁸⁾により、退院後も自分らしく生活することに影響を与える作業をクライアント自身が知り、生活に根付かせ、より健康的で発展的な生活を送れるようになることを期待できる。

おわりに

クライアントが自分らしい生活を送るために、作業観にあった作業や作業の行い方に焦点をあてながら、クライアントが作業を通じて自分らしさを表現できることにつながる支援は、作業療法士の専門性を生かした重要な仕事であると考えられる。そして、本研究はこのような、作業を健康に生かす作業療法の学術的基盤となる知識を提供できるものと考えている。今後は本研究の結果を作業療法での実践に展開し、同時に作業の研究（作業科学研究）を行い、それらを相互に発展させていくことが重要であると考えられる。

謝辞

稿を終えるにあたり、調査にご協力いただいた介護老人保健施設利用者の皆様及び職員の皆様、吉備国際大学保健科学研究科においてご指導いただいた先生方に深く感謝いたします。

文献

- 1) 吉川ひろみ:作業療法研究・作業療法の理論的枠組みに関するこの10年と今後. OTジャーナル 40:257-265,2006.
- 2) カナダ作業療法士協会, 吉川ひろみ監訳:作業療法の視点—作業ができるということ. 大学教育出版, 2000.
- 3) Charles H. Christiansen:Defining Lives: Occupation as Identity: An Essay on Competence, Coherence, and the Creation of Meaning, American Journal of Occupational Therapy,53:pp547-558,1999.
- 4) Clark F, et al (著), 佐藤 剛(監訳):A Grounded Theory of Techniques for Occupational Storytelling and Occupational Story Making,作業科学—作業的存在としての人間の研究. 三輪書店,1999, pp407-430.
- 5) Charles H. Christiansen: Identity, personal projects and happiness: self construction in everyday action. Journal of Occupational Science,7:98-107,2000.
- 6) Klinger, Lisa:Occupational adaptation: perspectives of people with traumatic brain injury, Journal of Occupational Science,12: 9-16, 2005.
- 7) Leininger.M:Qualitative research methods in nursing,Mass Market Paperback,Dec, 1998.
- 8) Holloway I,et al(著), 近藤潤子,伊藤和弘(監訳):看護における質的研究,医学書院,1997.
- 9) Holloway I,et al:Qualitative research for nurses,Black Science Ltd,1996.
- 10) 野口美和子:ナースのための質的研究入門-研究方法から論文作成まで,医学書院,2000.
- 11) Pope C (著),大滝純司(監訳):質的研究実践ガイド-保健・医療サービス向上のために,医学書院,2001.
- 12) 戈木クレイグヒル滋子:質的研究方法ゼミナール-グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ,医学書院,2005.
- 13) グレグ美鈴・麻原きよみ:よくわかる質的研究の進め方・まとめ方,医歯薬出版株式会社,2007.
- 14) Thelma,S (著),田端幸枝,森下孝夫,近藤敏ら(監訳):「クライアント中心」作業療法実践.多様な集団への展開,協同医書出版社,2001,pp9-10.
- 15) Clare Hocking:Implementing Occupation-Based Assessment.The American Journal of Occupational Therapy,55:463-469,2001.
- 16) Law M, Baptiste S, Carawell A, Ann McColl M, Polatajko H,et al(著),吉川ひろみ(監訳):COPM カナダ作業遂行測定,大学教育出版,2007.
- 17) 澤本広美:ICUからの作業療法-急性期から考える「その人らしさ」,作業療法ジャーナル 39:224-228,2005.
- 18) Jackson J, Carlson M, Zemke R,et al.:Occupation in lifestyle redesign:the Well Elderly Study Occupational Therapy Program. The American Journal of Occupational Therapy,52:326-336,1998

The process of designing the life with sense of identity through occupation

Chiharu Oka, Miyuki Minato

Kitahara Rehabilitation Hospital, Kibi International University

Persons construct and express selves through occupations. Recently, supporting life with the sense of identity of clients have been emphasized in occupational therapy. The present study was conducted by semi-structured interviews with three informants and constant comparative analysis to explore knowledge on occupations related to life with sense of identity. The results showed that informants had beliefs connected to self-expression through arranging the way of designing occupations. Informants found their own values for existence through the experiences and there was a process of awareness of identity. The study suggested that the life with sense of identity was formed by the way of designing occupations.

Key words: life with a sense of identity, self-value for existence, self-expression, qualitative study

「私にぴったり：作業科学がいかに見方を変えたか」

吉川ひろみ

県立広島大学保健福祉学部

2007年12月6日には県立広島大学、翌7日に聖隷クリストファー大学で、アリソン・ウィックス氏（オーストラリアン作業科学センター長）が、「It's in my blood : How occupational science changed my world view」と題した特別講義を行った。12月初旬に倉敷市で開催された第11回作業科学セミナーの特別講演のための来日に合わせて、学生のための講義も企画した。私がウィックス氏に初めて会ったのは、2006年7月に開催された第1回作業科学シンクタンクに参加したときだった。細身で姿勢がよく大きな目がきらきらと輝いていた。しかし、最大の魅力は彼女の言葉の端々から伝わる「作業の視点を広めよう」とする熱意である。本稿では、講義内容と学生の反応を紹介したい。

講義要旨

今日の私の話が、作業科学と作業療法の関係を理解する助けになれば幸いです。この講義では3つの質問に答えるよう依頼されました。①作業科学が私をどのように変えたか、②作業科学と作業療法の潜在力（potential）をどう思うか、③作業療法士として、作業科学者としての私の夢は何か。私の見方は、私の仕事と学習の経験から形作られたものなので、まず私自身についてお話しします。私の家はショーヘブン市にあります。シドニーから180km離れた美しい所です。以前は農業が盛んでしたが、今は観光業が盛んです。ここに25年間住んでいます。川に面した自然豊かな環境で、裏庭にはカンガルー、ワライカワセミ、ウォンバットがやって来ます。私はウーロンゴン大学のショーヘブンキャンパスで、仕事をしています。2000年に設立されたキャンパスで、350名の学生がいます。医学を学ぶ大学院は2007年に開設され、学生は20名、2008年には看護学科も開設されます。ウーロンゴン大学にOT学科はありません。私以外には作業科学者もいません。2005年に私は、ここの作業科学センターの所長となりました。これは名誉職で無給です。2007年7月には、作業科学の非常勤講師となりました。

1971年、高校生の頃には教育と看護に興味がありま

した。進路選択の時間に作業療法（OT）について聞いた時、私に向いているなと思いました。教師と看護師の中間のように思えたのです。私はOT学科に入学し、OTが好きになりました。3年後に資格を取りました（当時は大学にOT学科はありませんでした）。1970年代のOT教育は活動分析、機能評価、ADL評価に焦点が当てられていました。手工芸も習い、作業療法実践にこのような活動を取り入れました。テーブル、本立て、陶芸、鍋つかみ、マットなどを作りました。卒業の年に結婚し、1975年には夫と共にワーキングホリデーを使い、ニュージーランドで過ごしました。作業療法士としての最初に仕事をしたのは総合病院でした。病院でのリハビリテーションや、地域センターでの高齢者デイケアで仕事をしました。ニュージーランドで18か月暮らした後、クィーンズランドのブンダバーグで、小さな病院のたった一人の作業療法士として働きました。1977年にはシドニーに戻り、障害児のための病院で学生の指導もしました。学生たちとグループプロジェクトをしました。1978年には、夫が理学療法学科の学生となり、最初の子どもが生まれました。その後の20年間、私の主な作業は母親業で、パートで作業療法の仕事をいろいろしました。1982年に夫が卒業し、私たちはショーヘブンに引越し、理学療法のビジネスを始めました。私はこのビジネスのマネージャーとなり、今も続けています。子どもは二人になりました。1982年から85年まで、大学卒業資格を取るための勉強をし、子どもが三人になりました。10年間は、小さな作業療法の事業所もしていました。出産と子育てのためのプログラムや、職業リハビリテーションの相談事業を行いました。1987年には4番目の子どもが生まれました。

1993年には、子どもたち全員が学校へ行き、プライマリヘルスケアの仕事で「オタワ憲章」を知り、修士課程で学びました。作業科学を学び、アン・ウィルコックに出会ったのです。作業科学の教材を読み、考え始め、そして気づいたのです。何かが足りない—それは、私の実践を導く理論枠組みとクリニカルリーズニ

ングでした。アン・ウィルコックは私の師となり、私は門下生になり、彼女が始めた仕事を続けました。修士号を取ったことは、学習と研究を続けたいという気持ちに拍車をかけました。そして、10年後—50歳になるまでに、博士号を取ると決めました。

修士課程を修了した1997年には、栄養士、足治療の専門家 (podiatrist)、医師と共に、住民のための糖尿病管理プログラムに関わっていました。夫も大学院に行くことになり、私は自分の博士号は棚上げにしました。それでも専門職として活発に学会で発表しました。1999年にはアン・ウィルコック主導の下で、国際作業科学者協会 (International Society of Occupational Scientists: ISOS)、世界作業療法連盟 (World Federation of Occupational Therapists: WFOT) の作業科学のための国際諮問会議を設立しました。2000年には博士課程の学生となり、3年後に修了しました。博士号を得たのは50歳の誕生日の2週間前でした。目標達成です。お祝いのパーティを開きました。

さて、次に何をするか決めなければなりません。何をしたいのか、どこで、誰と一緒に、と自問自答しました。2004年6月に、遂に答えが出ました。私は健康に対する作業の見方を広めたい、作業科学を世の中の主流 (mainstream) にしたい。ショーヘブンで、この地域と共に仕事をしていきたい。2005年に、私はショーヘブンキャンパスに、オーストララジアン (オーストラリアとニュージーランドの意) 作業科学センターを設立しました。詳しくはホームページ <http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc/> をご覧ください。

さあ、最初の質問に戻りましょう。作業科学がどのように私を変えたか、1993年に作業科学に出会ってから、私の人生に3つの大きな変化がありました。まず、作業のレンズで世界を見るようになりました。それは常に作業科学者でいるということです。



ウィックス氏が持参したメガネ (作業のレンズ)

テレビのニュースから、作業的不公正を知り、映画を観たり本を読んだりしながら、登場人物の人生が社会的、政治的、地理的、経済的、文化的にどのように影響されているかを考えます。作業ニーズと作業興味をもつ作業的存在として人々を見るようになりました。私は常にこの眼鏡をかけているのです。二つ目の変化は、作業療法士として、効果的に人々のする必要のあることや、したいことを、できるようにすることができると信じられるようになりました。最後に、私自身を作業的存在として理解するようになりました。自分が何をやる必要があるのかが、わかるようになりました。健康に対する作業の見方を広め、作業科学を主流とすることが、私の行う必要のあること、私の使命なのです。

次の質問は、作業科学の潜在力は何か、です。作業科学の潜在力は広大だと思います。作業科学はまだ20歳の若い学問ですが、作業の知識と理解を深め、発展する可能性は拡大していくと信じています。作業科学の潜在力について3点述べます。まず作業科学は、複合的な学問となる力があります。作業科学は作業療法士が誕生させたけれど、他分野からの貢献があります。今はまだ作業療法士が中心ですが、共同研究もありますし、作業科学の考えや概念はさらに発展し、躍進するでしょう。次に、作業科学には主流となる力があります。一般の人々の考えに影響を与え、主要な科学として受け入れられるでしょう。作業科学が主流となれば、政策にも影響を与え、政治の様々なレベルで、実践にも影響を与えることとなります。作業療法の潜在力も広大です。作業療法士となる皆さんの将来も前途洋々です。作業療法の潜在力は、作業科学の出現で強化されました。作業科学は、適切な後ろ盾を作業療法に与えたのです。健康に対する作業の見方を広めることを通して、作業療法は次のような潜在力をもつこととなります。まず、人々の背景、身体的、認知的、情緒的困難にかかわらず、人々がしたいことをできるようにすること。次に、健康のホリスティックな概念を通して、21世紀のライフスタイルの問題を強調すること。最後に、作業療法は健康的な地域で健康的な生活に貢献する潜在力をもっているのです。不幸なことに現在は、作業療法の潜在力は制限されているように思います。人々からは、作業療法が狭く見られているのです。作業療法の潜在力を知りましょう。殻を破り、新境地を開拓し、事業を起こし、市場を開拓し宣伝するのです。

最後の質問は、私の夢は何か、です。夢の中では理

想世界にすることができるので、私は夢を見るのが大好きです。作業科学が主流となることを夢見ています。作業科学が世界中に知れ渡り、尊重され、多くの学者が参加する学問となるのです。世界保健機関（WHO）が作業の見方を採用するというのも私の夢です。健康に対する作業の見方は、病気の原因を探るよりも、何が人々の健康を維持するかを考えます。WHO がこの見方を採用すれば、国の政府もそう考えるようになるでしょう。人々が「作業 occupation」という言葉を、私たちが毎日行うことや、する必要があることだと理解するようになることも私の夢です。人々が自分自身を、意味のある作業をしっかりと行う必要がある作業的存在として理解するようになることも私の夢です。作業療法が作業を基盤とするようになることも私の夢です。そうなれば作業療法士は、まず最初に人々が自分の好む作業をしっかりと行えるようにと関心を向け、作業機能障害の原因を考えることは二の次にするようになります。作業療法士が健康な人々のために仕事をすると、というのも私の夢です。そのために作業療法は、病院ではなく地域で行われる必要があります。私の最後の夢は、世界中で作業的公正が実現することです。全ての人々が意味ある作業をしっかりと行う機会がある、そういう作業を選択できるということです。

今日の講演の準備で、私に投げかけられた質問を考え、自分の作業歴とその影響を振り返りました。作業療法士として、また作業科学者として、いくつかの重要な決断と、私の人生への影響をうれしく思います。最後に、この振り返りを要約してみます。①学習は人生のためのもので、成長と発達の鍵となります。②柔軟性が必要—家庭と仕事の両立には特にこれが必要です。③チャンスは逃すな—今までと違うことにトライするのを恐れないことです。④有言実行です。⑤自分のすることを信じることで—作業の力を心底信じ、健康や地域開発における作業の役割を信じるなら、情熱を持って、自分の目標の達成のために努力することができるでしょう。

1970年代の初めに、作業療法学生として木工をしました。今は、意味ある作業として木工を選んでいきます。私の学問中心の生活を、バランスよくするための作業として木工をしています。「Mens Shed（おやじさんたちの物置小屋）」というプログラムで毎週木工をしています。

講義後の学生の感想では、作業療法士、作業科学者としてのウィックス氏と同様に、結婚、子育て、仕事、勉強をする女性としての生き方に対する共感や憧れが



ウィックス氏と学生

あった。また、ウィックス氏が作業科学との出会いを「虫にかまれて作業科学に感染した（Bitten' by the bug, Infected' by occupational science）」と表現したことを引いて、「自分もすでに感染していた」と語る学生もいた。映画や小説を例に出し、作業の見方を持っている登場人物と持っていない登場人物を区別する学生もいた。学生たちは、作業療法学科もない大学で、作業科学を知る人がいない大学で、活動を展開するウィックス氏のパワーに敬服しつつ、広く豊かな自然の地でのびのびと楽しく暮らす様子に心和む様子だった。

その後もオーストラリアン作業科学センターはさまざまなプロジェクトを企画し実行している。2008年夏には日豪奨学金制度に応募しないかというウィックス氏の提案を受けて、高木雅之氏（県立広島大学）が、エンデバー・エグゼクティブ奨学金を獲得した。高木氏は2009年8月から4か月間ウィックス氏と共にプロジェクトに参加している。



高木氏と
Mens Shed
のメンバー

Occupational presence を考える：作業従事が導く心理的な変化

近藤知子

帝京科学大学

作業が心にもたらす影響

作業への従事で、気分が変わったり、気持ちが落ち着いたり、ある種のひらめきを得たりすることがある。作業を通じたこのような心理的变化は、作業療法士や作業科学者たちが興味を抱いてきた領域である。Reid¹⁾によれば、古くは1922年にAdolph Meyerが、「人はなにかをすることを通してのみ、聖なる瞬間を経験することができる」とし、1977年にはPeroquinが「人に内在する精神性は、作業に従事する間に発達する」と、2002年にはHasselkusが「作業を経験することにより、幸福である状態が育まれる」と述べている。しかし、作業療法に携わってきた自分自身の経験を振り返ると、作業は、クライアントの心身機能の回復のための手段、もしくは、クライアントが到達すべき生活の目標として扱うことがほとんどで、作業従事による心理的な変化の内容や質、そのメカニズムについて深く追求することはなかったように思う。2009年5月に行われた日本作業科学研究会主催のDenise Reid博士*の講演は、作業への従事とそれによって生じるある種の心理状態について言及するものであった。

Reid氏が見つめようとしている作業と心理的状态との関係は、氏がoccupational presenceと呼び、「人がある場所において作業に従事している時に、自分自身に気が付いているという心理的状态 (a psychological state of consciousness of being aware of self, engaged in occupation in balance)」¹⁾と定義づけるものである。Occupational presenceは、作業への専念 (mindfulness) を通じて至るものであり、自己の気づきが促され、人の幸福感に影響を与えるというのである。この心理的状态の特徴として、作業の文脈に大きく影響されること、作業従事に際し常に生じ

るわけではないこと、快感である必要はな

いこと、意識的な気付きがあること、ある物事や事柄に注意が注がれていることなどが挙げられている。

Occupational presence とバーチャルリアリティ

Reid氏がこのような心理状態の概念化を思いついたのは、氏が関わっていた、子供たちの「playfulness(遊び性・遊び感覚)」とバーチャルリアリティ (仮想現実) との関係性を探る研究プロジェクトがきっかけだったと言う²⁾。プロジェクトでは、障害を持つ子供が、テレビモニターに現れてくる画面に応じて体を動かし、サッカー、バレーボール、カーレース、宇宙船旅行、水泳、スノーボード、楽器演奏、描画などを行う。現実世界では身体を使うことがままならない子供たちが、架空空間で、ボールをけったり、車を運転したりするのである。この研究により、子供たちは架空空間を楽しみ、創造性、自己表現、活動のコントロールといった遊び感覚を発揮していることが明らかになった²⁾。この結果とは別に氏が興味を抱いたのが、子供たちが発した「I was really there! (本当にそこにいたんだ!）」という言葉である。子供たちは架空の世界にも拘わらず、その空間の中に入り込み、自分が「そこ」にいたということを強く感じていた。

バーチャルリアリティを始め、テレコミュニケーション、ビジュアルコミュニケーションなどの領域では、社会心理学、知覚心理学、工学的側面から、sense of reality や presence と表現されるような、存在感の研究が行われてきた¹⁾。Reid氏は、このsense of reality や presence と呼ばれるような心理状態を、作業との関係で追及することに興味を持ったのである。

Presence とは何か？

Presence とは、ではいったいどのような概念なのだろうか？一般的な英和辞典に記されている presence の意味は、①存在すること・いること・出席、②面前・側・近接・③態度・風采・威厳のある人、④存在するもの・影響力、⑤駐在・その影響力、⑥臨場感などがある³⁾。英英辞典を

* Denise Reid 博士は、カナダで最も由緒ある作業療法校であるといわれるトロント大学作業科学・作業療法学部大学院およびリハビリテーションサイエンス学部大学院の教授である。25年以上も同大学の教育に携わっておられるだけでなく、研究者としても80に及ぶプロジェクトに関わり、膨大な数の研究論文を執筆されている。

みると、存在している事実や状態などのほかに、人の物腰・ふるまい・雰囲気や、演技者の演技や影響力の質などというものもある⁴⁾。または、presence と限りなく近い形態をもつ present には、「今」「現在」、そして「プレゼント (贈り物)」などという意味が含まれ、動詞になると、「贈る」「差し出す」「紹介する」「引きおこす」などの意味もある。このように presence は、広い意味範囲をもつ言葉であるが、もし、この意味の核となるところを見つけ出すとしたら、あるものが何かから現れ出ているような状態、または現れたものそのものということだろうか。

Presence は、また、心や精神を扱う分野では、比較的によく耳にする語であるという (Reid 博士との会話より、2009)。実際、presence のキーワードで複数のサイトをインターネットで見つけた。その一つは、マサチューセッツ工科大学で教鞭をとる Peter Senge 氏らのサイトである⁵⁾。ここでは、presence は、自然界から借用した概念であるとして以下のように説明される。自然界では、ひと粒の小麦は、小麦の粒であるのみならず、葉や穂をもった小麦全体が、その中に含まれる。また、私達の身体の一つひとつの細胞の中にも、からだ全体の DNA が含まれている。このような部分と全体の関係性から、私達が、目にしたり、耳にするものは、あるものの部分であるかもしれないが、その部分には必ず全体が含まれ、表れ (presence) しているとみなすのである。そして、presence は、人が今の瞬間を十分に意識し、そこで生じていることに注意を注ぎ、それまでの考え方にとらわれず、開かれた状態にあることで生じる⁶⁾。Senge 氏は、五感をとぎすまし、自分の身の回りに在る物や生じている事があるがままに受け入れるというような実践を presencing (presence と sense を組み合わせた語) とし、この presencing を通して、人・組織・社会は、深い意味での変化を遂げることができるとして紹介している。このような実践は、瞑想と深い関係があることが気付かれている¹⁶⁾が、私達、日本人には、座禅・黙祷などによる五感の鋭敏化や悟りの境地など、すでに、親しみのある知識だともいえよう。

Reid 氏が概念化しようとしている occupational presence は、氏が講演において、禅の実践について触れておられたことや、また、occupational presence を促進するための要素として、「何かに意識が集中していること」、「受容」、「判断の停止」、「興味」、「忍耐」、「内的経験」などの要素を提示していることから、英和辞典の直訳による存在・面前・態度などよりは、Senge 氏が言う presence の概念から考え進めていく方が理解しやすいかもしれない。ただし、Senge 氏の提唱する presence と、Reid 氏の

occupational presence との違いは、presence が、変化と変化のための実践に焦点をおいているのに対し、occupational presence の焦点は、presence と作業との関係性にあるといえよう。例えば、Reid 氏は、どのような作業が presence を生じさせるのか？作業従事との関係で、人はどのくらいの頻度や強さで presence を経験するのか？作業の種類によって presence の程度は異なるのか？この経験は、幸福感と関連するのか？関連するとしたらどの程度の貢献か？などという疑問を探究しようとしている¹⁾。

日本語で考える

さて、presence という語の背景を頭に、私は最近、Reid 氏が紹介したこの概念を、日本人としての経験から見つめなおしている。なぜならば、「人がある場所において作業に従事している時に、自分自身に気が付いているという心理的状态 (a psychological state of consciousness of being aware of self, engaged in occupation in balance)」が、私の中でも一つしっくりこないからである。いったい、自分自身に気が付いている状態とは、どのような状態なのだろうか... 私は留学中に様々な言語を母国語とする人たちと討論した経験から、思考というものが無意識のうちに母国語に大きな影響を受けることを実感した。そして、何か根本的なところで話が伝わらないと感じた時には、言葉だけに耳を傾けるのではなく、その人が語ろうとしている現象を「日本人の頭」で想像することを試みてきた。この方法で、Reid 氏の表現しようとする occupational presence を考えてみた。

Reid 氏が presence の概念を考え付いたのは、「I was there!」という、「自分がそこにいた」という子供たちの言葉である。英語では日本語と異なり、必ず主語が文章の中に登場することは周知の事実である。このような表現を、日本の子供たちだったらどのように表現するだろうか？私が思いついた言葉は、「本物みたい!」である。他にも、いろいろな日本語表現が考え付くかもしれないが、いずれにしても、日本語では、文中に主語 (自分) が現れることはまずないであろうし、また、それを表現する本人も、「自分」が意識化されることはあまりないように思う。自己 (self) に対しての西洋的な感覚と日本的な感覚の違いをここで述べるつもりはないが、言語の違い、ひいては文化の違いが、ここで切り取られようとしている現象の概念化や定義に影響を与えているのではないかという印象をもった。

そんなことを考えていて思い出したのが、Reid 氏が講演中に紹介したビデオである。ビデオには、楽器を演奏中に occupational presence を経験した女性が取り上げら

れていた。そこでは、この女性は頻繁に、I was aware of (私は本当に...に気づいた) という表現を用いていた。彼女は、「私」が、自分が奏でる楽器の音や、周りの人の奏でる音楽によく気付いたと伝えていたのである。Reid 氏の論文中に紹介されているダンサーの例では、「私は本当に音楽を感じます、私は本当に自分の体を動いているのを感じています (I really feel the music, I feel my body moving)」というように、「私」の経験を表現している¹⁾。二人はどちらも、「自分」という主体を強調しているように見える。

しかし、もし、日本人がこれらの状況を表現したらどうなるであろう。「音が本当によく聞こえた」、「音楽が体の中に入ってくる」「体が勝手に動く」というように、自分が感じているものの対象物の方がむしろ強調されるのではないだろうか？そして、「私」という感覚は、それに相応して、どちらかといえば薄れたり、無くなったりするのではないか？そう考えながらこの現象を日本語で定義づけると、occupational presence は、「人がある場所において作業に従事している時に、自分自身に気が付いているという心理的状态」というよりは、「まわりの物や自分の体に対する感受性が高まり (感覚刺激に対する閾値が下がり)、自分自身という感覚が消えたり、薄れたりする心理的状态」と表現できるかもしれない。この定義で考えると、Peter Senge 氏がいう「五感をとぎすまし、自分の身の回りに在る物や生じている事があるがままに受け入れる」という presencing の概念も比較的すっきりと理解できる。

Occupational presence の範疇

作業の専念によって至る心理状態は、チクセントミハリ氏が提唱するフロー (Flow) という心理状態もあるが、Reid 氏は occupational presence は、フローとは異なると考える¹⁾。なぜならば、フローは、課題への挑戦と自らの技術のバランスが取れた作業から生じるのに対し、occupational presence は、日常的なありふれた作業でも至り得るからである。また、フローは、常に快感を伴う心理状態であるのに対し、occupational presence は、必ず心地よいものとは限らない。氏は、フローは、広範にわたる occupational presence のスペクトラムの一部にがあるのではないかと考えているという。

Occupational presence の例として、氏が紹介しているのは、「一心不乱にガスレンジを磨いていると、部屋の中に流れる音楽や体の動きが立ち上がってきて、ダンスをしているような感覚になり、終わった時にはピカピカのガス台がある」という、掃除をする女性の経験がある。ま

た、ジョギングの最中や、犬の躰の経験なども挙げられている¹⁾。

筆者自身の経験を振り返ると、以前、茶道の稽古で、一つ一つの作法に集中している際、釜に沸く湯の音がよく聞こえたり、座っている足に感じる畳の硬さを感じたり、というようなことがあった。稽古の最中に起こった湯の沸く音や、畳の硬さに対する感覚の鋭敏化は、稽古の時間、自分のその日の疲労度、周りに座る人の数などという作業の文脈に影響されていた。それは、時によって長く継続することもあったし、すぐに消えてしまうこともあった。音が妙にはっきりと聞こえることもあったが、あまり聞こえないこともあった。このような経験が、occupational presence の経験と言えるかもしれない。また、座っている時、ときどき強く感じた畳の硬さや、正座している足の痛みが、氏の言う不快な occupational presence の経験に当たるのだろうか。この他にも、ネギを小口切りしている時、ふと、まな板のリズミカルな音や、ネギの匂いが強く立ち上がってくるような瞬間の経験や、電車の中で本を読んでいるときに、本から意識が離れ、走る電車が発する音が妙にはっきりと聞こえたりする状態なども、occupational presence と言えるかもしれない。

このように考え進めると、occupational presence は、なかなか興味深い概念である。確かに、作業を通じて、私達の何かが変化している。変化には様々な要因がかかわり、また、個々の文脈に影響される。さらに、現象を切り取るにあたっては、文化的な影響も加味しなければならない。しかし、この変化は、人が新たな気付きを生み出し、新しい世界への繋がりを見出す道となるかもしれない。そして、作業療法士や作業科学者が気付いてきたように、「聖なる瞬間」や「精神性の成長」や「幸福感」へと私達を結びつける可能性がある。概念の輪郭を明確にするために、もう少し吟味が必要である。そして、この概念を深めていくためには、Reid 氏と異なる文化圏にいる私たちの経験や考えが必要不可欠なのではないかと強く思う。

引用文献

- 1) Reid D.: Exploring the relationship between occupational presence, occupational engagement, and people's well being. *Journal of Occupational Science* **15**(1):43-47, 2008.
- 2) Reid, D.: The influence of virtual reality on playfulness in children with cerebral palsy: A pilot study. *Occupational Therapy International* **11**(3):131-144, 2004.
- 3) ジーニアス英和辞典, 小西友七(編), 大修館書店, 1993.
- 4) Merriam Webster's Collegiate Dictionary. F.C. Mish, Editor.

Marriam Webster Incorporate,1994.

- 5) The society for organization learning: Presence : Exploration of profound change in people, organization and society. [cited 2009 8.9]; Available from: <http://www.presence.net/>.
- 6) Heeter, C.: Reflections on real presence by virtual person. Presence: Teleoperators and virtual environments **12**(4): 335-345, 2002.

資料

第12回作業科学セミナー抄録(2008年)

教育講演

生活や健康を作業科学の視点で考えてみる

齊藤 さわ子

特別講演

Astrid と桜の木：作業がもつ変化を起こす力 (transformative) についての考察

ヨセフソン・スタファン

特別講演

なぜ私たちはクライアントに説明するのか

岡本 珠代

佐藤剛記念講演

作業を行なっている患者さまは元気—そのためには、作業療法士は何をすべきか—

中村 春基

【作業と実践の報告】

長期臥床の状態から活動的な生活へと変化をもたらしたブロック折紙の意味

紫村允明,他

生きる力を失ったように見えた事例の変化：意味ある作業はエンパワーする力を持つ

西野 歩

退院を望むようになった精神病院長期入院者～書き物プログラムの及ぼした変化～

佐藤嘉孝

生きがいへと発展した行政プログラムへの参加：N区認知症予防推進活動を通して

石田道代, 他

精神科デイケアにおけるギター作業を通しての回復

西上忠臣

公正と可能性への見通しに関する考察～訪問作業療法の事例から～

大塚美幸, 他

【作業科学研究】

オシャレに焦点をあてて～施設入所高齢者の価値ある作業の従事促進を目指した集団介入の経験～

山本朋子, 他

痛みと作業：村上春樹「ねじまき鳥クロニクル」のクレタの場合

近藤知子

作業，社会参加，ケイパビリティについての一考察

浅羽エリック

自分らしい作業とは何か—作業を通して意味ある存在を経験する—

岡 千晴

日本における身体障害のある高齢者の入院から在宅までの日常生活までの回復過程の特徴

ボンジェ・ペイター, 他

『生活や健康を作業科学の視点で考えてみる』

齊藤 さわ子

茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科教授

普段はあまり考えたりしないことですが、改めて考えてみると、人は本当に様々な活動をして生きていることに気がつきます。そして、それら活動、つまり「作業」について考えたり実際にすることによって人は自分自身を、身体的に、精神的に、社会的に形作っています。これまでしてきた、あるいはこれからする作業の組み合わせや内容によっては、自分自身の人生の満足感や幸福感を得ることが出来る一方で、空虚感や絶望感に陥ったり、病気になることもあります。作業は人の人生や生活と大きな関係があるということ、人の健康や生活にとって作業が切っても切れない関係にあること、作業をすることによって何かを変えられそうだといことは考えればすぐに気がつくことです。

作業に関わる研究は様々な学問分野で触れられてはきたものの、人が作業をすることはあたりまえであるせいか、人と作業の関係があまりにも複雑であるせいか、作業の知識を系統立てて整理し、作業そのものに焦点をおいて研究をしていくという視点は、作業科学という1学問分野が誕生する1989年までなされてきませんでした。このため、今もなお、作業に関しては分からないことが多く、どのように作業をすることで自己の健康を維持・増進できるか、どのように作業を使うことで、肯定的に人の生活や健康に影響を及ぼすことが出来るのかについても、経験的には話はされても、根拠を持って実践をすることができないのが現状です。本講演では、作業科学に興味を持ち始めたばかりの方や今から勉強を志す方を主な対象として、作業科学とは何か、何故作業科学が誕生したのか、誕生してからどのような広がりを見せてきたかを、まず簡単に紹介します。さらに、作業科学の視点で行われた研究結果はどのように人の生活の理解や健康に貢献するかの具体例を提示し、人の生活や健康を高めるために作業科学が有用な学問になりえるか、どのような知識が蓄積されることが期待されるかについて考えていきます。

On an Occupational Science View of our Daily Life and Health

Sawako Saito

If we think about how we spend every day, we realize that our life is comprised of hundreds of activities. The activities we did, do, and will do are “Occupations.” By doing and thinking about occupations, we shape ourselves physically, mentally and socially. Occupations can provide a sense of satisfaction and well-being, while they can also provide a sense of emptiness, hopelessness, even leading to a serious disease. If we think about our occupations, we realize that our life and daily living are based on occupations, that our life and health are inseparable from occupations, and that we can change our life by doing occupations.

The knowledge on occupations had not been systematically accumulated and research studies which focus on occupation itself had not been implemented until the foundation of Occupational Science in 1989 as an academic discipline. This was probably because doing occupations is so natural that many people do not realize its significance and the relationship between a person and occupations is inevitably complex. Because Occupational Science is still in its infancy, we still need to explore better approaches for maintaining or improving our health and daily life by understanding how to do occupations and how we use occupations. So far, we can just talk about most of them through anecdotal evidence rather than research-based evidences.

In this lecture, for those who have just begun interested in studying Occupational Science, I will briefly introduce what Occupational Science is, why Occupational Science was founded as an academic discipline, and how Occupational Science has spread. Then, I will show you examples of how studies of Occupational Science contribute to our health and to understanding of our lives. Finally, I would like to discuss if Occupational Science is useful for improving our lives and promoting health and if so, what knowledge base of occupations we would expect it to contribute to accumulating.

特別講演

『Astrid と桜の木：作業がもつ変化を起こす力 (transformative) についての考察』

ヨセフソンスタファン

スウェーデン王立カロリンスカ研究所作業療法学科

治療手段として作業を用いているほとんどの実践は、生物医学的文脈の中に位置づけられている。この論文では、生物医学的枠組みで考えることにより、個人の変化が実践の中でいかに見えなくなってしまうかについて述べる。十年近くの認知症の方への作業療法の実践と研究、そしてナラティブと行動と社会性との間の関係について哲学者 Paul Ricoeur の理論を使うことから、従来リハビリテーションの実践において用いられてきた手段や道具を再検討する。これらは、介入によって個人や集団が実際に経験する変化を捉えるのに失敗してきた。なぜなら、変化の過程とダイナミックスを捉えるのに失敗してきただけでなく、個人の機能を超越して他者との間で起きていることを捉えきれていないのである。この論文では、Ricoeur の理論に基づき、作業に従事することがいかに変化を起こすか、そしてそのような変化が、人間関係に生じさせる役割について考察する。

“Astrid and the Japanese Cherry Tree; A reflection on how occupation is transformative”

Staffan Josephsson PhD,OTreg.

1/Department of Neurobiology, Caring Sciences and Society, Division of Occupational Therapy, Karolinska Institutet

2/Trondheim University College

3/Research and Development Unit, Stockholm Sjukhem Foundation

Most practices using occupation as a therapeutic tool is situated within bio medical contexts. This paper addresses how transformation becomes invisible in these practices because of biomedical framing. Drawing from almost a decade of experience in and research of occupational therapy interventions for persons with dementia, and using theoretical arguments from the Philosopher Paul Ricoeur on the relations between narrative, action and sociality, the traditional tools and instruments used in rehabilitation practices will be questioned. These have failed to capture actual changes and transformations that individuals as well as groups experience from interventions partly because they are failing to capture processes and dynamics as well as failing to move beyond individual functioning to what happens between individuals.

Based on Ricoeurs reasoning this paper will present alternative outlines for how engagement in occupation can be transformative and further discuss the role of what happens between individuals for such transformations.

特別講演

『なぜ私たちはクライアントに説明するのか』

岡本珠代

元広島県立保健福祉大学哲学・倫理学・生命倫理学教授

標題の問いへの答えは今では自明の理だといわれそうだが、改めて考察を加えてみよう。まず説明という行為の前提になるのは、説明主体と説明を受ける客体、それに説明内容である。また主体と客体は相互に影響を与え合う双方向的関係にあり、説明者は説明の受け手からの反応や情報によって説明の内容ややり方を変える用意をする。説明を受けても理解できない相手に対しては説明行為は成り立たない。説明には理解・了解・同意・拒否などの行為が結果として生ずるが、説明と理解等の行為は双方向の因果関係にある。説明があとの行為を導くように見えるが、適切な説明は説明を受ける側の理解度や質問の質にもよる。

しかし、これは適切な説明についての弁明であって、そもそもなぜ説明するのかの答えにはなっていない。なぜ説明するのか。OTを含む医療・保健従事者がクライアントに行う診断・治療・訓練プログラムの提案は、たしかにクライアントの益をめざしているが、必ず何らかのリスクを含むので、クライアントに危害予防の備えをしてもらわねばならない。また有効な実践のためにも、クライアントの理解・協力・順守がどうしても必要である。つまり、クライアントに積極的に参加してもらわねばならないのである。クライアントにとって最良のプログラムを用意すること、クライアントの理解をうるために最善の努力をすることは、クライアントの人格の尊厳を尊んでいることの証拠（証左）であり、両者はある意味で対等な関係にある。

しかし、もしクライアントに、説明などいらない、お任せするから最善の術を施してほしいと言われたらどうか。全幅の信頼を寄せられることは医療者にとって幸せなことである。それでも、医療者とクライアントは癒しの技という共同作業に参加する方がよいと言えるのはなぜか。共同参加で医療の不確実な結果を共有することは双方にとっての負担（責任）の軽減になるという効用ばかりではない。米国の哲学者ジョン・デューイ（1859-1952）は共同参加そのものに価値があると考え、参加民主主義を説く。そこでは共有、共同参加、コミュニケーションはほとんど同義語である。個人の健康であれ自己実現であれ世界平和であれ「善はコミュニケーションによってのみ存在し存続する。」

作業療法ではセラピストとクライアントの関係がコミュニケーションを取りやすい関係になっている。この関係は作業をとおして深められる。デューイが子どもの教育に関して語る作業のもつ効用は作業療法にもあてはまる。作業とその効用についての共通理解はコミュニケーションによってのみ得られる。OTは作業プログラムについてクライアントと共通理解に達するために説明するのである。

“ Why do we explain to the client ? ”

Tamayo Okamoto

The act of explaining, informing or clarifying presupposes a triad relationship of the person who explains the information and the other person who receives it as well as the content of the information. The direction of the act is not one-sided but reciprocal in the sense that the questions and responses of the informer and the recipient regarding the information could transform the form and the content of the original information as well as the consciousness of both parties. But why do we explain at all? For one thing, the proposed program of diagnosis, treatment and training could involve some kind of risk that needs to be attended by those involved. For another, or more importantly, the informed participation of the client poses its fundamental value to a member of the democratic society. It was John Dewey (1859-1952) who stressed the concept of democratic participation. He also emphasized the effect of occupation in education. The common understanding of occupation and its effect is obtained only in communication. We explain to the client for the purpose of attaining common understanding appropriate to the members of the democratic society.

『作業を行なっている患者さまは元気—そのためには、作業療法士は何をすべきか—』

中村春基

兵庫県立西播磨リハビリテーションセンター
リハビリテーション西播磨病院リハビリ療法部長

第12回作業科学セミナーにお招きいただき有難うございます。実行委員長の西野歩先生から「臨床での話をして下さい」というご依頼で、標記のテーマでお話をさせていただきます。

さて、私は作業療法士になり32年目になります。うち専門学校で教官を10年間勤めましたので、臨床経験は22年になります。

この間、作業療法を実施してきたのごたえは、「すばらしい治療方法」だと感じています。それは、「作業を持つ人は元気である」という素朴な現実です。

脳血管疾患などで障害を持たれた患者さまのお話を聞くと、発症後「死を考えた」という人がほとんどです。現状を受け入れるまで3年かかったという話は、多くの患者さまから聞かれます。また、軽い「うつ」状態で療養を受けている方々も多く見てきました。しかし、患者さまに寄り添い、作業療法を行う中で、主体的な作業を獲得されて行かれる過程をそばからみていると、「家族の大切さ、人との出会い（同じ境遇の、もしくはもっと重症の患者さま）、元気なころのその人の文化史（人間関係、仕事の内容）、パーソナリティ、作業を行なえる環境」など、主体的な作業を継続するためには何が大切かを認識させてくれます。

患者さまにとって「作業」は、「自分らしさ」「自分と回りの人」「自分と社会」「自分と生活」など、それぞれの関係を「つなぐ」「確認する」ツールとして機能しているように思います。そして「作業」は、「満足感」「役割」「現実」「チャレンジ」「休息」「健康感」「自己確認」等々の主観的な思いを感じさせてくれるようです。

作業療法士としては、このような患者さまの行動の変化を見るとき、作業療法の素晴らしさを実感しています。

最後に、作業療法は誰のためにあるかを最近よく考えます。そして、「作業療法は利用者のために存在し、利用者自ら“作業療法”が行えるようになること」が大切だと思うようになりました。私の作業療法はそのような意味において、患者さまとともに「目標」「治療プログラム立案」「実施」「効果の評価」の一連の過程を共有する形態に変化していきます。そのような取り組みも一部紹介し、主体的な作業を獲得する「技術」について、皆様と検討できたら幸いです。

佐藤剛先生には、協会活動を通して、「作業療法に対する真摯な姿勢」をいつも感じていました。この研究会で、しかも佐藤剛記念講演という名誉ある機会を与えていただいた西野歩先生には心より感謝しています。佐藤剛先生の思いの「いくつ」を皆様にご提示できるか不安一杯ですが、私の臨床の一端を垣間見ていただき、このセミナーの盛會に寄与できたら幸いです。

【事例紹介】

「退院時、近位監視での杖歩行程度の移動能力を持つ方の、卓球、水泳に取り組み、健康を維持されている例の紹介」

Mさんを紹介します。現在59歳、女性、専業主婦の方で、ご主人さまと娘さん3人の5人家族です。平成14年4月（当時53歳）に脳内出血を発症、左片麻痺となり、退院時の移動形態は、T字杖、AFO装着での近位見守り歩行（屋内）、屋外は車椅子。ADLは入浴を除き自立レベルでしたが左側の空間無視がありました。ご主人さまは発症当事鉄鋼会社に勤務されていましたが、現在は退職されMさんを陰日なたから支援されています。

平成14年7月から外来でのOTをはじめたのですが、外来第一日目は、髪の毛は「紫」のメッシュを入れ、入院時のときと変わりようにびっくりしました。そして訓練終了後、OT室を出られるとき、3mmほどの段差でつまずき、危なく転倒されそうになったことをはっきり覚えています。それぐらい、歩行能力は低下しており、転倒により大腿骨頸部骨折の既往のある方です。

現在Mさんの週間スケジュールは以下のとおりですが、卓球、水泳、デイサービスでのパワーリハや手工芸、ほとんどすべての家事活動を実施されています。Mさんの今のような生活になるためには、Mさんの「ガッツ」と、ご主人さまや娘さんの支援があればこそと思っています。

月曜日 デイサービス (パワーリハ)
火曜日 あけぼの会の健康体操 (脳卒中友の会主催)
水曜日 卓球 (午後 6 時 30 分から 8 時 30 分)
木曜日 デイサービス (パワーリハ)
土曜日 K市の身体障害者水泳教室

退院当初の様子を聞きますと、立位耐久力は5分程度でバランスも悪かったため、訓練として、台所に寄りかかっていたの茶碗洗いから始められたそうです。疲れたら休み、元気を取り戻しては台所の縁をもって立ち上がる様子を想像しますと涙が出てきます。1日3回はその作業をされたのですから相当の訓練量になったと予測されます。そうする中で徐々に立位での作業能力も向上され、次に取り組まれたのが卓球です。家の近くの学校を借りて、ご主人さま相手に、最初は台に寄りかかり、「ピンポン」をはじめ、今では、卓球大会に出場され優勝されるまでになっておられます。エピソードの一つ紹介します。「消える魔球の正体は、左視空間無視」とのこと、今でも、左側から来るボールは見えにくいそうですが、少しずつ、見えるようになっていくそうです。

次に紹介するのは「水泳」です。これは昨年から取り組まれているそうです。現在の移動能力は、退院当初と比較にならないほど改善し、杖なしでも歩ける状態ですが、もし、皆様の受け持ちの患者さまが、水泳をしたいと相談されたらどのようにお答えしますか。現在15mは泳ぐことができるようになっています。Mさんの事例を通して、入院プログラムの中に水泳を取り入れたらいいと思っています。

Mさんのコメントを紹介します。

卓球をやりだしたきっかけ：ご主人さまのお友達の勧めで始めた。

卓球を行う上で苦労したところ：学校までの行きかえり。坂があった。装具がオルフィットで固定性がなく、バランスをくずした。その後、靴べら装具を使用して安定した。はじめ、左側は全然見えなく、打ち返すことができなく、じっとたっていて、ご主人さまからしかられた。普通歩くのでも、左側の電柱にぶつかっていた。なれてきたら打てるようになったが、1年ぐらいいは見えなかった。

卓球の楽しみ：思いっきり打ててすっきりする。仲間と会えること。楽しみと、訓練をかねることができる。技術的な向上。終了後お友達との雑談が楽しみ。外にでるきっかけ。

水泳をやりだしたきっかけ：18年9月。K市のリハビリ水泳教室に参加。歩行訓練が中心。1年ぐらいい実施。その後、物足りなくなると19年4月から水泳教室に参加。今、25mクロール息継ぎの練習中。

水泳を行う上で苦労したところ：水の中に入ることが怖かった。元気なころから「かなづち」だった。水の中で、患側下肢が浮いて、バランスが取れなく困った。手すりを持って歩くときはOK、帰りはバランスが取れなく困った。水の中での足の使い方を指導してもらい、歩けるようになった。陸上でも歩行は改善した。まっすぐ泳ぐようになるには、目印をつくり泳ぐようにしている。

水泳の楽しみ：水になれて楽しくなった。泳げるようになった。気持ちいい。上手く泳げたら誉めてもらえる。友達が増えた。いろいろな人との出会いがある。

作業療法士同じ障害をお持ちの方に一言：できることを経験させて欲しい。私はできないと思っている人なので、早くから、そのような経験を体験させて欲しい。

“Clients with an occupation are energetic—How occupational therapists can help clients—”

Haruki Nakamura

Thank you for inviting me to the Twelfth Occupational Science Seminar. In request of talking about my clinical experiences by the head of committee Mrs. Ayumi Nishino, I would like to talk about the subject above.

I have been an occupational therapist for 32 years. For 10 years I have been at school as a teacher, so I have had 22 years of clinical experience.

From these years of experience, I have come to believe that occupational therapy is a wonderful therapeutic method. Simply put, one with an occupation at hand is energetic.

Listening to clients who have been disabled through for example CVA, most have thought about dying after suffering a handicap. It is heard from many clients that it takes 3 years to accept the reality. I have also seen many who have received treatment for mild depression. However, by being alongside the client, performing occupational therapy and watching them obtain an occupation which they can perform actively and voluntarily, I have realized what is important in continuing such an occupation. They are such things as family ties, getting to know others with similar or even more severe handicaps, history before suffering a handicap which includes previous jobs and human ties, personality and environments suited to perform the occupation.

For clients, I believe that occupations are a means to relate themselves with others, society and everyday life. Occupations also give people satisfaction, a role inside society, a sense of reality, challenges, time to rest, health and a realization of one's identity.

As an occupational therapist, watching the clients change through occupation makes me realize the wonderful aspects of occupational therapy.

Recently I frequently ponder for whom occupational therapy exists. And I have come to believe that it is for the clients. It is important that the clients themselves can perform occupational therapy on their own. In this respect, in my occupational therapy, I work with the client to set a goal, make a plan, go about the plan and evaluate its effects. I would like to share part of this flow and discuss with you about the techniques necessary to obtain an occupation that can be done actively and voluntarily by the client.

From Mr. Tsuyoshi Sato, I have always felt his sincere attitude towards occupational therapy through his activities in the OT organization. I would like to deeply thank Mrs. Ayumi Nishino for providing me with the honor to speak in Sato Tsuyoshi Memorial Lecture in this seminar. I am worried how much I can actually share Mr. Tsuyoshi Sato's ideas, but it would be a great pleasure if I could show part of my clinical experiences and contribute to the success of this seminar.

Presentation of a case with reference materials:

“A case of a client who is maintaining her health through table tennis and swimming. When she was discharged from the hospital, she was only able to walk with a cane under close supervision.”

I would like to introduce to you Mrs. M. She is presently 59 years old and is a housewife living with her husband and 3 daughters. In April 2002, at the time 53 years old, she suffered an intercerebral hemorrhage with a left-side-paralysis. When she was discharged from the hospital, she was walking with a T-cane. She used the AFO to walk under close supervision indoors, while using a wheelchair outside. All ADL other than bathing were done without help, although there was left-hemispatial neglect. Her husband was employed in a steel industry company when she suffered the intercerebral hemorrhage, but is now retired and is supporting her faithfully.

[continued from previous page]

Her OT began on July 2002 as an outpatient. On the first day, her hair was meshed in purple; I was struck by how different she looked compared to the time when she was first send to the hospital. After the first training session ended and when she was going out the door, I can still clearly remember how she stumbled over a bump of about 3 mm high and almost fell to the ground. Her ability to walk had fallen that far; after all, she has a past of femoral neck fracture.

Presently her weekly schedule is as shown in the table below, but as I will show in photographs, she does almost all domestic chores, plays table tennis, swims and participates in the craftworks and power rehabilitation at the day service center. I believe that her hard work and support from his husband and daughters have enabled her to spend the type of life she is spending right now.

Monday	Day service center (power rehabilitation)
Tuesday	Akebonokai's exercise (sponsored by the Nosocyu Tomonokai)
Wednesday	Table tennis (6:30~8:30 P.M.)
Thursday	Day service center (power rehabilitation)
Friday	Swimming school for the disabled at K City

At the time she was discharged from the hospital, since she was only able to stand for about 5 minutes and since her body balance was poor, she started out training by first washing the dishes while leaning against the kitchen table. Tears came to my eyes when I imagined how she must have stood up holding on to the edge of the kitchen table, while resting when tired. She did this occupation for at least 3 times a day, so it must have been a lot of training. Through this training, her ability to perform occupations while standing improved little by little. The next occupation she sought out to do was table tennis, shown in the photograph. She borrowed a room in a nearby school and played table tennis with her husband, first while leaning against the table. Now she has improved to the point where she has won in table tennis tournaments. In one episode, she experienced a so-called diabolical ball that disappears, which was due to left-hemispatial neglect. She says that even now she has trouble seeing balls coming from the left side, but that gradually she has become able to see them.

The next occupation I would like to share is swimming. Mrs. M has started swimming last year. Right now her ability to move has improved significantly compared to the time she was first discharged from the hospital; now she can even walk without a cane. However, if one of your clients actually said he/she wanted to swim, how would you answer him/her? Mrs. M can now swim 15m. Watching her case, I now suggest including swimming as part of the exercise program in hospitals.

I would like to share some of Mrs. M's comments.

First motivation to start table tennis: started from her husband's friend's advice.

Difficulties she has had in playing table tennis: going to school and back. There was a steep hill on the way. The orthosis was ORFITBRACE and didn't have stability, so she lost her balance. Later on, she used SHB (Short Horn Brace) for stabilization. In the beginning she could not see her left-hand side at all and could not return balls. She would simply stand still and her husband would get angry. Even while simply walking, she ran into electric light poles to the left. Eventually she got used to it and became able to return balls, but for a year, she could not see the balls coming from the left.

The fun thing about playing table tennis: exciting to hit the ball hard. She can meet friends. She can train while also having fun. It is exciting to try and improve her technique. After playing table tennis, she can enjoy talking with her friends. This is a chance to go outside and get refreshed.

Motive to start swimming: participating in a rehabilitation swimming school of K city on September 2006. It consists mostly of trainings to walk. She has been swimming for approximately a year. Afterwards she felt it wasn't enough so she took part in a swimming school on April 2007. At the moment, she is practicing taking breaths during 25m free-style swimming.

Difficulties she has encountered while swimming: was afraid of going into the water. It was not her forte even before becoming handicapped. Inside water, her disabled lower limb would float and it would become difficult to maintain body balance. It was OK for her to walk while holding on to a handrail, but she could not maintain her balance on her way back. She received supervision as to how to move her legs inside the water. Afterwards, she was able to walk. Her walking outside of water improved as well. In order to swim straight, she is using a mark for guidance.

The fun part about swimming: has become fun by getting used to it. Now she can swim. It simply feels good. She is praised when she swims well. She now has more friends and can meet new people.

One word to occupational therapists and to people with similar disabilities: would like to experience what can be done. There is a tendency to think that something cannot be done, so it would be nice to go through the experiences at an early stage after becoming disabled.

【作業と実践の報告】

『長期臥床の状態から活動的な生活へと変化をもたらしたブロック折紙の意味』

紫村允明¹⁾, 大山好文²⁾, 橋北誠孝²⁾,
横井研²⁾, 西方浩一³⁾

1)介護老人保健施設薫風園, 2)社会福祉法人毛呂病院,
3)文京学院大学

【はじめに】高齢者は社会的役割の喪失, 身体の衰えに直面する. 特に施設生活ではこれらをきっかけとし, 非活動的な生活となり習慣化してしまうことも多く, それらへの対応は苦慮している. 今回, 「頭がガンガンする」といい, 一日の大半を臥床にて過ごし, 意欲低下が著しい高齢女性が本人の好きな作業に取り組んだ. その結果, 活動量が増え, 生活リズムが整い, さらには他者との交流も楽しむようになったので報告する. 【経過】当初, 訓練拒否もあり臥床傾向であったが「手作業が好き」, 「ブロック折紙等をして人にあげていた」とのことから, ブロック折紙に誘ってみた. 短時間ではあるが行うと, 「頭痛が減る」と言い出し, その後自ら OT スペースへ出向き日中の大半を折り紙に費やした. また「折りやすくしたい」と拘縮のある指の ROM 訓練を求め, 身体への関心を示すようになった. さらに, 「歩くと便が出る」と言い運動にも興味を示した. 作品が完成すると, 孫や他利用者にあげ, それをきっかけとして他者との交流を楽しむようになった. 加えて施設の活動にも参加するようになり生活リズムが整うようになった.

【考察】ブロック折紙は離床を促す目的で導入した作業活動であった. 手作業が好きで, 経験があることに加え, 作業の持つ没我性の特徴が頭痛を忘れさせた. また病前, 畑の収穫物を近隣にあげたり, 町内活動での役割も担い社交的な生活を送っていた. 「農作物を作る」と「折紙を作る」という生産的作業の類似性が意味をもち, 日中の大半を OT スペースで過ごし作業を行う結果となったのではないかと考えられる. また作品をプレゼントし喜ばれることで役割として意識することができ他者との交流へとつながった. 更に OT スペースの滞在時間が長くなったことをきっかけとし, 他の活動への参加が容易になった. 施設は生活の場であり, そこでの日常に意味ある作業を取り込むことは, 活動的な生活へ変化を及ぼすことが理解できた事例であった.

The Effect of Block Paper Folding on Attitude in Long-Term Bedbound Elderly client

Yoshiaki Shimura¹⁾, Yoshiyumi Oyama²⁾, Tomoyuki Hashikita²⁾, Ken Yokoi²⁾, Hirokazu Nishikata³⁾

1)Nursinghome Kunpuen, 2)Moro Hospital,
3)Bunkyo Gakuin University

Introduction: Elderly people have more risks to lose their social role and decline their body functioning. Especially when they start their life in the facilities, in many cases, they lost their active life before and make it custom. We have a hard time to deal with it. In this report, block paper folding was proposed for aged woman as one of her activities in occupational therapy. She complained of a headache to us and spent the greater part of her day in her bedroom and her willingness has decreased remarkably. However, after performing block paper folding, her willingness to participate increased, she started interactions with others, and the rhythm of her daily life changed. Thus, block paper folding became an indispensable occupation for her. Progress: Although there are her refusal of training and her bed bounding life at the beginning, we had asked her opinion and her habit. She had indicated that she liked to do hand work and performing block paper folding to make handiwork and give them to others. After being invited several times, she started to perform block paper folding, although for only short periods of time. Consequently, she said that her headache decreased. She went to an occupational therapy (OT) room on her own initiative, and spent the greater part of a day in the room intently performing block paper folding. In order to be able to fold paper more easily, she requested a range of motion (ROM) exercise; namely, she became interested in her own body. Moreover, she said that the feces could be easily excreted after walking; namely, she became interested in exercise. After completing block paper folding, she presented her handiwork to her grandchild and other clients. These opportunities allowed her to enjoy social relations with others. She began to participate in activities in the facility, and the rhythm of her daily life improved.

Discussion: She originally liked hand work and had experience with block paper folding. Since absorption was effective by block paper folding, this allowed her to forget about her headache. Before spending time in a nursing-care facility, she had been engaged in agriculture and played social roles, such as giving harvested goods to neighbors and participating in an election campaign for the local community. Since paper folding

is similar to agriculture in terms of productive performance, she was interested in block paper folding and spent the greater part of a day in an OT room performing it. Moreover, since her handiwork was favored by others, she came to recognize a role for herself in society and began to positively communicate with others. We think that because she spent more time in the OT room than she had before, her participation in other activities became easier and her life became more active than before.

This is an understandable example which shows that facilities are life spaces for elderly people. Therefore giving them meaningful occupation in their daily life is a useful intervention to change their non-active life into more active life.

『生きる力を失ったように見えた事例の変化:意味ある作業はエンパワーする力を持つ』

西野 歩
社会医学技術学院

はじめに: A 病院療養病棟入院中の B 氏を担当した。痛みを訴え日中の殆どをベッドに臥床して過ごしていた B 氏だが、意味ある作業に注目して作業療法介入した結果、主体的に日常生活や作業を行うに至った。本報告では、その経過と考察を述べる。

事例および作業の意味: B 氏は、筆者担当開始時 60 代半ばの男性で、すでにエンジニアとしての勤務を退職し、その後は友人らとウォーキングやお酒を楽しんでいた。2 年前の脳卒中右片麻痺の発症後は転院を繰り返していた。OT 開始時、B 氏は運動麻痺をもち、持続的な上肢の痛み故に 1 日を臥床し過ごしていた。日常生活は、食事・歯磨き以外はすべて介助を受けていた。筆者は、B 氏に陰鬱で自分のことをも見放し、生きる力を失ったかのような第一印象を持った。OT では、痛みへの介入をしながら、B 氏が主体的に行いたいと思う作業は何なのか探索した。結果、B 氏は「もう僕はどこにも行くところがないから」と将来を悲観する一方で、「人のために」なり「人との交流」ができる作業を行いたいのではないかと筆者は解釈した。

経過と考察: エンジニアとして道具製作への拘りを保障し、かつ人のためになる作業として木工で自助具と写真立てを製作してもらった。彼は、他患と作業療法士に感謝を述べられ、作品を賞賛された。これらの賞賛や感謝の言葉は、より熱心に作業に取り組みせ、また対人交流を増やした。痛みの訴えはなくなり、入浴以外の日常生活は自立した。また、血糖値測定を自ら行い、自主訓練を通して糖尿病の体調管理に努めるに至った。個人にと

って意味ある作業を OT に取り入れると、対象者自身が主体的に生きる力をつけることになるのではないか。

A case showing that a meaningful occupation can make one live actively and voluntarily

Ayumi Nishino

Japanese School of Technology for Social Medicine

Introduction: Case was receiving medical treatment at hospital A. He was constantly complaining of pain and spent the entire day in bed, but by presenting a meaningful occupation through occupational therapy (OT), he began to live an active life. This article describes and discusses its process.

Present case and the meaning of the occupation presented to Case: At the time, Case was a male in the mid 60s, retired from an engineer and enjoying walking and drinking with friends. After he suffered a stroke and the right-hand side of his body was paralyzed two years ago, he was frequently in need of hospital treatment. When beginning OT, Case had chronic pain in the upper limbs and spent the entire day in bed. In everyday life, he needed help in everything except eating and brushing his teeth. It seemed as if he had given up on himself and had lost the will to live. In OT, I attempted to relieve the pain in the body while searching for an occupation which the patient might perform actively and voluntarily. The author felt that while the patient was pessimistic of his future, that “I’m heading no where....,” he wanted to “be of use to other people” and “communicate with others.”

Process and discussion: Utilizing the fact that he liked to make things as an engineer and also so that he can “be of use to other people,” woodwork was presented so that he could make self-help devices for other patients and photo stands for others. He was greatly appreciated by other patients and occupational therapists. His works were also applauded. As a result, he worked even harder and the amount of his communication with others also increased. Complaints of pain disappeared and the assistance he needed in everyday life was limited to bathing. The patient had diabetes, but he also began to actively take care of his body by being alert of his own blood sugar level and by performing exercises. By introducing an occupation which is meaningful to the patient, the patient can obtain the strength to live actively and voluntarily.

『退院を望むようになった精神病院長期入院者～書き物プログラムの及ぼした変化～』

佐藤嘉孝

特定医療法人 葦の会 オリブ山病院

奇異な作業を行う精神病院長期入院者は、しばしば「精神症状の悪化した存在」として理解される。しかし今回は、放便放尿を行う事例を「作業的存在」としてとらえ、「書き物作業」という意味があると思われた作業を通して介入した結果、作業バランスが変化し放便放尿がなくなり、「退院したい。」と述べるようになったので報告する。

A 氏 (60 代女性, 統合失調症, 高学歴) は, 長期入院者であり, 病棟や集団作業療法プログラムにおいて時折放便や放尿があり, 職員がそれを止めるように声かけを行っても怒声をあげたりしており, 時間が過ぎるのを待つという状態であった。カラオケやマッサージといった作業も, 彼女のそのような作業パターンに変化を与えるように思われなかった。

そこで私は, 放便放尿作業も彼女にとっては何かしらの意味があるはずで, 彼女にとって他の意味のある作業をプログラムに取り入れることで, 作業バランスが変化し, 放便放尿が軽減するのではないかと考えた。評価を通して, 自室においてはベットサイドで辞書や聖書などを写すことを中心とした書き物作業を行っていたことが分かった。よって書き物作業を他者と関わりながら行うプログラムを行うことにした。

10 ヶ月間ほど実施したところ, プログラム時間外でも自ら作業療法室事務所を「何か書き物ない?」と訪ねてくるようになった。職員との会話や空想画などを中心に書きながら, 生い立ちや現在の気持ちなど様々なことを語り, 「退院したい。」と述べるようになった。その頃, 放便放尿はなくなり, 病棟職員からも「放便・放尿もなくなり, 意思疎通も取りやすくなった。」との意見が聞かれた。

彼女にとって放便放尿という作業は, 「他者と関わりたい」というメッセージを伝える作業だったのではないかと考える。そして, プログラムを通して, 彼女にとって意味のあった書き物作業に, 他者との交流という意味が加わった結果, 放便放尿を行う必要がなくなったのではないかと考える。またさらに, 思いが満たされ, 人生に対して希望がわき, 退院を希望するようになったのではないかと考える。

A long-term patient in a psychiatric hospital seeking discharge -changes after participation in a writing program

Yoshitaka Sato

Oribuyama hospital

A long-term patient in a psychiatric hospital showed strange behavior such as relieving herself everywhere, and was considered to be a patient whose symptoms were getting worse. However, clients also need to be understood as occupational beings.

Case A is a highly educated, in her 60s with schizophrenia. She had been hospitalized for a long time and used to relieve herself everywhere in the ward and in a group program of occupational therapy. She got angry when staff told her not to do so. We just waited for her to stop, and karaoke and massages could not change her behavior.

I thought relieving herself everywhere must have some meaning for her, and that it might decrease if her occupational balance was changed by adding other meaningful occupations. Through assessment I found that she was writing from the Bible and a dictionary. I decided to plan a program of doing writing occupation with others.

After about ten months, she began to visit our occupational therapy office. Then she said, "Is there anything I can write?" During our conversation she told us her history and her emotions related to writing and imaginative drawing. Finally, she said, "I want to be discharged from this hospital." At the same time she stopped relieving herself. The staff working in the ward said, "She stopped relieving herself and we get along with her more than before."

The meaning of her relieving herself may have been a message that "I want to get along with others." And she may have stopped relieving herself because the writing occupation provided her with a new meaning of getting along with others. Her occupational needs were satisfied. She got hope and requested discharge from the hospital.

『生きがいへと発展した行政プログラムへの参加：N 区 認知症予防推進員活動を通して』

石田 道代¹⁾，西方 佳子¹⁾，
西方浩一²⁾，近藤 知子³⁾

1)練馬区福祉部在宅支援課，2)文教学院大学保健医療技術
学部 3)帝京科学大学医療科学部

はじめに：N 区では，平成 17 年度より，認知症予防事業の一環として地域で認知症予防を広める推進員の育成に取り組んでいる。長期的継続者が少ない中，59 歳の主婦である A さんは推進員活動を生きがいと感じ，家事やパートタイムの仕事をやりくりしながら 3 年間に及び熱心に取り組んでいる。本報告では，なぜ推進員活動が A さんにとって重要な作業となったのかを A さんへのインタビューを中心に探ると共に，行政で働く作業療法士が市民の健康促進に果たし得る役割について考察した。

事例：A さんは亡き母に認知症の症状がみられた際の「ものすごく悲しい」経験から，認知症・予防に関心を抱き，区の認知症予防推進員養成講座に参加した。学んでいくうちに，一旦認知症発症への不安が強まったものの，具体的な予防法や対処の仕方などについて知り，不安が取り除かれ，予防の可能性を実感するようになった。A さんは推進員活動を「地域でお役に立てる」ならと始めたが，自分のためになるとも考えている。以前は避けていた不得意なことも，認知症予防になると考え，チャレンジするようになった。活動は将来，夫や年の違う姉のために役立つとも捉えている。A さんはまた，家族からの支えを受け，仲間と深くつながり，地域の人に喜ばれ，夢中になって新しいことを考える，などという経験もしていた。

考察：母に認知症の症状がみられたことで経験した悲しみや不安，それを乗り越えてきた過程は，A さんにとって，人の役に立つという思いとなり，活動を支える要因となっていると思われる。また，活動で得られた様々な経験が，活動を意味ある作業へと発展させる原動力となったと考えられる。行政に働く作業療法士は，単に市民のニーズを把握し，それに関わるプログラムを企画するだけでなく，参加者にとってプログラムがどんな意味や価値をもつかという，作業の視点をもつことで，よりよい育成支援のあり方を提供する事が出来るのではないかと

Developing into the Meaningful Activity: –Experiences of a Promotion Member of Dementia Prevention Program in “N” District (N-ku)--

Michiyo Ishida¹⁾, Yoshiko Nishikata¹⁾,
Hirokazu Nishikata²⁾, Tomoko Kondo³⁾

1)Nerima city office, 2) Bunkyo Gakuin University,
3)Teikyo University of Science & Technology

Introduction: Since 2005, N-ku has employed an educational program to train volunteers to promote prevention of dementia. A, a 59year old house wife, participated the program and has been enthusiastically engaging in volunteer activities last three years, managing the time for house work and part-time job, while many members dropped out. In this report, based on the interview to her, we scrutinize why A found this activity to be important. We also consider the role of occupational therapists, working within the administration to promote health of the district residents.

Case: A participated the program because of her“extremely sad experience”when her mother suffered from the dementia symptoms before her mother passed away. Because of her curiosity to dementia A joined the program. However, she became uneasy because of fear that she could be a candidate of dementia. Through the learning process, she overcame fear, assured the possibilities to prevent dementia and recognized her experience might be useful for the people in her community. For A, volunteer activities were not only for others, but also for herself because they, including the challenges to unfamiliar tasks, would prevent her to become dementia. A also considered the activities would be useful for her husband and elder sisters when they aged. While engaging in volunteer activities, A had various positive experiences, such as supports from her family, dependable connections with the members, appreciation from the people in the community, and absorption to the challenging tasks.

Discussion: The Promotion Member Activity developed to be meaningful for A, probably, because it linked to her sad memories of her mother, but connected to her awareness of the possibility to prevent dementia. Various positive experiences also seemed to motivate her enthusiasm to the activities. The occupational therapists, working for the administration, not only understand the needs of the residents and plan programs accordingly, but by using the views of occupations, such as meanings and values of the programs

for each participant, it may be possible to offer a better support.

『精神科デイケアにおけるギター作業を通しての回復』

西上忠臣

押尾クリニック デイケア MOMO

背景: Aさんは52歳の男性で4年前にうつ病と診断され、平成17年8月より当院から投薬を受けるのみで、自宅に引きこもった生活を送っていた。初回面接(平成19年9月7日)のカナダ作業遂行測定(COPM)では、子どもと遊ぶ、(遂行度7, 満足度10), ギターを弾く(6,8), 再就職活動(1,1), マンガ読み描き(8,8), 身体運動(4,5), 遂行スコアは5.2, 満足スコアは6.4だった。他の利用者のCOPMの給果を参考にプログラムを組み立てる中で、ギターをする趣味を再び行うこととした。デイケアプログラムでは、ギター同好会、筋トレ、マンガ同好会、ジョブミーティングを行った。

作業歴: ギターを弾く作業は上京した大学生の時に始め、大学卒業後は大手のスーパーで働いていたが、家族の都合でやむなく帰郷、大好きなギターも仕事も辞めて事務職に就きました。8年後に昇進と共にうつ病と診断された。

ギター作業を通しての変化: ギターを弾くことは、一番輝いていた若い頃の作業を再び取り戻す作業だった。ギター同好会では、他の利用者として「みゆキング」という集団を作り中心的存在になった。「みゆキング」の活動は、他者のために貢献する慰問活動、昔作った曲を録音する、成果を発表することへと変化した。Aさんは「自分でも人の役に立てる喜びを感じた」と述べた。ジョブミーティングを通じて、仕事の仕方を振り返り、スーパーの仕事を再び始めることを決心し、デイケア利用から7ヶ月後に再就職し現在も継続中である。COPMの再評価(平成20年3月20日)の結果、ギターを弾きたい(9,10), 再就職活動(8,10)などで遂行スコアは8.2, 満足スコアは9.0だった。

考察: ギターを弾く作業は、Aさんが自分の意志とは反して帰郷したときから、外れ始めた人生を再びやり直す機会となった。ギターを再開することで、「何事にも意欲を持つように」なり、慰問活動や曲を新しく作り直した。デイケアでのプログラムが、個人の成長や症状の軽減、社会参加を促進した。

Recovery through playing guitar in a mental health day care center

Tadaomi NISHIGAMI

Oshio Clinic Day Care MOMO

Background: Mr. A, a 52-year-old man, was diagnosed with depression 4 years ago. The results of Canadian Occupational Performance Measure (COPM) were playing with his children (7 in performance, 10 in satisfaction), playing guitar (6, 8), finding a job (1, 1), reading and drawing comics (8, 8), and physical exercise (4, 5). Total scores were 5.2 in performance and 6.4 in satisfaction. He participated in programs such as the guitar club, muscle training, comic club, and job meetings in the day care center.

Occupational history: He started playing guitar when he went to Tokyo as a university student. He had worked in a big supermarket company until he had to go back to his hometown because of a family matter. He had quit playing guitar. He worked as a clerk in his hometown. He suffered from depression since he was promotion 8 years ago. Playing guitar in the day care center reminds him of younger, better days.

Change through playing guitar: He became a central figure of the music band named “MIYUKing”. They visited places to play, recorded the songs he had composed before, and had a concert. He said, “I’m happy because I am useful for other people.” He also looked back the former working style in the job meeting. He decided to work in a supermarket company. He started working in a supermarket after 7 months use of day care services. The results of re-evaluation in COPM were playing guitar (9, 10), and finding a job (8, 10). The total scores were 8.2 in performance and 9.0 in satisfaction.

Discussion: Playing guitar brought back his life as one continuum for him. Playing guitar in the day care center motivated him to try to visit places to play and compose new songs. The other programs in the day care center facilitated his individual development, reducing his symptoms of disease, and increasing social participation.

『公正と可能性への見通しに関する考察～訪問作業療法の事例から～』

大塚美幸¹⁾, 吉川ひろみ²⁾

- 1) 県立広島大学大学院 総合学術研究科,
- 2) 県立広島大学 作業療法学科

目的: 今回, 18歳の2事例に対して実施した訪問作業療法を通して, 作業療法可能化の基盤(Townsend & Polataiko, 2007)として提示されている公正と可能性への見通しについて考察する。**方法:** 2事例の訪問作業療法の経験を, クライエントの作業に対する認識(COPM), 観察, フィールドノートより質的に分析する。**結果:** 事例Aは18歳, 女陸, 筋ジストロフィー症。卒業後の進路に悩んでいたところ, 作業療法士(OT)が提案した大学の聴講生制度に興味を持ち, 一緒に準備を行った。聴講生になることができ大学に通い始めると, 最初は非協力的だった大学側も授業が受けやすい環境を整えてくれるなど, 周囲の変化が起こった。事例Bは18歳, 男性, 進行性骨化性繊維異形成症。通信制の大学生で, 日中は1人で, 特にすることがなく自宅で過ごしていた。OTが関わるようになり, 次々とニーズが出てきて, 好きな子へのメール, 大学の単位調整などを一緒に行った。最終的に, 自動車免許を取りたいという新たな夢ができた。また, 母親がもっていた「リハビリは運動」という認識が「本人のしたいことを実現してくれるもの」へと変化が起こった。**考察:** 事例Aでは環境変化により公正が実現し, それ以前の作業的不公正に気づくことができた。事例BではOTの関わりによって可能性への見通しが高まったと考えられる。

Justice and vision of possibilities in OT collaboration with two clients for occupational justice: experience from visiting occupational therapy

Miyuki Otsuka¹⁾, Hiromi Yoshikawa²⁾

- 1) Graduate School of Comprehensive Scientific Research, Prefectural University of Hiroshima
- 2) Prefectural University of Hiroshima

Purpose: The purpose of this article is to discuss justice and vision of possibilities (Townsend & Polatajko, 2007) through the experience of visiting occupational therapy. **Method:** The intervention was visiting occupational therapy for two clients. Data from COPM, observation, and field notes were analyzed by qualitative method. **Results:** Client A is 18-year-old woman, muscular dystrophy. She worried about the course of her life after graduation. The therapist suggested becoming an occasional student in a college. She was interested in that, and she and the therapist collaborated in order to take a course. She was able to become an occasional student. Her social environment changed through her participation in the class, and the college staff coordinated the environment to enable her to participate in the classes comfortably. Client B is 18-years-old man, fibrodysplasia ossificans progressiva. He has nothing to do especially at home during daytime. After the therapist's visit his home, he gradually talked about his needs, for example sending e-mail to his friend and arranging his schedule at the college. Finally he had a new ambition of getting a driver's license. Besides this, his mother's perception changed from "rehabilitation is exercise" to "rehabilitation supports what clients want to". **Discussion:** The visiting occupational therapy program enabled justice through changes in the social environment. The occupational injustice that had existed around client A was realized. Client B could direct attention to his vision of possibilities through interaction with the therapist.

【作業科学研究】

『オシャレに焦点をあてて～施設入所高齢者の価値ある作業の従事促進を目指した集団介入の経験～』

山本朋子¹⁾, 斎藤さわ子²⁾

- 1)茨城県立医療大学 保健医療科学研究科 修士課程
2)茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科

施設で生活している障害のある高齢者において、わずかな時間であっても本人の価値や興味のある作業をすることが生活の質の向上につながるといわれている。一方で施設入所高齢者は、これまでの生活の中でしてきた自分の価値や興味のある作業から剥奪、解離されていることは多い。老人保健施設入所高齢女性のオシャレに関する意識調査で、オシャレは楽しい老後につながり生活や気分が変わることが示されている。しかし、障害を持つ施設入所高齢者に対してどのように介入を行うと価値ある作業への再従事が促されるのかという研究は少ない。そこで、「オシャレをする」という作業に焦点をあて、オシャレに価値を置いている老人保健施設入所者に対しオシャレに関する活動やオシャレを楽しめる環境を提供し、「オシャレをする」という作業の従事向上を目指した介入研究を行った。今回は、参加者自身にとって価値ある作業「オシャレをする」を用いた集団介入の実践経験とその結果としてオシャレに関する重要度、遂行度、満足度の変化を報告する。参加者は、研究に同意した老人保健施設入所者で、10点尺度でオシャレに関する重要度が5点以上と答えた者とした。介入は「おしやれな活動と健康」をテーマにおいて約1時間を全6回実施し、行う活動は対象者と作業療法士が協業しながら決定した。介入結果として、重要度と遂行度は6名中5名が向上し、満足度は6名中4名が向上した。行動上も、普段にスカーフや指輪をされる様子や、家族と服を買いに行ったり、他の参加者の服装を見て家にある自分の服のことを考え始めたり、実際に服を持ってきてもらうなど様々な変化が得られた。これらのことから、本介入が、「オシャレをする」という作業従事に対し肯定的な影響を及ぼすことが示唆された。集団運営上は、「陰で何か言われないうように気をつける」などの参加者の言葉に反映されるように、集団内におけるオシャレに対する価値観や認識が人間関係に影響を及ぼすことや、集団外の施設内の周囲の目に、特に配慮する必要性が示された。

Focusing on “Oshare”～A group intervention for elderly people in a health service facility promoting engagement on occupations they value～

Tomoko Yamamoto¹⁾, Sawako Saito²⁾

- 1) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences, Graduate School of Health Sciences
2) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

Researches indicated that the quality of life of Elderly people living in a facility would improve by doing occupations reflecting their values or interests, even if they do the occupations in a little time. Unfortunately, elderly people living in a facility often are deprived of their occupations which they used to do in their daily living and reflected their values and interests on. A research showed that elderly women in a health service facility for the aged believed that “Oshare (dressing up)” was related to enjoying their life and refreshing their feelings. There are, however, few studies examining what intervention is effective to the elderly people to promote their engagement on their occupations reflecting their values. Therefore, we studied if elderly people in a health service facility the aged were more engaged in “Oshare” when they were provided activities and an environment related to “Oshare”. Here, we reported a clinical experience of group intervention by using occupations related to “Oshare” and the changes of their score on importance, performance and satisfaction of “Oshare”. The participants were the people who scored more than 5 on the 10 rating scale of the importance of “Oshare”. They received one hour session six times for two months and the theme of the intervention was “activities related to Oshare and health”. The activities they did in the intervention were decided by participants and an occupational therapist collaboratively. The results of the intervention were that 5 participants in 6 participants gave higher score on the importance and the performance, and that 4 participants in 6 participants gave higher score on the satisfaction. During or after the intervention, the participants begun to wear a scarf or a ring, went to shopping with her family, begun to think about her clothes at home, and/or asked her family to bring her cloth to the facility. These results indicated that the intervention had positively effects on engaging “Oshare”.

『痛みと作業：村上春樹「ねじまき鳥クロニクル」のクレタの場合』

近藤知子

帝京科学大学医療科学部作業療法学科

痛みと作業という本演題のテーマは、生きる力の回復と作業の関係を理解することを目的とし、小説「ねじまき鳥クロニクル」（村上春樹著）を研究素材として行った質的研究より現れたものである研究素材として小説が用いられたのは、通常ならば言語表現が困難な感情や瞬間的な思いを小説が良く表すことにある。中でも村上は、比喩や象徴を用いた人の内的世界の描写に優れるとされる。

痛みは、誰もが経験するが、他者がそれを理解する事は難しい特に、暴力・虐待・恐怖などに関連する痛みは、本人でさえそれを的確に説明できないしかし、「痛み」が、日々の作業に影響を与えることは、想像に難くない。本発表は、「ねじまき鳥クロニクル」の登場人物であり、幼少から全身に激しい痛みを感じ続ける26歳の女陸、クレタを通じ、痛みを持つ人の内的世界とその変化、そして作業的存在としての在り方の一端を理解しようとするものである。分析の過程は、1)クレタの全描写を時系列に統合、2)変化のきっかけの抽出、3)変化時、その前後の作業分析、4)考察、から成る。

クレタの内的世界と作業との関係は、以下の5つの段階を通して見ることができた。1)あらゆる作業が痛みと結び付き、「呪われた」という否定的な自己イメージを構築する段階。2)一見すると積極的に作業に従事するが、「この苦しみは誰にもわからない」と、内・外面が反している段階。3)何もかも無駄だったと感じ、「自殺企図」や「娼婦になる」など作業を自己破壊行為として用いる段階。4)姉という救済者を得て、特殊な作業経験を通し、自己の基盤を構築する段階。5)姉のもとを離れ、野菜作りや子育て作業を通し「本当」と感じる自己を認識する段階。発表では、クレタの変化に影響を与えた作業に関し、更なる考察を加える。

Pain and Occupations: How Crete in the novel “Wind-Up Bird Chronicle” structured and changed herself through occupations?

Tomoko Kondo

Tokyo University of Science & Technology, Dept. of Occupational Therapy

The theme of this presentation was drawn from the study that employed the novel *Wind Up Bird Chronicle* written by Haruki Murakami as a data source and investigated the relationship between occupations and healing from life crisis. Novels were considered as the good source for the study because of its ability to express human emotions and momentary thoughts that were difficult to verbalize. Haruki Murakami was known due to his excellent skills to describe the inner world of human beings, using metaphors and symbols.

We all experience pain. However, we do not know how others are experiencing pain. Particularly, the types of pain caused by violence, abuse, or fear are unexplainable even by the person who experiences pain. Nevertheless, we can imagine that pain would have strong impact to our daily occupations. The purpose of this presentation is to understand the inner world of the person who experiences pain and the ways to dealt with the world as an occupational being through Crete, one of the characters in the novel *Wind Up Bird Chronicle*, who was 26 years old and had had pain since her childhood. The analysis was proceeded by the following steps: 1) chronologically organizing the all descriptions about Crete, 2) figuring the events that triggered Crete's changes, 2) analyzing the occupations while the changes, and before and after the changes, and 4) thinking the relationship of pain and occupations.

Five phases were appeared in the relationship between Crete's inner world and pain I) Shaping negative image of self: every occupation gave her pain and she called her life as “cursed”, II) Constructing inconsistent self; the ways she engaged each occupation were apparently pleasant lady, but she thinks “Nobody understand my pain”, III) Self occupations, such as attempting suicide and becoming prostitute, are used to destroy herself, IV) Structuring the base of self: Being supervised by her sister, Crete engaged in the unique occupation, a prostitute of mind, through which she experiences the experiences of others, V) Constructing real self: She left her sister, and found true “self” when growing vegetables and her baby. The occupations that triggered Crete's change will be further discussed.

『作業，社会参加，ケイパビリティについての一考察』

浅羽エリック

財団法人浅羽医学研究所附属岡南病院・
カロリンスカ研究所

背景：この発表は「社会参加」という概念について，社会でその生活状態を見過ごされがちな人の作業のストーリーに焦点を当てて，哲学的観点から探ろうとするものである．社会参加という概念は近年，作業科学や作業療法の文献の中でよく用いられるようになっていっている WHO（世界保健機構）では，社会参加を，「生活，人生場面へ関わること（Involved in a life situation）」と定義づけている．実際に，人は数えきれないほど多様な方法で生活・人生場面に関わっている．しかし，個人が日常の作業に従事する際には，様々な社会的側面が存在するため，「個人」の視点を持つだけでは不十分である．本発表においては，我々は視点を，個人の「行動」そのものから，「全体の中の一部として存在する者」→と移行する必要があることを主張する．社会的統合，つながり，共同社会の一員であること（市民権）といった概念は，民族的マイノリティや障害を持った人々などの社会的排除などの問題を考える時に役立つと言われている．これらはアマルティア・センとマーサ・ヌスバウムによって提唱されたケイパビリティ・アプローチの中で言及されており，本発表はこれらに基づいたものである．

方法：理論研究である本研究は，ケイパビリティ・アプローチに関する文献の考察から成り立っているデータベース（CINAHL and OVID Medline）と本を用い，ケイパビリティ，アプローチの理論とそれに関連する作業科学の理論，作業科学で用いられている capability と participation とを比較関連させつつ考察し，これらの概念についての理解を深める．

結果：ケイパビリティ・アプローチの理論と作業科学の思考や理論との間には，共通点が多く見出される．作業を探る時，この理論が新たな視点からのアプローチに寄与するところは大きいであろう．発表では，作業科学の研究とこの理論的視点との関連性について述べていく．

Occupation, participation, and capability: A critical examination

Eric Asaba, Ph.D., OTR

Asaba Medical Research Foundation, Kohnan Hospital &
Karolinska Institutet

Background & Purpose: The aim of this paper is to critically examine the concept of participation, drawing from philosophy and focusing on stories and scenarios of occupation among persons whose daily lives often unfold at the margins of society. Participation has received increased attention in both the occupational science and occupational therapy literature in recent years. Participation has been defined as being, “involved in a life situation”(WHO). Being involved in a life situation is undoubtedly experienced in myriad ways within the context of people’s everyday lives. However, this individualized view of participation does not sufficiently account for the multi-faceted social tensions that enable or hinder individuals from engaging in a repertoire of daily occupations. I will argue that we need to consider shifting our focus from action to the being an integral part of a larger whole. It has been suggested that social integration, connectedness, and citizenship can be useful concepts in addressing the pervasive social exclusion of certain groups of people such as ethnic minorities or persons with disabilities. This argument builds on Nobelaureate Amartya Sen’s and scholar Martha Nussbaum’s work on a capabilities approach.

Method: This paper is based on a review of literature where a capabilities approach was explored. Databases (CINAHL and OVID Medline), and books were used, in which theory underlying a capabilities approach were juxtaposed against relevant occupational science theory.

Preliminary findings: It will be argued that a capabilities approach is ideologically aligned occupational science. Moreover, a capabilities approach might offer another viewpoint when exploring occupations among individuals with limited access to occupations of their choice. Finally, the relevance of these theoretical vantage points for occupational science research will be discussed.

『自分らしい作業とは何か―作業を通して意味ある存在を経験する―』

岡千晴, 港美雪
北原リハビリテーション病院, 吉備国際大学

人は、作業を通して自己を構築し、作業を行う中で自己を表現する存在である。作業への従事は、健康を左右する。本研究では、作業を通してどのように自己を表現し、構築することが、自分らしい生活につながるのかについて明らかにするために、情報提供者3名に、半構成インタビューを実施した。データはStraussとCorbinのコーディング法を用い、継続的比較分析を行った。その結果、情報提供者らは、価値のある存在であるための信念や価値観を持っており、その実現を可能にする独自の考え方(コンセプト)や行い方によって作業に従事していた。また、状況に合わせて行い方を変化させ、主体的に行うことによって、自己を表現し、その経験を通して自己の存在価値に改めて気付いたり、確認していた。そして、このような作業経験のプロセスは、情報提供者らにとって、自分らしく生活することに繋がっていた。自分らしい生活の継続に困難のあるクライアントに対して、作業療法士が協働的プロセスを通して、1) 価値ある存在であるためにどのような信念や価値観を持っているか、2) 価値観を実現するための作業は何か、3) その作業が、価値観に繋がるための場所、時間、手順などの選択や行い方に関するコンセプトはどのようなものか等について評価し、クライアントが作業を通して自分を表現し、構築することができるよう支援することの重要陳が示唆された。

What is the occupation enabling one to realize personal identity? -Experiencing a meaningful existence through occupation-

Ciharu Oka, Miyuki Minato
Kitahara Rehabilitation Hospital, Kibi International University

People construct and express themselves through occupation and human health depends on engaging in occupation. In this research, semi-structured interviews were conducted with three informants to explore what informants express and how they construct identity through occupation. Data were analyzed by the constant comparative methods by Strauss and Corbin. The results showed that informants had beliefs and sense of values to become valuable existence, and they were engaged in occupations by their own ways that made them possible to achieve the beliefs. Informants also expressed identity through changing the way of engaging in occupations, which depended on the context and whether they engaged in occupations independently. Moreover, informants realized and felt themselves as meaningful existence through these experiences of engaging in occupations, and these processes led informants to feel their own life with identity. This study suggests the importance of supporting clients with difficulties who will become able to express themselves and construct their identity through engaging in occupations by collaborative processes among occupational therapists. Such processes include, e.g., assessments of 1) what belief does each client has, 2) which occupation achieves his/her belief to become valuable existence, and 3) what are the concepts of occupational designs (time, place, and procedures in occupational choice) that are related to the values of their own life.

『日本における身体障害のある高齢者の入院から在宅での日常生活までの回復過程の特徴』

ボンジェ・ペイター¹⁾, 浅羽エリック^{2,3)},
Josephsson Staffan²⁾

1)藍野大学, 2)カロリンスカ医科大学, 3)岡南病院

【目的】高齢者にとって、病気や障害の有無に関わらず、住み慣れた地域で在宅生活を送ることは彼らの生活の質の向上と維持に大きく影響する。しかし、現在の保健医療を取り巻く社会環境や医療保健制度、介護保険制度では、財政的、人的な問題から、高齢者により自立した生活をするのが求められている。障害のある高齢者が在宅で自らの日常生活ができるようになるために、OTR は心身機能と健康状態を中心に、彼らの α 可能性と周囲にある α 資源・リソースで1 南足することが有益であると考えられているしかし、それだけでは十分ではなく、障害のある高齢者がどのように彼らの長期に渡る回復過程をたどってきたかという当事者の視点が欠かせない本研究は、身体障害のある高齢者の日常生活の回復過程を探求し、その特徴を記述することが目的である【研究方法】アダプターション(adaptation/適応)とトランジション(transition/移行期・過渡期)理論を活用した質的研究。研究参加者：65 歳～84 歳の9 名の高齢者で、身体障害により日常生活活動障害のリハビリテーションが必要である。現在は在宅生活に復帰している。データ収集：回想的オープンインタビューを行い、彼らの経験の語りを収集した。データ分析方法：Polkinhone のナラティブ分析と継続的比較分析 (Bogdan & Biklen) に基づく主題的分析。

【結果・考察】 次の2 つの実相が特定されると見込んでいる

- 1) 長い期間に渡って展開される回復過程における自らの生活の回復過程の特徴
- 2) 当事者の経験・立場から特定した、彼らの回復過程における重要な事柄 (主題)

The return to everyday life by some Japanese elders with physical disabilities who were hospitalized and returned home

Peter Bontje¹⁾, Eric Asaba^{2,3)}, Staffan Josephsson²⁾

1)Aino University, 2)Karolinska Institute,
3)Kohnan Hospital

To support older people to live in the familiar surroundings of their home and community is under pressure due to financial and human resources constraints now and into the future. Thus there will be an increasing need for them to live independently while maintaining health and quality of life. Considering this, there is a need to complement current emphases on function and illness/health with knowledge of possibilities and resources in occupations of everyday life. This research assumes that knowledge of “how processes unfold of older people who recover their occupational life after illness and accident is important to better support older people to live independent. The purpose of this research therefore was to explore and describe the recovery of occupational life after physical disability by some older people in Japan.

Method: This research draws on theories of transition and adaptation. The informants were 9 older persons who were admitted to hospital, received rehabilitation and returned home after physical disabilities. Data-gathering was retrospective open-interviews exploring their narratives/stories of their experiences. Data-analysis was a narrative thematic analysis drawing on Polkinhome and Bogdan & Biklen, with the aim of describing features important to these recovery processes.

Result: At the moment of writing the data-analysis is ongoing. Results that will be presented will pertain to 1) how these recovery processes unfold over time, and 2) any features (themes) that were important to these recovery processes.

資料

第9回作業科学セミナー抄録 (2005年)

基調講演

作業科学の過去,現在,未来

Ruth Zemke

佐藤剛記念講演

作業とは何で(form), 何の役に立ち(function), どのような意味があるのか(meaning)?

吉川ひろみ

特別講演

作業療法のナラティブとドラマ性

鷺田孝保

ワークショップ

身体表現をすること:身体表現—作業療法—作業科学」

里美のぞみ

シンポジウム

「作業科学が作業療法に与える影響」

司会：吉川ひろみ

シンポジスト：小林法一， 近藤敏， 斉藤さわ子， ボンジェ・ペーター

研究発表

国際協力における「川を描く作業」の意味と効果

吉田美穂

作業科学に支えられた作業に焦点を当てた実践

港 美雪

脳血管障害を経験した男性の障害適応の過程—作業の視点からの分析—

西野 歩

高齢者の‘場所づくり’

坂上真理

健康増進教室で自分の能力に目覚めた A さんの作業を通じでみえてきたこと

西上忠臣

佐藤剛記念講演

作業とは何で、何の役に立ち、どのような意味があるのか

What is the form, function and meaning of occupation?

吉川ひろみ（県立広島大学保健福祉学部）

文献やセミナーを通して作業科学を学び、学生に作業科学を教える中で、作業についての理解が日に日に深まっているように感じている。作業科学は作業の form と function と meaning を研究する学問だといわれている¹⁾。この機会に、私の周りにある作業にまつわる知見を整理してみたい。

1. 作業とは何か (form) : 柔軟性に富み変幻自在な作業の魅力と捉え難さ

- 1) 何が作業か (identify) : 日常での活動や課題の集まりで (groups of activities and tasks of everyday life), 個人や文化によって名付けられ, 構成され, 価値と意味が与えられたもの (named, organized and given value and meaning by individuals and a culture) という定義を受け入れたい¹⁻⁶⁾。人が行うことのすべてが作業ではないが, 作業になる可能性はある⁷⁾。身体運動を伴わない作業もある。
- 2) どう呼ばれるか (named) : 「芋煮会」「どんどやき」「チャット」など, 国や地域, 時代により, 作業には名前がつけられる⁸⁾。新しい作業もどんどん生まれている。
- 3) どうまとまりをつけるか (chunks) : 複数の複雑な活動が集まって行われる (名付けられる) 作業もあるが, 一つあるいはいくつかの活動だけで成り立つ作業もある。
- 4) 階層構造がある (level) : 単純な運動・行為から文脈に深く依存する複雑な作業まで, 明確な区分は見出せないが, 作業には何らかの階層性がある^{4,8,9)}。
- 5) 文脈依存性 (contexts) : 物理的, 社会的, 文化的, 制度的, 時間的, 個人的, スピリチュアルな, バーチャルな状況の影響を, 作業から排除することはできない^{2,3,7,9,10)}。

2. 作業は何の役に立つのか (function) : 作業療法が存在する理由

- 1) 作業をする個人がより健康になる (health) : 身体的, 精神的, 社会的に良い状態になるために, 疾病治療, 疾病予防, 健康増進として作業を使うことができる。
- 2) 作業をする個人が成長する (development) : 作業を通して人は道徳的, 倫理的な行いができるようになる。何が良いかを考え良い行いをするようになる。
- 3) 環境が変化する (environment) : 人が作業をすると環境が変わる。
- 4) 歴史が作られる (history) : 人の作業の積み重ねが人類の進化の歴史であり, 未来を作る。

3. 作業にはどのような意味があるのか (meaning) : 作業科学に導かれる世界

- 1) 何か別の目的や目標を達成するための手段としての作業 (as means) : 人の健康や成長, 環境変化のための手段として作業が行われることがある。作業がどれほど, 効果的に効率的に目標を達成したかが, 手段としての作業の価値を決める⁸⁾。
- 2) その作業をすることそのものに価値を認める目的としての作業 (as end) : 生活に欠くことのできない作業, 人生の豊かさを象徴する作業。その時, その場で, そのように行われる作業そのものが, 喜びや幸福をもたらす作業。別の目標のための手段となることもあるかもしれないが, 他の目標を達成しようがしまいが, とにかく, その作業をすることだけでも意味をもつ作業がある⁸⁾。人は人生の中で, このような意味のある作業にめぐり会い, その作業を行い, 自分が自分であることを確認したり, 世の中に貢献したりできる存在である。意味のある作業に出会えない人がいたり, 意味のある作業ができないような世の中は不公正であることを認識し, 公正 (occupational justice) に向かうよう取り組んでいかなければならない^{9,10)}。

文献

- 1) Larson E, Wood W, & Clark F: Occupational science: building the science and practice of occupation through an academic

- discipline. In Crepeau EB, et al (Ed), Willard and Spackman's Occupational Therapy 10th Ed, Lipincott Williams & Wilkins, Baltimore, pp.27-30, 2002
- 2) カナダ作業療法士協会 (著) 吉川ひろみ (監訳) : 作業療法の視点 : 作業ができるということ. 大学教育出版, 2000
 - 3) American Occupational Therapy Association: Occupational therapy practice framework: Domain and process. Amer J Occup Ther 56: 609-639, 2002
 - 4) Polatajko H, et al: Meaning the responsibility that comes with the privilege: Introducing a taxonomic code for understanding occupation. Can J Occup Ther 71: 261-264, 2004
 - 5) Occupational Terminology. Journal of Occupational Science 8(3): 38-41, 2001.
 - 6) 吉川ひろみ : 作業療法における「作業」の変遷. OT ジャーナル 39: 1160-1166, 2005
 - 7) Pierce D: Occupation by Design. F. A. Davis, Philadelphia, pp37-236, 2003
 - 8) Fisher A: Uniting practice and Theory in an occupational framework. Amer J Occup Ther 52: 509-521, 1998 (斎藤さわ子 : 学びたい世界の作業療法. OTジャーナル 37: 410-414, 2003)
 - 9) Trombly CA: Occupation: purposefulness and meaningfulness as therapeutic mechanisms. Amer J Occup Ther 49: 960-972, 1995 (吉川ひろみ : 学びたい世界の作業療法. OTジャーナル 38: 144-147, 2004)
 - 10) Zemke R: The 2004 Eleanor Clarke Slagle Lecture: Time, Space, and the Kaleidoscopes of Occupation. Amer J Occup Ther 58: 608-620, 2004
 - 11) Townsend E: Occupational therapy's social vision. Can J Occup Ther 60: 174-184, 1993 (吉川ひろみ : 学びたい世界の作業療法. OTジャーナル 37: 239-242, 2003)

特別講演

『作業療法のナラティブとドラマ性』

鷲田 孝 保 (茨城県立医療大学)

人は、自分の物語の中で生きている。文脈の中で生きている。生活世界の中で生きている。時と場所（時間と空間）と不可分に生きている。生まれる前の世界を継承し、生まれたときには、すでにたくさんの物語を背負っている。そのような、一回限りの人生を生きているひとの物語にかかわる作業療法士も、やはり自己の物語を背負って生きている。

科学の世界を包括した生活世界の世界観が必要である（図）。科学の再現性とは違った、生活世界の方法論としてソフトシステムズ方法論が湧き上がってくる。

近代科学が、網の外に落としてきた物語の世界を中心にすえた学問を構想しようとするならば＜演劇＞モデルがもっとも有力な手がかりとなる（中村雄二郎）。

作業療法士は脚本家、演出家、舞台監督と類似してはいないだろうか。作業療法のドラマ性について考えてみたい。

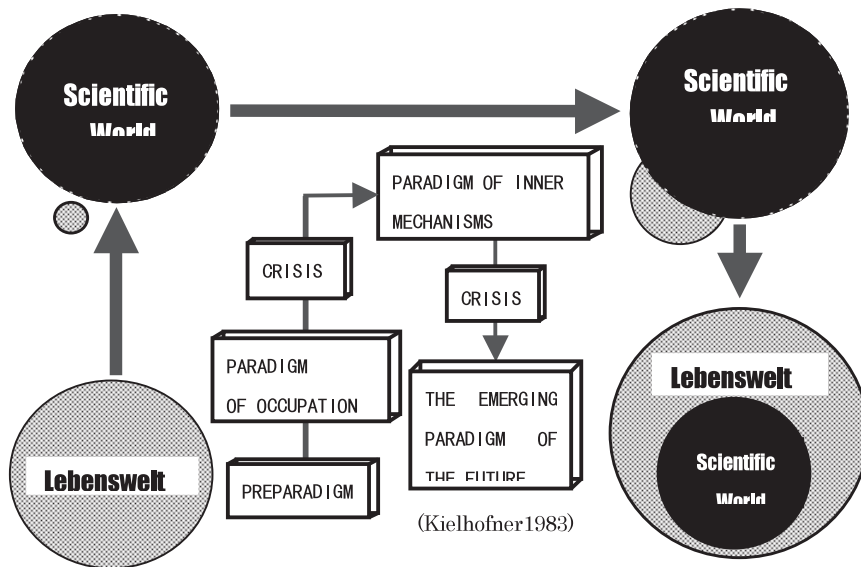


図 作業療法の歴史と世界観 (2005 鷲田)

シンポジウム

作業の見方を「モノ」から「コト」へ

小林法一（北海道大学医学部保健学科）

つくば学会のある講演を聞いていて、「なんだか前に似たような話を聞いたな、ああ、作業科学で聞いたんだ」と、ふと思うことがありました。それは「“思い”のモデルを使った新しいSSMベースのアクションリサーチ」という題の講演でした。演者の内山氏は、『日常生活はモノとコトが混ざり合った世界である。ところが、科学的な方法論と言われるものは「コト」の世界を取り除き、「モノ」だけを研究してきた。』と述べ、さらに『「モノ」とは見る対象である。一方、「コト」とは“思い”として感じるものである。例えばこのOHPプロジェクターは、「モノ」として見ることは可能だが、子供にとっては「おもちゃ」であり、この装置の開発者にとっては「自分の技術を誇示するモノ」、会場を掃除する人にとっては「ジャマモノ」でしかない。』と説明していました。この話の瞬間、私は札幌の全国研修会（1995年）の壇上で生花の傍ら立つClark教授を思い出していました。Clark教授は会場に問いかけました。「ここに花があります。皆さんはこの花をどう思いますか？ 私は奇麗だと思えますし、・・文化を感じます・・花を生けた方はどうでしょう・・」

OHPや生花は誰にとっても同じ「モノ」です。しかし過去から現在までを過ごしてきた個人が“思い”として感じる「コト」は一人ひとり違います。作業にも同じことが言えます。ある人の食事を「モノ」として捉えた場合、評価の視点は「食べ物を口に運んで飲み込めるか」になりますが、「コト」の世界で捉えると「美味しい？」「食欲は？」「好物は？」「今度食べたいのは？」・・・・・という様にその人にとっての食事という見方になるでしょう。

「作業的存在」は、まさに人から作業を「モノ」として分離せずに「コト」として捉える世界観に属すと思います。作業科学はこの世界観を強調し、そしてその臨床応用や研究の仕方を示してくれるものと感じています。作業の見方が「モノ」から「コト」になると、現在の臨床だけでなく過去の臨床場面で感じた作業（療法）の不思議な力が明確になります。臨床での気づきが変わると新たな疑問も生まれました。そのため後に私は作業を学べる大学院に進みました。以下に、このような私の経験の一部を紹介します。

●老人保健施設の日課と行事づくり

Clark教授の講演を聞いたのは、丁度、所属部署を急性期部門から老健へ移した時期でした。この時、私は臨床5年目であり、幾度となく作業がクライアントの健康や生活に影響を与えることを経験し作業には不思議な力があることを実感していました。老健ではこれらの経験を活かしたいと考えていました。しかし、いざ実践しようとするとは簡単ではないことに気づきました。例えば入浴、趣味活動、季節行事、機能訓練などたくさんの作業をどのように提供するかということも当時の私にとって見通しのつかない課題でした。

解決の糸口は「作業的存在」に見方を変えることでした。作業を人から切り離して考えるのではなく当事者と一緒に、すなわち本人にとっての作業に興味を持つことでした。これにより、入浴時間を夜間へ、当施設版興味チェックリストの作成、趣味活動の予定表作成など様々な計画を実行しました。お祭りの企画では、入所者のお祭りの思い出をケアワーカーと一緒に探り、お酒は必修であることを確認しました。以来、老健での私の仕事は、見かけ上施設内の巡回、内実はクライアントと“思い”を持って接することになりました。

●生活時間、作業バランスの研究

大学院入学時に何となく感じていた私の疑問の一つは、老健には「なぜ、その気になれば何かできそうなのに、ベッドでボーっと過ごす人が多いのだろう」「それでいいのか」ということでした。この漠然とした疑問を研究に導いてくれたのは作業科学ジャーナルでした。WFOTの1998年大会から戻られた指導教官の宮前先生が「いいお土産があるわよ」と手渡してくれたのが、Time Use, Time-budgetの文字がタイトルに並んだOSジャーナルでした。引用文献を探るうちに作業バランスの概念を見つけ、さらに科研の研究グループで一緒だった吉川先生にアイデアをいただき、それが私の研究テーマに発展しています。

そして現在は学生や卒業生と作業科学を楽しんでいます。彼らの5年後が楽しみです。

「作業科学が作業療法に与える影響ー作業に焦点を当てることで変わった私の作業療法」

近藤 敏 (県立広島大学)

私は長年、作業は作業療法の「手段」だと思っていました。しかし、近年、作業療法の理論を学ぶにつれて、作業ができるようになること、すなわち「目的」として作業があることに気づき、むしろこちらが作業療法の主たる役割のように感じています。昔、私が担当した頸髄損傷のYさんは、手の機能回復の手段として使用した革細工が、退院後は、「日課となり自分を表現する重要な作業」となっていたことを思い出します。私は1972年、労働福祉事業団九州リハビリテーション大学を卒業しました。授業は、基礎や臨床医学に多くの時間が割かれ、私自身も医学の勉強に高い価値をおいていました。作業療法学科の教員は、米国人作業療法士が中心で、おそらく、1960年代の米国の医学モデルの作業療法を実践してきた作業療法士であったと思われます。教科書は、ウィラード・スパックマンの作業療法第3版で、私は、全体の1/6にあたる100頁が割かれていた神経筋統合のための作業療法の章(現在の生体力学モデル・運動コントロールモデル)が面白かったのを覚えています。労災病院に勤務し、4年間の臨床の後、母校で運動学を中心とした授業を担当したこともあって、私の中では、医学モデルの作業療法がずっと継続されていました。今から思えば、労災医療の枠組み中で、やってきた臨床と教育は、井の中の蛙状態であったと思います。10年前、広島に来て吉川さんと出会ったのが切っ掛けで、COPMやAMPSといった作業療法独自の評価法および作業に焦点をあてた作業療法にふれ、それ以降、私の作業療法が大きく変化しました。クライアントの作業遂行を支援することこそ作業療法士にふさわしい役割と思うようになりました。以下、私の作業療法がどのように変わったかについて述べます。

1. 教育

ADLでは、動作分析や自助具、疾患や障害に応じたADLの講義や演習では、物足りなさを感じて、最近では食事や更衣などのセルフケアの個人的な意味を学生とディスカッションする機会をもっています。作業療法士による生活時間調査では、健康な高齢者に比べ障害老人は休息の時間が多い、といったものがあります。しかし、名目上の作業種目や時間配分を見ても個人の生活を明らかにするには不十分で、質的側面から一日の作業を捉えることを授業では伝えています。具体的には、学生個々の日曜日の作業について、自分にとって価値がある作業なのか、内的期待の作業なのか、外的期待の作業なのか、などその作業バランスを学んでもらっています。3年次生の2週間の「地域臨床実習」において、主として通所施設においてCOPMを使用し、作業遂行上の問題を特定できるようになることを目標としています。私の大学では、学科横断的な本学独自の必須科目として「チーム医療論演習」設定されています。小人数のグループ(看護4名、放射・理学、作業、コミュニケーション障害学科は1~2名)で、症例検討を行いながら専門職の相互理解を深めています。このなかで、症例に使用された評価法の説明やデモンストレーションを交えた各学科の実習室回りをします。作業療法学科では、AMPSとCOPMを見てもらいます。もし、これがなかったらどのような評価法を紹介すべきか悩んだと思います。

2. 臨床

三原市の認知症予防モデル事業に参画する機会が与えられました。プログラムは、作業に焦点を当てた作業療法およびクライアント中心の実践を基本とし、また認知症予防の観点から、計画、実行、振り返り、のプロセスを徹底しました。目標シートを用いて、うまくできるようになりたい作業を3つあげてもらい、類似したものをいくつかまとめ、我々が提供できる作業と折り合いのついた3つのグループ(E町内発見隊、クッキンググループ、創作活動グループ)ができました。グループでのディスカッションに時間をかけ、頻繁に各グループの計画の進捗状況をお互いに報告し、実行後は成果をまとめ、発表しました。高齢者の日常生活場面における記憶の自己効力感測定尺度(EMSES)を用いて効果判定を行ったところ、向上が認められています。

3. 研究

作業に焦点を当てること、また作業と健康の関係から私に関心をもった文献です。

Gail Whiteford: Occupational Deprivation and Incarceration. *Journal of Occupational Science*, 4(3):126-130, 1997. (作業剥奪にさらされた囚人がとった興味深い行動が報告されており、作業と健康との関係を理解した研究です)

Dana Howell: Neuro-Occupation: Linking Sensory Deprivation and Self-Care in the ICU Patient, *Occupational Therapy in Health Care*, vol.11(4):75-85, 1999. (ICU患者の感覚剥奪と感覚過負荷について詳しく描写され、ICUにおける作業療法の扉を開いてくれた研究です) ほか。

身体制限を伴う高齢者の自己練習による慣れてきた日常作業に従事する意志の変化

茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科 齋藤さわ子

[はじめに]

昨年度、身体制限を伴う高齢者が、慣れてきた IADL 領域の作業を、専門家の介入なしに繰り返し練習すると（以下自己練習）、その作業に再従事する意志（以下、意志）、その作業を遂行する効力感（以下、効力感）、その作業を遂行するための方法の受け入れ（以下、受入）と IADL 領域の課題を遂行する能力（以下、IADL 能力）が、統計的に有意に向上することを報告した。本研究では、何故、意志が変化したのか否かを理解するため調べたので報告する。

[方法]

対象者は地域で生活している健常高齢者（平均年齢 69 歳、年齢範囲 60～80 歳）17 名。夫婦あるいは単身世帯者。セッションは全 8 回で、対象者は、前半 3 回は身体制限のない状態でいつもの通りに課題遂行を行い、後半 5 回は、身体制限を伴った状態で課題を遂行した。生態的妥当性を高めるために、遂行課題は、対象者自身が慣れている IADL 課題を 2 つ選び、セッションは対象者にとってその課題を遂行するのに自然な時間に、対象者の自宅で行った。課題の難易度は身体制限を伴う状態ではじめて遂行したときに、身体的な努力や非効率性はあるものの自立あるいは軽度の援助が必要なレベルとした。何故、意志が自己練習によって変化したか否かについては、本研究用に作成した 6 点尺度の質問紙の答え、フィールドノート、および自己練習 5 回目終了後の約 20 分半構造化面接の逐語録をデータとし、継続比較法に基づき分析を行った。

[結果および考察]

意志が、何故、自己練習によって変化したか否かについては、「一回目の練習時の課題困難感」、「成長の可能性の実感」、「気楽」、「工夫をすることの楽しみ」および「課題をすることの重要性」が関わっていることがわかった。このうち肯定的に変化した理由としては、全てが関わっていた。否定的に変化した理由としては、「一回目の練習時の課題困難感」「課題をすることの重要性」が関わっていることがわかった。肯定的に変化した理由のうち、自らだけで成長できる可能性を実感したり、自分で工夫をすることの楽しみが語られたということは、専門家が傍で直接介入を行わない自己練習の方が作業従事を促進できる場合があることを示しているかもしれない。

[作業療法への応用]

身体制限を伴う高齢者を対象とした外来あるいは訪問作業療法では、1～2 週に 1 度という頻度で行うことは少なくない。少ない頻度で作業遂行能力をあげ、作業従事を促進し、より多くの日常作業にクライアントが参加できるようにいかにしていくことができるかが、作業療法士の大きな介入目標である。本研究の結果から、頻度の少ない作業療法の実践で作業参加を促す知識として以下のようなことが得られたと考える。

- 1) 適切な難易度の IADL 領域の作業であれば、何度か繰り返して遂行するよう自己練習を促すような指導を行うことで、作業従事への意志が向上し日常参加できるようになる可能性がある。
- 2) 自己練習指導をする際には、1 回目練習時の課題困難感には特に注意を払い、クライアント本人が予想したよりも難しいと感じたときには意志が低下する可能性があるため、何らかの介入が即座に必要なかもしれない。
- 3) 繰り返して遂行することで、日常でその作業へ従事する意味や重要性が変化し、それが従事への意志に影響を及ぼす可能性があり、自己練習を続けるべきかについての指針となるため、自己練習を始める前のその作業の遂行する意味や重要性やその変化についても理解が必要である。
- 4) 自らだけで成長できる可能性を実感したり、自分で工夫をすることの楽しみが得られるような配慮をした遂行練習を行うと、従事への意志が向上し作業参加に結びつきやすい可能性がある。

研究発表

国際協力における「川を描く作業」の意味と効果

吉田美穂

前 JICA 専門家 障がい者支援分野

パキスタン・イスラム共和国

札幌医科大学保健医療学部研究科

【はじめに】 国際協力の仕事は日々未知なことに出会い、カルチャーショックを経験し驚きと感動を体感できる非常に面白い仕事である。様々な異なった文化背景を持つ人たちとの出会いは新鮮で、私たちの知らない価値観を学ぶことが出来る格好の機会でもある。しかし、初めのころの様々なカルチャーショックは楽しみであるが度重なると、相手のことが理解できない苛立ちとなり、お互いのコミュニケーションの難しさと、当初の目的であるカウンターパートへの技術移転の困難さに頭を抱えることになる。今回、岡山の作業療法士が開発した「川モデル」と呼ばれる分析ツールを用いて、パキスタンとヨルダン、シリアで活動する青年海外協力隊の隊員OT、PT、養護教諭、コンピューター・インストラクター、ソーシャル・ワーカーなどへ、彼らのカウンター・パートとクライアントの分析ワークショップを実施した。

【分析ツールとしての「川モデル」】 発表者は「川モデル」を1) 作業をおこなう対象者を分析するツール、と2) それに向き合う援助者の対象者（カウンター・パートやクライアント）と向き合う自分を分析するツール、と位置づけて用いた。このツールを用いることで、対象者の抱えている様々な困難、生命力、生活観、能力、外部環境などを「岩、水、流木、すきま、側壁」の比喻として対象者の状況を分析し視覚的にあらわし、自分の対象者への見方を知り、聞き手に対象者の曖昧な部分を共有してもらえ説明をすることが出来る。

【対象】 2005年6月と7月の2回、パキスタンで活動する青年海外協力隊員（OT、PT、看護師、助産師、養護教諭、コンピューター・インストラクター）10名にカウンター・パートや協力活動で接する症例に対する分析を目的にワークショップを2回実施した。また、同じ目的で11月にヨルダン、とシリアの協力隊員10名（OT、PT、養護、手工芸）に1回のワークショップを実施した。

【方法】 発表者がツールとしての「川モデル」の説明と、実際の使用例をパワーポイントで紹介した。その後、参加者に実際に「川」を描き、説明をし、他の参加者からの質問やコメントをもらった。その後、メールにより参加者からのアンケート調査をおこない、20人中10人から返答があり、ヨルダン、シリアの協力隊員からは

現在もメールの返答を待っている。

【結果】 「川」を描いた協力隊員の感想は一往に、「描いてみて、モヤモヤがスッキリした」というコメントであった。「日々の活動は、当然言葉もままならないし、価値観がまったく違ったりしますよね。何が問題で、自分にできることは何か、うまくまとまらず考えが堂々めぐりしてしまうことがあるので、*・中略・*自分自身気持ちに整理がつくから。不変なものに執着するより、何が出来るかという可能性を考えながらの活動を考えた方が自分も楽しいと思うから。」この感想は「川」を描いた協力隊員の代表的なものであり、異文化の中での協力隊活動でそれに向き合う自分を見つめ直す機会となっている。そして、「川」の発表者と参加者は共通点の多い体験を共有し、自分たちの協力隊活動としての「作業」の意味を捉え直している。

【まとめ】 「川」を描くことにより、カウンター・パートやクライアントを援助者である自分がどのように見ているかを認識することが出来る。異文化の中で、モヤモヤと曖昧模糊とした現状をあいまいな部分は残したまま、対象者の状態を自分として収まりの着くまとめによる理解が「川」を描くことによって可能になる。作業療法士が今後、国際協力の場に参加するときに、「川」を描く作業をカウンター・パートやクライアントと向き合う自分を知り、経験を他者と共有する有用なツールとして発展させていく必要があると考える。

作業科学に支えられた作業に焦点を当てた実践

港 美雪

吉備国際大学保健科学部作業療法学科

はじめに

現在、私は補助指導員として作業所に関わっている。対象者の作業の問題に向き合い、「作業」を十分に活用する視点を持ちながら、対象者の健康的な生活、さらには社会環境の発展に寄与できる取り組みを目指している。今回の作業科学セミナーではこの取り組みについて、活用した作業の知識（作業科学）にもふれながら報告したい。

作業の問題を見つけること

私はニーズを把握した後、「利用者の希望につながるように毎日を充実していくための支援」を利用者に申し出た。面接ではCOPM（カナダ作業遂行測定）やOSA（作業に関する自己評価）などの、作業の問題を見つけ対象者と共に取り組み、主体性を引き出すことができる評価法を活用した。面接の結果「満足できることをもつと

たい」,「将来社会に出ていくための準備をしたい」,「仕事をしていきたいけれど自分が何をしたいのかわからない」,「会話が苦手な仕事をするに積極的になれない」,「お金になる仕事をしたい」等,大切だが十分できていないし満足していない作業の問題について明らかになった。

作業を充実することへの反論

それぞれの対象者と“なぜ作業の問題が起きているのか”,“解決するためにはどのような方法が可能か”の話し合いに取り組んだ。その後の対象者の目標はそれぞれ異なるが,地域において働く機会や体験することの必要性,同時に社会環境への介入の必要性が共通していた。そこで作業所関係者の会議において,利用者の目標達成のため,地域の中で働く機会を充実する取り組みが必要であると発言し具体的に提案した。その後作業所と社会福祉協議会との業務委託契約により利用者が地域の高齢者住宅において清掃を週1回2時間,2名で行うという機会を得ることができた。また時給500円という委託料も決定した。契約成立に感動する声は多かったが,作業を充実する取り組みへの反論がなかったわけではない。「地域での活動機会を広げることは作業所の役割ではない」,「地域での活動を広げることがストレスになるのでは」,「自宅でのそうじをしていないのに仕事としてできるのか」などの疑問は取り組みの中で出されていた。

作業科学を参考に作業充実のよさを説明すること

ICF が採択された現在でも,病状安定を優先する支援方法が中心の精神保健領域の現場では,作業を充実する支援方法は,驚くほど頻繁に反論を受ける。もしも作業療法士が,作業を充実することを通して支援したいと考えるならば,そのよさを説明できる準備が必要かもしれない。私は,“なぜ行おうとする支援方法が重要であるのか”の説明をその都度,作業を説明することによって行ってきた。“作業がどのように障害改善と健康的な生活に影響を与える可能性があるのか”や“人間が作業を通して様々な技能を習得している現象”などの作業の知識を参考に作業をすることのよさを説明する試みである。その結果,「地域における働く機会は必要だ」と簡単に作業充実のよさが理解される場面もあるが,答えが出なくなる場面もある。しかしどのように作業を充実することがよいのかを悩み答えが出せない状況は,これまで作業充実をやめさせるという方法のみが正解であった状況からは,大きな変化が起きているのではと,作業の説明の影響を感じている。

おわりに

作業に焦点を当てた実践として,対象者にとって重要

性の高かった生産的な作業領域の問題に対する取り組みについて報告した。今後はさらにこの問題への支援も進めながら,他の作業領域の問題に対しても作業の知識を生かして取り組んでいきたい。作業について語ってみると,当たり前のことを言っていることに誰もが気づく。しかし当たり前の現象もとても複雑で捉えることは難しく,作業科学はその説明を可能にし,作業に焦点を当てた実践を支えてくれる。これからも作業科学を生かし,当たり前の現象を語り,当たり前の作業を支援し,様々な困難を“作業をしながら幸せになっていく”ための支援プロセスにつなげていきたい。そしてさらに対象者が作業をしながら幸せになっていく姿や社会環境が発展していく姿を捉える取り組みにも挑戦していきたい。

脳血管障害を経験した男性の障害適応の過程

—作業の視点からの分析—

西野 歩

(専) 社会医学技術学院 作業療法学科

I 問題提起

脳血管障害を経験した人が障害に適応していく過程において,作業がどのように寄与するかを明らかにすることにより作業療法介入のあり方を吟味する必要がある。

II 目的

本研究の目的は,51歳男性の障害適応の過程を分析し,作業がどのように障害適応のプロセスに寄与したかを提示することである。

III 先行研究

身体障害者の心的回復過程は,障害受容という語で表現されてきた。障害受容という語が医療者からの恣意性を指摘されていることから,これと区別し本研究では障害適応という語を使用する。

Dubouloz(2004)は,RAの研究参加者は自己定義がネガティブとなるが自尊へと再構築していく過程で作業バランスの再確立や活動の修正が必要であると示した。Sharon(2005)は,脳卒中をもつ女性に対して調査し,身体障害を持つということは人生と生活の優先事項を再評価する機会であると述べた。

IV 方法

対象は51歳男性。半構造的面接形式のインタビューにて情報収集をし,本人了解の元MDレコーダーにて録音をした。事例が指定する場所にて1時間半のインタビューを行った。質問は,発症から現在までの様子とどのような作業を経験したかを尋ねるものであり,語りの中の出来事・作業を経験した際,自分をどのように考えてい

たかを質問した。データの分析は逐語録を作成し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。

なお、本研究は東京都立保健科学大学倫理委員会の承認の下実施した。

V 結果と考察

事例は、発症当事「衝撃」を受けたが、非麻痺側である非利き手での字の練習を開始することで復職という「目標への接近」を試みた。しかし、復職後通勤の困難さ、ゴルフ・飲み会に行かれなくなることで弱くなった職場の人との親和性を感じ、自身に存在したスティグマが影響し、「装具が象徴する障害への落胆」を経験し、自己認識は否定的なものとなった。自己認識が高まった契機は、スティグマを象徴する装具を外すための手術、新たな仲間とのスキーという作業を介しての強い親和性の経験と継続、新たな作業への挑戦と獲得であった。現在は、自己を障害者であるという認識はなくなるに至っていた。

VI まとめ

1. 51歳男性の脳卒中発症から21年間の障害適応の過程をグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。
2. 結果、作業の経験と環境の変化を通して、自分を障害者と認識していないに至ったことが明らかになった。
3. 本研究により作業が自己認識の変化に影響を与え、障害への適応に促進的に働きかけることを作業療法士は再確認できる。
4. 本研究は一般的な脳卒中後の障害受容過程に汎化する際には限界がある。作業が与える障害適応への影響を今後さらに追及していく必要がある。

高齢期の‘場所’作りと作業

—意味ある作業を行うための‘場所’とは？—

坂上真理

札幌医科大学保健医療学部

私は、高齢者を入居対象とした軽費老人ホームで‘場所’と作業の関係性に焦点を当てたフィールド調査を行っています。第8回作業科学セミナーでは、‘場所’の意味に着目し、高齢期の生活再構築過程に認められる「与え合う‘場所’」について報告しました。

私達が、通常場所という場合には、「特定の位置」のことや「空間の特定の部分とその空間を占有しているもの」を示します。しかし、場所という言葉は多様な文脈で用いられ、上記以外にも物理的側面に付与された意味や個人の経験を示す場合 (Relph E, 1999; Tuan Y,

1977) があります。作業科学においても、「場所は作業することで形成される空間の経験 (作業的空間; occupational spatiality) である」(Zemke R, 2004) というように、意味的側面に着目した‘場所’の定義が報告されています。このような‘場所’の定義や場所が多様な文脈で用いられることの背景には、「作業の形態・機能・意味は場所の影響をうけ互いを分けて考えることはできない」(Hamilton T, 2004) といった指摘に示されているように、作業と場所の互いの結び付きの強さや絡み合いの複雑さがあげられます。以上をふまえ、本研究では‘場所’を「作業・人・(物理的側面としての) 場所が互いに関連し合い、その過程の中で場所が意味付与される現象」と定義し、物理的側面として述べられる場所とは区別して考えています。

ところで、「人は自分の好みの作業を継続的に行うために、それを促進する生活環境を選んでいる」(Carson M, 1996) ことや、作業的存在である人々は「場所を作り維持する行為、すなわち場所作り」(Zemke R, 2004) を行っていることが指摘されています。作業療法では対象者の「意味ある作業」の遂行が支援されますが、本研究では「対象高齢者は意味ある作業を直接的に、あるいは間接的に支える‘場所’作りを行っている」と考えました。実際に、2000年より断続的にフィールド調査を実施しているAケアハウスでは、多くの入居者に共通する‘場所’が認められました。また、入居者の作業遂行の様子を聞き取り調査していると、「忙しい (だけど、充実している)」や「体をもてあましていて、何をしたら良いかわからない」等といった時間に関する認識が多数認められました。さらに、「場所」と時間認識には何らかの関連性が伺われました。そこで、さらに詳しく検討するために、1) 意味ある作業の遂行を支える‘場所’とはどのような特徴をもつのか、2) 意味ある作業の遂行と‘場所’はどのように関連しているのか、といった研究設問をたて調査を進めました。データ収集はAケアハウスでの参与観察と理論的サンプリングによって選んだ12名の半構造化面接によって行い、データ分析にはグラウンデッド・セオリー法の継続比較法を用いました。

その結果、カテゴリーとして「作業的‘場所’のカテゴリー」、「作業バランスの時間的認識カテゴリー」が認められました。さらに、「作業的‘場所’のカテゴリー」には、前回の作業科学セミナーで報告した「与え合う‘場所’」の他に「受けとめられる‘場所’」と「馴染みの‘場所’」の3つの‘場所’の意味が認められました。それぞれの‘場所’は、成員間の関係性、時間性 (歴史性)、空間や構成員の開放性によって特徴付けられていました。「受けとめられる‘場所’」は保護的な意味合いが強く、情報提供者はそこで

安心感や安全感といった情緒的体験を得ていました。「与え合う場所」と「馴染みの場所」では、自分自身が能動的な働きかけを行うことによって、自己確認や自己の社会的位置づけを確認していました。その他、「作業的場所」の「カテゴリー」と「作業バランスの時間的認識カテゴリー」を媒介するカテゴリーや場所の構築に戦略的に関与するカテゴリーが認められ、セミナーの中で併せて報告いたします。

なお、この調査の一部は、北海道高齢者問題研究協会の平成16年度調査研究事業として実施しました。

健康増進教室で自分の能力に目覚めたAさんの作業を通じてみてきたこと

西上忠臣, 近藤敏

県立広島大学保健福祉学部作業療法学科

北川美智子

県立広島大学大学院総合学術研究科保健福祉学専攻

【はじめに】現在、私たちは三原市内の糸崎町における健康増進教室を実施している。事例を通じて作業を中心に介入を行った効果について報告する。

【対象者】糸崎町(人口3,728人・高齢化率35.7%) 駅西地区の住民に対して回覧板により健康増進教室の説明会の呼びかけを行い、参加登録した30名(女:男=18:12 平均年齢73.2±6.3歳)に介入を行った。

【方法】作業ニーズ評価: 今回の作業ニーズの評価は、COPMを改良して目標シートと名称をつけて作業上の目標を作業ニーズ評価とした。目標シートは「自分がしてみたいこと」、「現在しているけど困っていること」を中心に集団で自己記入式で実施した。その結果、遂行度スコアは4.29±2.01点、満足度スコアは3.91±2.32点だった。

プログラム開発: 目標シートから作業ニーズは133項目挙げられ、カテゴリー化していくと34項目の作業ニーズにまとめられた。まとめられた作業ニーズから14個のプログラムを「関心のあることチェック」としてアンケートを行い、「ものおぼえを良くする方法」「うまく自分の気持ちを伝える方法」「聞こえづらいことへの対処法」「相手に伝わりやすい文章の書き方講座」「歩き方講座」「整理整頓術」を実施することとした。

プログラム提供方法: 今回はプログラム実施期間8回しか持てないため、6回でプログラムのすべてを行い、これらの中から生活に取り入れられる作業について振り返っていくこととした。介入期間は平成17年7月28日～平成17年12月8日である(現在実施中)。

【参加者Aさんの作業上の変化について】Aさんは糸崎町内で50年以上居住している73歳の男性である。現在は妻、長男夫婦と同居しており仕事を定年退職した後は年金生活を送っている。開始前に行った目標シートは表のとおりであった。プログラムには毎回欠かさず参加し、グループディスカッションや発表などを積極的にこなし、与えられた宿題も毎回確実に実施する熱心な参加者である。Aさんに対して今回のプログラムの効果を知るために目標シートの再評価を行うインタビューを実施し、それまで行っている作業にどのような変化が生じたのかを明らかにした。Aさんの目標シートの点数は表のように変化した。散歩の作業: Aさんはプログラム開始前にも散歩を日課として1日に1回行っていた。開始後は、人と出会い会話をし、景色を楽しみ、妻とスーパーで待ち合わせをして共に歩き、出来事を帰宅後に妻と会話することで、散歩した後の生活も変化していた。散歩の作業は、それまでの健康のために歩くという意味に地域との交流や妻との交流という意味が付与されていた。炊事の作業: 開始前には全く行っていない作業であったが、微妙な味付けを楽しみ、妻の身体的な負担を考慮して生活の中に取り入れていた。人の話を近くで聞く: 自分から率先して聞こえづらいことを周囲の人に伝える努力をし、さらに散歩の中にも近所の方々と話す中で聞こえづらいことに対する挑戦をしていた。妻との旅行: 今回の期間中には達成されなかったが、妻といつかは旅行に行くという目標を持ち、計画をたてるだけで遂行度、満足度ともに向上していた。目標シートで挙げられた作業ニーズ以外にも、地域の祭りに参加したり、講演会などの行事に参加したりと作業の範囲が拡大していた。これらのように、今回のプログラムの結果、Aさんの作業には、地域との交流とすることで多くの意味が取り入れられ、以前行っていた作業を再び行うようになり、さらに作業を行う場が拡大していった。Aさんはプログラムを通じて生活を再構築していた。

表: Aさんの目標シートの変化

作業ニーズ	遂行度 (前)	遂行度 (後)	満足度 (前)	満足度 (後)
炊事が上手になる	3	7	2	9
妻と散歩に行きたい	3	6	3	8
妻と旅行に行きたい	1	3	1	6
人の話を近くで聞く	4	10	3	10
書くことが嫌い	2	9	2	9

日本作業科学研究投稿規定

(2008年6月20日付)

1. (資格) 投稿者(筆頭者)は原則として本研究会会員とします。ただし、依頼原稿についてはこの限りではありません。筆署名は5名までとし、それ以外は謝辞に含めるようにしてください。

2. (論文の種類と内容) 投稿原稿は作業科学の研究推進、学問的発展に寄与するもので、未刊行のものに限ります。論文の種類は次の通りとします。

- (1)総説 研究や調査論文の総括および解説などとする。
- (2)研究論文 明確な構想に基づいた研究調査結果をまとめたもの。事例報告も含まれる。
- (3)短報, 資料など
- (4)書評, 論文抄録など
- (5)その他 編集委員が適当と認めたもの

3. (論文の採択) 投稿原稿の採択および編集は編集委員が行います。場合により、加筆、修正をお願いすることがあります。また編集委員会の責任において、多少の字句の訂正をすることがあります。

4. (投稿原稿の提出先) 原稿は、研究会機関誌事務局宛に投稿してください。

原稿はできるだけ文書ソフト(Microsoft Word, 一太郎等)を使用して作成して下さい。紙に印刷した原稿を一部研究会機関誌事務局に郵送してください。同じく原稿のファイルを電子メールで送るか、USBメモリ(後日返却いたします)を郵送してください。採択の可否は編集委員会から連絡いたします。

5. (編集委員会) 投稿原稿の審査・採択など、編集・発行に必要なことがらを行うため、編集委員を置くこととします。編集委員会には、編集委員長を置き、編集委員は委員長の指名によって任命します。

6. (掲載費用) 採択された投稿原稿の図ならびに表のうち、改めて作成する必要がある場合、および、別冊については、当分の間、投稿者の実費負担とします。

7. (その他) その他の必要な事項については、編集委員会で決定します。

8. (投稿の手続きについて)

(1)投稿の連絡:投稿を希望する方は最初に電子メールで研究会機関誌事務局まで連絡をください。投稿に関しての問い合わせも同連絡先にしてください。

(2)執筆形式の確認:後出の執筆要領にそっていることを確認してください。

(3)郵送:筆頭著者は原稿(希望する方はUSBメモリも同封。メールでファイルを送りたい方は紙面原稿のみ)を簡易書留で下記宛てに郵送してください。

<研究会機関誌事務局>

〒891-0111 鹿児島県鹿児島市小原町8-3

介護老人保健施設 愛と結の街

村井 真由美

TEL:099(260)6060 (代)

FAX: 099(284)5689

E-mail:mmurai@mx2.aitoyui.com

執筆要領 (2008年6月20日付)

投稿原稿は以下の要領に従って記載して下さい。

1. 原稿は和文、欧文(英文を原則とする)のいずれかを使用し、横書きにして下さい。

和文原稿は、A4サイズで一頁40字×30行の体裁で打ち出してください。枚数(本文)は論文の種類に従って以下の通りとします。

- ①総説:14枚程度(図表を含む)
- ②研究論文:14枚程度(図表を含む)
- ③短報, 資料, 書評など:4~7枚程度(図表を含む)

漢字は必要ある場合以外は当用漢字を用い、かなは現代かなづかい、送りがなを用い、句読点を明確につけて下さい。改行の場合は1字あけて書き出して下さい。

欧文原稿はA4版の用紙にダブルスペースでタイプまたはワープロで打ち出し、上下左右に3cm程度の余白をとって下さい。枚数は和文原稿の枚数に準ずるものとします。

図表は印刷面積によって原稿枚数に換算させていただきます。

2. 論文の表題は内容をよく示すものにして下さい。
3. 300字程度の要旨と、内容を示す適切な4つ以内のキーワードをつけて下さい。要旨は日本語論文では、英語の要旨を、英語論文では、日本語の要旨をつけてください。
4. 表紙(第1枚目)上半分には、表題、著者名を書いて下さい。なお、表題、著者名、著者タイトル、所属に英文を付け加えて下さい。下半分には、原稿の枚数、図表の数、編集者への希望などを記載して下さい。
5. 著者名は、和文のときは「・」で連ねて下さい。ローマ字名の書き方は、名の頭文字を大文字、残りを小文字にして、姓はすべて大文字にして下さい。
6. 原則として、本文は緒言、方法、結果、考察(論議)、要約(結論)、謝辞、文献の順で記載して下さい。ただし、論文の種類によっては必ずしもこの限りではありません。
7. 表の原則は本文と別紙(A4版の用紙)を使って作成し、一括して原稿の末尾に添え、本文中の欄外余白に挿入箇所を赤字で指定して下さい。
また、表の番号と表題は表の上に「表1」、「Table 1」のように書き、表の説明は表の下に入れて下さい。
8. 図の原稿は、本文とは別紙とし、そのまま使用できるように白紙または青色方眼紙を使って墨書し、一括して原稿の末尾に添えて下さい。また、図の番号と表題は図の下に、「図1」、「Fig.1」のように書いて下さい。図に関する説明は本文と同じ原稿用紙を用い、図ごとに改めて下さい。
特に必要があれば、図は印刷のときの縮尺を明記し、掲載する部分を「枠」で示すものとして下さい。
9. 和文原稿で外国語を原語で記載するときは、固有名詞やドイツ語の名詞などを除き、小文字で記載して下さい。
10. 本文中の人名は、姓のみを書き、敬称は省いて下さい。欧文綴りのときは、頭文字を大文字、その後を小文字にして下さい。
11. 本文中の文献引用の形式は、著者名の後に文献欄の番号と対応させた番号をつけて下さい。この番号は小文

字で肩番号にし、)をつけて下さい。(例:5)。順番は引用した順またはアルファベットの順によって番号をつけて下さい。

引用文献の書き方

著者名は、5名までを記載し、6名以上は“他”とすることを原則とし、表記の形式は以下の例にならってください。

①雑誌の場合

文献番号) 著者名:論文表題. 雑誌名, 巻:p~p, 発行年(西暦).

例)

- 1) 吉川ひろみ:作業療法における「作業」の変遷. 作業療法ジャーナル, 39(12):1160-1166, 2005.
- 2) Clark F. Carlson M. Zemke R. Frank G. Patterson K. et al: Life domain and adaptive strategies of a group of low-income, well older adults. Amer J Occup Ther 50:313-321, 2004

なお、雑誌名の省記法は慣用に従って下さい。

②単行本の場合

文献番号) 著者名:書名, 版. 発行社名, p-p, 発行年(西暦).

例)

- 3) 浅海奈津美, 守口恭子:老年期の作業療法. 三輪書店. 2003.
- 4) Clark F, et al (著), 佐藤 剛 (監訳):作業科学—作業的存在としての人間の研究. 三輪書店. 2000.
- 5) 潮見泰蔵:「健康観」に関わる評価指標の臨床活用. 内山靖・他(編), 臨床評価指標入門—適用と解釈のポイント, 共同医書出版社, 294-296, 2003.

③同一著者のものが2つ以上ある場合は、年次順に配列して下さい。

④同一論文からの引用が並ぶときは、同誌(*ibid*)と略して下さい。

「作業科学研究」編集委員会

委員 村井 真由美（介護老人保健施設 愛と結の街）
同 西野 歩（専門学校社会医学技術学院）
同 港 美雪（吉備国際大学）
同 高木 雅之（県立広島大学）

作業科学研究 第3巻 第1号

2009（平成21）年11月13日印刷

2009（平成21）年11月20日発行

編集者：日本作業科学研究会機関誌編集委員会

鹿児島県鹿児島市小原町8-3

介護老人保健施設愛と結の街リハビリテーション部内

発行者：日本作業科学研究会

事務局：北海道札幌市中央区南3条西17丁目

札幌医科大学保健医療学部作業療法学科坂上真理研究室内

電話 011(611)2111（内線2885／2983）

FAX 011(611)2155

URL: <http://www.amrf.or.jp/jssso>

印刷：聖恵授産所

広島県竹原市忠海中町3丁目16-1